2004



東京大学教養学部東京大学大学院総合文化研究



GRADUATE SCHOOL OF ARTS AND SCIENCES THE UNIVERSITY OF TOKYO. KOMABA

GRADUATE SCHOOL OF ARTS AND SCIENCES THE UNIVERSITY OF TOKYO, KOMABA

[駒場]2004



表紙に使われているロゴデザインは、

平成11年に、教養学部創立50周年を記念して、

東京大学大学院総合文化研究科・教養学部の新たなシンボルとして作成された。 東京大学の伝統的なシンボルであるイチョウを3枚重ねることにより、

学部前期・後期・大学院の3層にわたる教育の融合と創造、 学問の領域を越えて世界に発展する駒場の学問の未来をイメージしている

表紙について

「魚市場」 満谷国四郎(1874-1936) 1915年 147×196cm 油彩、カンヴァス

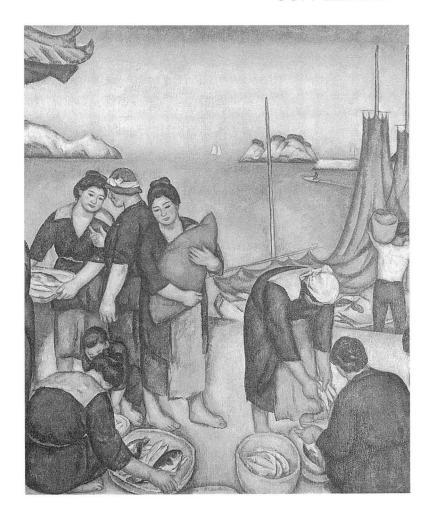
作者の満谷国四郎(岡山県出身)は、明治美術会、太平洋画会、 帝国美術院などに所属していた近代日本の著名な洋画家である。

この絵画は、1915年(大正4年)に開催された第9回文展に、「行水」、「島」と共に出展されている。同年、作者により第一高等学校へ寄贈され、図書館閲覧室にかけられることとなった。1935年(昭和10年)、第一高等学校は本郷校地(現東京大学農学部)から駒場校地(現東京大学教養学部)へと移転するが、新設された図書館の閲覧室東壁上部(現美術博物館展示室)にもかけられていたことを示す写真が現存している。

1976年と2004年の2回にわたる修復の後、東京大学駒場博物館(美術博物館・自然科学博物館)にて開催された特別展「第一高等学校創立130周年記念・駒場の歴史展」(2004年11月1日-12月17日)に出展された。

GRADUATE SCHOOL OF ARTS AND SCIENCES THE UNIVERSITY OF TOKYO, KOMABA

[駒場] 2004 SUPPLEMENT





東京大学大学院総合文化研究科 東京大学教養学部

まえがき

国立大学法人法の成立により、2004年4月1日、東京大学は国立大学法人東京大学として新たなスタートを切ることになった。この制度の導入にあたっては、大学の内外でさまざまな意見が述べられ、大学院総合文化研究科・教養学部においても、法人化法案に対する懸念と反対が教授会の総意として表明された。この法案が大学をよりよくするための最善の選択とは判断できなかったからであり、大学の現在と将来に責務を追う者として、その判断を公けにする必要を感じたからである。

本書「駒場2004」は、大学院総合文化研究科・教養学部が国立大学法人東京大学の部局となって初めての「年報」である。制度が変わっても、駒場の森の豊かさは変わらないし、よりよき未来を目指す責務が私たちにあることも変わらない。いな、その責務はいっそう重くなったというべきであろう。「駒場2003」のSUPPLEMENTである本書は、2004年度の活動報告を記した第一章と、04年4月以降に着任した教員を紹介する第二章を柱とする追補版だが、第一章が昨年の倍近い分量に及ぶように、ここには、新たな制度のもとで、より豊かな駒場を目指して試行を重ねる私たちの姿が記録されている。

駒場に集うすべての人々のために、多くの方々の協力を得て、この書物は編まれた。活用されることを願ってやまない。

2005年2月 広報委員会

I 2004年度における大学院総合 文化研究科·教養学部

1 研究科長・学部長の交代にあたって

大学院総合文化研究科長・教養学部長が、2005年2月16日に浅島誠前学部長から木畑洋一に交代しました。浅島前学部長は、大学において教育がもつ意味の大きさを終始唱えつづけられ、東京大学の教育で駒場キャンパス(より正確には、生産技術研究所や先端科学技術研究センターがある駒場 II キャンパスと区別するため駒場 II キャンパスと呼ばれます)が担っている重要性を、東京大学の内外で広く再確認させるために、尽力されてきました。私も、浅島前学部長のそのような姿勢を受け継いでいきたいと思っています。

駒場キャンパスは、全国の大学の中でもユニークなキャンパスです。このキャンパスでは、東京大学に入学してきた全員の学生が、進学する専門課程についてさまざまな可能性を模索しつつ最初の2年間(教養学部前期課程)を過ごします。さらにこのキャンパスには、教養教育(リベラルアーツ教育)を重視した専門課程(教養学部後期課程)があり、多くの大学院生が学ぶ大学院総合文化研究科があります。1、2年生の前期課程と3、4年生の後期課程とから成る教養学部は、日本の大学での教養教育を先導する役割を1949年における創設以来一貫して果たしてきましたが、1990年代に全国のほとんどの国立大学で教養部が解体してからは、教養教育を主体的に担う単位としての存在意義をますます高めてきました。また文系と理系にまたがる教育・研究体制をもつ総合文化研究科は、既存のディシプリンを大切にしながら分野横断的な試みを行う大学院としての特色をいかんなく発揮しています。

1、2年生から大学院までの学生と、文系・理系にまたがる教員を擁した駒場キャンパスでは、その利点を最大限に生かした教育や研究を行う努力が常に払われています。それは、駒場キャンパスで三つの「21世紀COEプログラム」が進行中であること、2005年4月から教養教育開発機構という新しい組織が本格的な活動を開始することに、よく示されています。

三つのCOEプログラムとは、「融合科学創生ステーション」、「共生のための国際哲学交流センター」、「心とことば――進化認知科学的展開」です。2002年度から始まった前二者も2003年度から開始された「心とことば」も、活発な研究活動を展開し、国際的にも高い評価を得ています。とくに、言語学、認知科学、脳科学など文・理に広くまたがる「心とことば」の研究プロジェクトは、駒場ならではのものといえるでしょう。そして、これこそ駒場キャンパスの強みといえるでしょうが、いずれのCOEプログラムも、そうした研究の成果や、研究のプロセスの息吹を、教養学部の前期課程、後期課程の教育に効果的に反映させています。

教養教育開発機構は、2003年度に「特色ある大学教育支援プログラム」に採択されて活動を始めた「教養教育と大学院先端研究との創造的連携の推進」プロジェクトが発展して作られるもので、21世紀にふさわしい教養教育のあり方を研究・開発し、それを駒場で実践するとともに、全国に、さらに国際的に発信していくことをめざします。これは、前述したように日本の大学における教養教育を常に牽引してきた東京大学教養学部の実績をふまえた、新たな取り組みで、最初の特定課題としては、ライティングセンター開発とサイエンスラボ開発があげられています。

駒場の教養教育の国際的な発信のための手がかりとしては、2004年秋に、中国の南京大学に東京大学リベラルアーツ南京交流センターが設けられましたし、東京大学が北京大学、ソウル国立大学校、ベトナム国家大学ハノイ校と、1999年から開いてきている東アジア4大学フォーラムでも、教養教育をめぐる交流がつづけられています。教養教育開発機構の発足により、こうした動きがいっそう本格化することになるわけです。

このような新たな試みも含みながら、駒場キャンパスでの教育・研究活動は一段と飛躍しようとしていますが、これまで駒場キャンパスで行われてきた教育・研究が、大学評価・学位授与機構によって高く評価されたことも、ここで述べておきたいと思います。2002年度に行われた教養教育の評価(前期課程の教育が対象)と2003年度に行われた総合科学の評価(後期課程

と大学院の教育と、大学院の研究活動が対象)の結果にそれは明らかです。

こういった評価にも勇気づけられながら、私たちは駒場キャンパスをもっと知的エネルギー にあふれたところにするためのいろいろな取り組みをしようとしています。

教育面では、2006年度から実施される教養学部前期課程の新しいカリキュラムが作られています。1993年にそれまでのカリキュラムを抜本的に変えて作られた現行カリキュラムの基本的骨組みのもとで中身を相当変化させた新カリキュラムによって、文科1類から理科3類までの各科類の特色をより明確にしながら、幅広い教養教育を行っていく体制が作られます。大学院では、2004年度からはじまった、文理をこえて専攻を横断する新たな教育コースである人間の安全保障プログラムの発展が図られます。また、アメリカ太平洋地域研究センター、寄附講座として運営されているドイツ・ヨーロッパ研究室(DESK)、上述した東アジア4大学フォーラムなどを教養教育開発機構とも有機的に連携させて、アジアの中、世界の中での駒場キャンパスの存在意義を高めるための仕組みを創出することも考えられています。

充実した教育・研究を行っていくための施設の改善も重要な課題となっています。2005年春には、駒場での福祉厚生の設備を格段と向上させることになるコミュニケーション・プラザの建設が始まり、老朽化している教室棟の改修も着手されますが、改善すべき施設はまだまだ多くあります。そのため、教室環境向上のための努力や、大学における教育・研究の要となる施設である図書館の拡充(2期棟の建設)に向けた動きが強められます。

2004年4月から国立大学は法人化し、新たな体制のもとで大学運営はなされています。しかし、 教員・職員・学生が密接に協力して生き生きとした教育・研究を行いうる大学を作っていくと いう課題に変わりはありません。私も、研究科長・学部長として、その課題を精一杯追求して いきたいと思っています。

(木畑洋一)

2 国立大学の法人化について

戦後55年間続いてきた国立大学が廃止され、各大学は2004年4月1日から国立大学法人となった。東京大学も今までの国立大学東京大学から国立大学法人東京大学となった。この一年間足らずを振り返って、東京大学で起こっている法人化の諸問題について述べてみたい。

1. 法人化前の総合文化研究科・教養学部

a. 法人化が国会で審議され、可決された2003年7月、東京大学の研究科・学部の中で唯一、総合文化研究科・教養学部では、この法人化に対する反対声明が教授会総意として出された」。私たち教養学部としては今回の法人化が、色々な面で不透明なものであり、教育と研究の両面で質の低下につながることを危惧したのである。

日本において大学が学問の府として高等教育と研究を支えてきたことに対する自負をもちながら、将来に対する懸念を表明したのである。

b. 学部長室の対応

法人化法が国会で決定されると、大学部局としても教育と研究の低下を招かないようにする ため、法人化への対応に一年前からとりかかった。主なものは次の通りである。

まず、会計面から法人化がどのような影響を及ぼすかについて検討するために、専門の会計 士を招いて「国立大学法人化後の会計制度」についての説明を教授会において伺った。これは 企業会計の導入がどのようなものであるかを教授会構成員に認識してもらうためであった。ま た、安全委員会やハラスメント相談員にも法人化後の大学のあり方についての説明を行っても らった。このようにして教員の意識改革と、法人化後におこると思われる労働基準法が適用さ れるようになる職場の安全基準への対応をすぐに始めたのである。

2. 法人化後の総合文化研究科及び教養学部

a. 大学本部の対応

法人化後の教授会では、科所長会議で次々と決まる事項について報告を行ってきたが、大学本部の対応はともすれば後手にまわっており、唐突とも思われる改革案が出されることもあった。過渡期とはいえ、健全な大学運営が望まれるところである。

b. 人員管理と財務管理

法人化にともなって、総長室による教員の定員管理が大変厳しく行われた。法人としてはある程度仕方ないとしても、各学部に対して実定員が明確に示され、採用可能数が決められた。総合文化研究科・教養学部にとっては、これによって定員は減ったものの、今まで不明確で宙に浮いていた教員数が研究科・学部所属の教員として加わって明確化されたことによって、長年の懸案が整理された。こうして大学本部管理分を定員とするように申し入れ、一定枠を確保することができたといえる。ただし、全体としては、教員数管理が大変厳しいことには変わりない。また、財務関係においても、従来の細目はなくなり、運営費交付金は物件費と人件費という2つの袋で配分され、それをどのように使うかについては、各研究科・学部に任された。総合文化研究科・教養学部としては、教員一人一人の教育と研究のアクティビティーを下げない

¹ 決議を出さなかったのは、教養学部の慣例に従ったものである。

ために学部長裁量経費を全て教員と教育の質の向上に使うことを教授会で宣言し、それを実行に移した。

c. 安全性の確保

特に、広域科学専攻として研究・教育環境の安全性確保は大きなテーマであった。これについては、法人化の3年前からかなり自主的に取り組み、広域科学に配分された予算を使ったり、学内安全委員会の協力を得て整備したりしてきたが、長年の弊害は一挙に整備できるものではなかった。特に、定年退官した先生方の残していかれた薬品や備品の処理には膨大な時間と資金を費やした。しかしそれでも、法人化に伴って、学内でも最も早く対応し、安全対策が遂行されたと言える。

また、学内全体の建物についていえることであるが、廊下に一部、色々な物品が置かれていたが、消防法によって撤去させられた。廊下から研究室等に入れられるものもあるが、それが困難な場合もある。この原因の1つは、総合文化研究科・教養学部では教官1人あたりに割り当てられた部屋の面積が著しく少ないことに原因している。特に理系では、大学院重点化によっても、面積が増えることはなかった。それゆえ、研究科・学部としても収納スペースの問題に苦心し、学内共通スペースにロッカーや冷蔵庫などを移動させることによって、消防署による査察を無事終えることができた。これには、多くの教官が自助努力をおこない、協力してくれたことが大きかった。

d. 構内の整備

駒場キャンパスでは法人化前後から建物の改築や新築がなされてきた。まず、旧図書館を改築して事務の統合化と学生へのサービスの充実から行われた。つまり、旧図書館は学術国際交流棟(後でアドミニストレーション棟と学術交流棟)と称すこととなり、それまで101号館にあった総務課と経理課を2階に、旧美術博物館にあった教務課と105号館にあった学生課を1階に移転した。そして、3階に学部長室と会議室を配置した。それによって、事務は風間事務部長(副研究科長)のもとに一元化され、学生は諸手続等をすべて1階で行えるようになった。学生が手続きをする1階のロビーは以前とくらべてはるかに広くなった。さらに情報教育棟南館の二期棟も完成し、情報教育の充実がなされることになった。

美術博物館の建物には、以前は1階には教務課、2階には非常勤講師控室と美術博物館が混在していたが、この建物は駒場博物館として一新され、1階は主として美術博物館、2階は自然科学博物館として駒場の新しい1つの文化の中心となったのである。ここでは、こけら落としてフランスのポンピドー美術館から借用したロラン・バルト展が行われた。続いて「ペリー展」「一高130周年展」など、次々と価値の高い展示会が催された。また、2階の自然博物館では旧制一高時代のレントゲン写真や装置、音を目で見る装置など、駒場で新しく見つかった貴重な装置や品々が数多く展示された。さらにキャンパスの東端には男女共同参画施設として、駒場保育園(NPO法人)が総天然木を使用して建てられた。

これらの他に駒場キャンパスの雰囲気を一層変えたのは、ファカルティ・ハウスの建設である。これは駒場の教員の方々が長年望んでいた駒場キャンパス内で美味しい食事をする場所と外国人宿泊施設の整備を目的としたものである。このファカルティ・ハウスの建物は、III一高同窓会館(和館)を取り壊し、跡地に新しい建物を建築し、隣接する柏陽会館(洋館)を改築して一体化したものである。この建物は前庭の天然木を生かした建物であり、学内外で話題となり多くの人達が集まって食事をしたり、会議などにも使われたりして、駒場の新しい文化を生み出している。

e. 過半数代表と超過勤務

教職員は従来の国家公務員から非公務員になったことにより、労働法の定義する労働者となった。この結果駒場事業所は品川労働基準監督署の管轄に入った。教職員は労働者となったので、教職員組合が組織化され、過半数代議員の選挙および代表者を選出した。初代の過半数代

表には駒場事業所から加藤道夫教授が選出された。月一回のペースで学部長室との会合がもたれている。

また、教員には裁量労働制が適用され、職員には労働法が適用されることにより、規定時間以上働いた時には超過勤務手当を支払う義務が生じた。駒場では、入試、入学、その他ほかの学部とは比べものにならないくらい学生へのサービス義務が生じているので、職員への負担は大きいもので超過勤務時間が大幅に増えていた。こうした中で、どのようにして超過勤務時間を減らしていくのかが課題となり、かなり大きな財政負担となっている。事務員の増員および効率化が求められている。

f. 駒場事業所としての活動 - 駒場連絡委員会等

駒場I(総合文化研究科・教養学部、数理科学研究科)キャンパスと駒場II(生産技術研究所、 先端科学技術研究センター、国際・産学共同センター等)キャンパスは東京大学における1つの 駒場事業所となった。事業所長は浅島総合文化研究科長が兼務することになった。

駒場事業所は駒場連絡会議をつくり、月一回双方のキャンパスでの問題点や改善点が話し合われた。ここでは、緊急連絡網の整備や広域避難所などの問題が整理された。ここには双方の教職員代表者が参加している。また、既に言及された過半数代表者選考も駒場事業所が1つの単位となっている。

他に、衛生委員会が月に1回開催され、産業医の梅景先生を迎えて両キャンパスの安全管理体制のあり方と実施実例、更に裁量労働制への取り組み、健康管理(受診率)、安全巡回報告など、各キャンパスでどのように行われているかについて報告と討議が行われた。

g. ハラスメント防止について

教授会および総務委員会等で度々、セクシュアル・ハラスメントの防止およびアカデミック・ハラスメントの防止が呼びかけられ、各人の注意が促された。また、本部のハラスメント相談室の先生にも教授会等で説明を行っていただき、防止につとめた。しかしながら、いくつかのハラスメントが生じ、本部による処分が1件生じたことは大変遺憾なことである。今後、教職員に対してハラスメントの更なる防止策を講じることが必要であると考えている。

h. 学内外者との協力関係

旧制第一高等学校の創立130周年記念に合わせて、一高同窓会から駒場にいろいろな寄附がなされた。旧一高同窓会館の取り壊しへの協力、寄付金、図書等の寄附をいただいた。大学側としても、一高当時の外国人教師、アベリー先生とプッチーニ先生の胸像とストレンジ先生のレリーフが建立された。

一高同窓会の一部は駒場ファカルティーハウスの一室に「駒場友の会」と同居することになった。また、旧制東京高等学校の同窓会からも寄付金と一部、部屋の借用の申し入れがあり承諾された。

現在はドイツ・ヨーロッパ研究寄付講座の延長、ベネッセからの寄付講座の設立も準備されている。

i. 構内環境

学生および教職員の安全対策として、構内パトロールの強化を委託で行っている。又、教職員や学生に構内清掃への参加を呼びかけ、「禁煙キャンパス宣言」などを行って構内全域を基本的に全面禁煙とし、健康面と安全面への対策がなされた。

各種組織規則および委員会規程の改定等

国立大学法人化に伴い、各種組織規則や委員会規程の改正・整備を行った。特に50以上にの ぼる委員会の委員構成や規程の必要な改定を行うとともに、歴史的経緯によって体裁や表現が 不統一であった点などもこの機に可能な限り統一した。基本的には、従来の内容を大きく変えるものではなく、法人化に伴う役職名や組織名の変更、委員会を規定する親規則の改正に伴う変更などが中心である。また、組織の改編に伴い新たに立ち上げた委員会(男女共同参画支援委員会など)については新規に定めた。なお、従来研究科長補佐(学部長補佐)を規定する規則が存在していなかったが、この機に研究科長室了解事項を明文化しそこに規定することにした。

国立大学法人化に伴う東京大学大学院総合文化研究科組織規則等に基づく規則 等の制定について

- 1 運営諮問会議規則
- 2 総務委員会規則
- 3 アメリカ太平洋地域研究センター規則
- 4 アメリカ太平洋地域研究センター運営 委員会規則
- 5 教務委員会規則
- 6 予算委員会規則
- 7 入試委員会規則
- 8 情報基盤委員会規則
- 9 図書委員会規則
- 10 学生委員会規則
- 11 三鷹国際学生宿舎運営委員会規則
- 12 後期運営委員会規則
- 13 教養学部報委員会規則
- 14 研究棟管理運営委員会規則
- 15 駒場インターナショナル・オフィス運 営委員会規則
- 16 防災委員会規則
- 17 奨学委員会規則
- 18 学生相談所運営委員会規則
- 19 前期教務電算委員会規則
- 20 情報倫理審查会規則
- 21 前期カリキュラム改革委員会規則
- 22 男女共同参画支援委員会規則
- 23 安全衛生管理室規則
- 24 教養教育開発機構規則
- 25 教養教育開発機構運営委員会規則
- 26 教養教育開発機構執行委員会規則

- 27 広報委員会規則
- 28 教育研究評価委員会規則
- 29 建設委員会規則
- 30 前期運営委員会規則
- 31 社会連携委員会規則
- 32 環境委員会規則
- 33 知的財産室規則
- 34 共用スペース運用委員会規則
- 35 国際交流・留学生委員会規則
- 36 放射線安全委員会規則
- 37 核燃料物質調查委員会規則
- 38 進学情報センター運営委員会規則
- 39 放射線施設運営委員会規則
- 40 実験動物委員会規則
- 41 石綿問題委員会規則
- 42 文化施設運営委員会規則
- 43 ヒトを対象とした実験研究に関する倫 理審査委員会規則
- 44 TA委員会規則
- 45 スペース・コラボレーション・システム運営委員会規則
- 46 共通技術室運営委員会規則
- 47 駒場ファカルティ・ハウス運営委員会 規則
- 48 化学物質安全管理委員会規則
- 49 遺伝子組換え生物等の使用等実施規則
- 50 研究用微生物実験安全運営規則
- 51 技術職員組織規則

(浅島 誠)

3 第2回、第3回運営諮問会議の開催

運営諮問会議

大学の教育や研究をめぐる環境や状況は、めまぐるしく変化している。平成16年4月1日に従来の国立大学は全て「国立大学法人」となり、この変化が教育や研究に与えた影響は少なくない。大学院総合文化研究科・教養学部では、教育研究上の目的を達成するための基本的計画や、教育研究活動状況に対する評価などに関する研究科長・学部長の諮問に応じて審議・助言を行っていただく機関として、平成15年度に「東京大学大学院総合文化研究科・教養学部運営諮問会議」を設置し、平成15年11月5日に第1回運営諮問会議を開催した。運営諮問委員は、下記の方々である。



運営諮問委員(任期は平成17年6月まで、順不同)

安藤忠雄(建築家、東京大学特別栄誉教授、東京大学名誉教授)

緒方貞子 (独立行政法人国際協力機構 (IICA) 理事長、前国連難民高等弁務官)

草原克蒙 (拓殖大学副学長、元文部省生涯学習局長)

立花 隆 (評論家)

中村桂子 (IT生命誌研究館館長)

蓮實重彦(前東京大学総長、元東京大学教養学部長、東京大学名誉教授)

森 稔 (森ビル株式会社代表取締役社長)



国立大学法人化を経た平成16年度は、4月以降の大きな変化をにらみながら、第2回、ならびに 第3回運営諮問会議を開催した。

○第2回運営諮問会議

第2回運営諮問会議は、平成16年6月7日(月)16時から18時まで、アドミニストレーション棟3階の大会議室で開催された。

運営諮問会議から、緒方委員、草原委員、立花委員、中村委員、森委員の5名の運営諮問委員が出席され、大学院総合文化研究科・教養学部から浅島研究科長・学部長以下31名の教員、風間事務部長・副学部長以下6名の職員が出席した。

会議では、まず浅島研究科長より、本年4月に国立大学法人東京大学が発足したことについて 説明があった。続いて、蓮實議長欠席のため、草原委員が代理の議長を務めることが提案され 了承された。

今回は、議事に先立ち、キャンパス内施設の視察が行われた。視察は、アドミニストレーション棟1階留学生交流ラウンジ、駒場図書館、1号館(教室棟)、6号館(学生実験棟)、情報教育棟の順に、約30分かけて行われた。

施設見学終了後、まず草原議長から第1回運営諮問会議の審議のまとめが紹介され、了承された。次に、浅島研究科長から第2回運営諮問会議の諮問事項「法人化後の運営について」が示され、これについて議論がなされた。議論の要点は、以下のようにまとめられる。

1) 学部教育拡充に向けた今後の基本指針について

総合的判断力、社会的責任感、地球的・国際的視野の養成という教育の目的をどう捉え、どのように実現すべきか意見交換された。緒方委員から広い国際的視野を持った人を育てるという本部局の方針について高い評価と積極的賛同を得る一方、一段高い「世界に通じる大人」を育てるリベラル・アーツ教育を考えるべきとの指摘を受けた。また、中村委員から「新しい生命観、人間観、自然観、社会観を創る体系的な研究と教育をどう進めるか」、緒方委員から「い



つまでも教養を求め続ける人間をどのように育てるか」などの方針策定の重要性が表明された。

2) 教育の成果に関する目標について

教育の成果に関する目標について、各委員から「教育効果は長い時点で測るべき」であり、 教育の効果や効率に対する過度のプレッシャーやそれらの数値化への要求についての危惧が寄せられた。また、中村委員から、競争原理の導入や企業同様の社会へのアカウンタビリティなど、法人化による新たな要求項目が過度に行われることへの問題点が指摘された。

3) 教育内容等に関する目標について

教養教育は専門課程の準備教育ではないという基本方針堅持の必要性が指摘された。この点について、草原委員より中期目標・中期計画に準備教育的な文章が含まれる一方、歴史・哲学を中心にした幅広い教養や人間性などがあまり強調されていないことについて疑問が表明された。また、森委員から、教養教育はコンピューターの動かし方がわかるといった実用教育であってはならず、基本的教養としての文化的水準の高さを持たねばならないことが指摘された。また、中村委員から流行となっている環境、人間、情報という学科・学部について方向を見失う危険性が指摘され、きちんとした学問的基礎の必要性が指摘された。このためのさまざまなディシプリンと社会的な問題、歴史、哲学などを結びつけた具体的なカリキュラムを教養学部として提供できるか、問題提起がなされた。

4) 教育の実施体制等に関する目標について

予算の枠も使途も制約がある中で法人化後の大学の自主性自立性を発揮するために、積極的に寄付を集めるべきとの指摘が森委員、立花委員からあった。また、図書館や情報教育棟の24時間開館、美術館を含めた文化施設などの優れた運営、国際交流センターにおける東西世界の多様な文化交流の具体的プラン策定など、具体的な実施体制の整備を進めるべきとの意見が数多く出された。一方、立花委員から自然科学関係の実験施設の水準が低く改善が必要であるとの指摘がなされた。

また、今後の大学の姿勢にかかわることとして、草原委員から、法人化は大学改革を進める上での一つのプロセスに過ぎず、将来に対するビジョンを描く見識、それを実行に移す力、そこから生み出される結果に対する責任など、多くのものが大学に問われていることが述べられた。

○第3回運営諮問会議

第3回運営諮問会議は、平成16年10月27日(水)14時から17時まで、アドミニストレーション棟3階の大会議室で開催された。

運営諮問会議から、草原委員、立花委員、蓮實委員、森委員の4名の運営諮問委員が出席され、大学院総合文化研究科・教養学部から浅島研究科長・学部長以下29名の教員、風間事務部長・副学部長以下6名の職員が出席した。

まず第2回運営諮問会議の審議のまとめが紹介され、了承された。次に、浅島研究科長から、第3回運営諮問会議の諮問事項「平成18年度実施の前期課程教育の改革について」が示された。今回の諮問事項は、平成18年度から実施予定の「学部前期課程新カリキュラム」と、同年度入学者から適用する予定の新しい「進学振分け制度」について、①幅広い教養の修得、②専門基礎の修得、③レイトスペシャリゼーションの観点から助言をいただくことである。現在のカリキュラムは平成5年から施行されたものであるが、学問の進展や時代の要請、学生の気質の変化や基礎学力の低下、さらには大学院重点化後の学部教育の変容に伴って、見直すべきいくつかの点が顕在化してきた。また、平成18年度4月から新指導要領の下で学習した高等学校卒業生が入学してくるようになるので、その対応も必要である。本部局では、平成12年以来、学部長のリーダーシップの下に全学的な議論を進めてきたが、平成15年4月には「前期カリキュラム改革委員会」を設置して具体的な改革に着手した。その結果、教養学部と後期課程各学部の緊密な

対話の中で前期課程カリキュラムの改革案がまとめられた。今回の改革の基本は、文科生、理 科生ともに基礎力の要請の強化が基本になり、入学時の受け入れ枠である「科類」の特徴の明 確化とともに進学振分け時の進路選択の幅を広げる工夫が盛り込まれている。その具体的内容 について、兵頭副研究科長・副学部長から詳細な説明があった。

以上を踏まえた運営諮問会議の議論のまとめは、現在作成中であるが、いくつかの意見を以下に紹介する。

まず、立花委員から教養教育の内容の刷新の必要について意見が出された。最先端の学問の内容を大胆に教養教育のカリキュラムに取り込むことが教育の活性化、学生の学習意欲の向上につながるとの指摘があり、さらにTOEFLの利用による英語能力の認定と教育改善、理科の学生に対する英語教育の必要性が述べられた。これについては学部側の出席者から異論も提起され、基礎教育と先端教育の関係、大学における外国語教育の目的などについて議論が交わされた。

また、草原委員からは歴史教育を一層拡充する必要があるという意見が表明された。同様の 指摘は、森委員からもなされた。あわせて、草原委員から、カリキュラムが専門分野に細分化 されている印象をもつことが述べられた。この点は、レイトスペシャリゼーションとも関連す る。多くの委員から、幅広い知的な素地の涵養が今後ますます重要であり、人間形成の場とし て教養教育を一層積極的に位置づけるべきであるとの意見が出された。

最後に蓮實議長から、東京大学の適正な学生規模を再検討する必要、中等教育との連携の必要性などの問題が指摘された。

○今後の運営諮問会議

運営諮問会議諮問委員の任期は2年で、平成17年6月にその任期が終了する。任期終了時には、これまで諮問会議に付託された諮問事項に対する答申がまとめられる予定であるが、これに先立ち6月には第4回運営諮問会議が予定されている。

4 「人間の安全保障」プログラムの立ち上げ

「人間の安全保障」プログラムとは

平成16年度(2004年度)から本研究科の全5専攻の協力の基に「人間の安全保障」を文理横断的に教育する大学院プログラム(修士・博士両課程)を立ち上げた。修士定員16名、博士定員4名に対し、約3倍の出願件数があり、選考の上で修士課程に19名(内留学生2名)、博士課程に4名を受け容れ、教育活動を行っている。

「人間の安全保障」は、21世紀の人類社会の望ましい発展を構想するために提案された、国際社会の新しいコンセプトである。冷戦が終わった1990年代、従来の安全保障と開発援助の考え方では地球上の人々に安心できる暮らしも豊かな暮らしも保障できないとの立場から、国際社会に提示された。90年代末からは、日本が国際社会に貢献できる重要な分野であるとして、日本外交の柱になっている。同時に、「人間の安全保障」はきわめて包括的・多面的であり、ある意味で捉えにくい概念である。そのために、体系だった研究・教育が困難であると同時に、それゆえに体系的な研究・教育が必要であるとの認識が深まりつつあった。

幸いにして、本研究科では、「人間の安全保障」に関して体系的な研究・教育の場を構築するのにきわめて相応しい環境があった。そこで、学部長室のイニシアティブに支えられて、「人間の安全保障」の研究・教育体制が東大全体で認知されることになったのである。

プログラムの特徴

プログラムの基本方針は、大学院総合文化研究科が従来から最も力を入れていた研究者養成に、実践的な要素を加味しつつ、政策や実務に偏らない総合的な能力を備えた人材を養成することである。この意味で、公共政策や国際協力、国際開発といった看板を掲げた大学院教育とは一線を画して、あくまでアカデミックな大学院教育に軸足を置きつつ、新しいコンセプトを前面に出している。すなわち、大学院総合文化研究科の特徴である学際性・総合性・国際性を前面に出して、実務経験が豊富な人や実践的関心が強い人には国際コミュニケーション能力、知的枠組み、理論武装を身につけてもらい、反対に大学や大学院での勉学の経験はあるものの現場を知らない人には臨地実習やインターン経験を積んでもらうことを狙っている。このような趣旨を明確にするため、学位号も修士(国際貢献)・博士(国際貢献)として、従来の学位号と異なるものにした。

教育カリキュラムは、上の独自性を明確にするために、学生は所属する専攻のディシプリンとプログラム独自のディシプリンの両方を受けることが修了要件になるように設計した。すなわちプログラムとして、紛争と和解・共生、平和プロセスと国際協力、文化エコロジー、社会の自立と共同、生命と尊厳、開発と貧困、生存とライフスキル、サステナビリティの戦略という8つの柱を建てて、「人間の安全保障」を本プログラムではどのように構造的に捉えているかを明確にして、それぞれに複数の講義と演習を配置すると共に、修士課程の学生に対しては、人間の安全保障基礎論 \mathbb{I} (夏学期2単位) と \mathbb{I} (冬学期2単位) を必修にした。

なお、多様な人材を養成する趣旨から、入学者選抜方法も、本研究科の入試制度の枠内で、なるべく柔軟に実施することを試みている。具体的には、英語の能力判定へのTOEFLの導入、修士課程社会人特別選抜の夏季実施などである。今後とも、教育体制や入試制度は改善していくつもりである。

国際研究先端大講座という仕掛け

このカリキュラムは、学生にとっても負担が重いが、教員にとってもきわめて負担が重い。 このような仕組みが実現可能になったのは、全専攻を横断する「国際研究先端大講座」という 名称のユニークな大学院専担の講座を設置したからである。そして、そこに所属する教員は、 所属専攻の研究・教育だけでなく、「人間の安全保障」をテーマに掲げる研究・教育の推進(「人間の安全保障」イニシアティブ)にも従事する制度になっている。

どの専攻にも属さない国際研究先端大講座は、要するに、「学術創成分野」と「学際複合分野」 (任期付きポスト)を各専攻に分属する形をとっている。具体的には、学術創成分野については、 言語情報科学専攻に教授・助教授計2、超域文化科学専攻に3、地域文化研究専攻に3、国際社会 科学専攻に3、広域科学専攻広域システム科学系に1の定員が、学際複合分野については、地域 文化研究専攻と国際社会科学専攻に教授各1、言語情報科学専攻と広域システム科学系に助手各 1の定員が割り振られている。この大講座に対して、冒頭に記した学生定員がついているのであ る。

以上の講座構成に対応して、5専攻から選ばれた教員12名に加えて、新たに採用した任期付き 教授2名、助手2名が大講座に所属して研究・教育にあたることになった。さらに、プログラム の授業担当・学生指導には、約30名の研究科内外の教員が関わっている。また、講座所属の教 員を中心に授業担当・学生指導教員の協力を仰いで、科研費補助金による共同研究にも着手し た。

学外への発信・学外との連携

この教育プログラムの趣旨からして、いうまでもなく、広く日本内外の社会との関係を作ることも重要である。学外との連携という観点からは、「人間の安全保障」を外交の柱の一つに置いて推進してきた外務省、従来から「人間の安全保障」に関連する研究を組織してきた国際連合大学(UNU)と協力関係を築くと同時に、民間研究機関や非政府組織(NGO)との連携も深めつつある。

具体的には、まず、大学院総合文化研究科・教養学部運営諮問会議の諮問委員のひとりとして緒方貞子氏(国際協力機構理事長、前国連難民高等弁務官)に就任いただいた。2003年10月に開かれた第1回会合では、緒方氏からこのプログラムに対する熱い期待が示された。緒方氏は以前より「人間の安全保障」に強い関心を持たれており、アマルティア・セン氏(本学名營博士第1号)とともに、国連人間の安全保障委員会の共同議長を務め、国際社会における「人間の安全保障」への取り組みを勧告する最終報告書をまとめられた。12月には、報告書の日本語版出版を記念する朝日新聞社と外務省共催のシンポジウムが開かれ、緒方氏らとともに筆者もパネリストを務めた。

外務省で「人間の安全保障」を推進しておられた石川薫氏(当時国際社会協力部長、現経済局長)には客員教授として1年間平和プロセスと国際協力の講義と演習を担当いただいた。

2004年9月には、国際協力50周年記念事業の一環として、国際開発高等教育機構(FASID)・ 文部科学省の共催で公開シンポジウム「我が国の国際平和協力分野の人材育成強化における大 学の役割」が開かれたが、これにはプログラム運営委員会副委員長の木村秀雄教授が参加した。 木村教授は「人間の安全保障」プログラムの概要を説明したが、他大学の参加者から本プログ ラムのユニークな趣旨と方法に対して大きな関心が寄せられた。

さらに、2004年10月に同志社大学ヒューマンセキュリティ研究センターが主催した公開シンポジウム「ヒューマンセキュリティ研究の現状と課題」には筆者が参加し、本プログラムの取組を説明した。

学内でも、2003年11月に「人間の安全保障と地球市民」と題する公開シンポジウムを開催し、周知に努めてきた。プログラムからは木村秀雄(司会)、筆者(パネリスト)が参加し、学外からは青井千由紀(当時国連大学学術研究官、現青山学院大学助教授)、熊岡路矢(日本国際ボラ

ンティアセンター (JVC) 代表理事) のお二人をパネリストに迎えて実施した。なお、青井・ 熊岡両氏は2004年度大学院非常勤講師としてプログラムの教育にご協力いただいている。

2004年6月には「環境と開発」と題するシンポジウムを開催した。司会の木村秀雄を始めとして、パネリストの丸山真人(運営委員)、幸田シャーミン(プログラム博士課程・環境ジャーナリスト)、奥村浩延(プログラム修士課程・元ニカラグア派遣青年海外協力隊員)だけでなく、コメンテーターの永田淳嗣(運営委員)まで、全て「人間の安全保障」プログラム関係者で構成し、本プログラム関係者の層の厚さを示した。

10月に「貧困と開発」と題して開かれた秋のシンポジウムは、初の学外連携の試みとして、日本貿易振興機構アジア経済研究所(IDE-JETRO)と共催で実施した。司会の遠藤貢(運営委員)、パネリストとして中西徹(本研究科国際社会科学専攻・プログラム授業担当)、野上裕生(日本貿易振興機構アジア経済研究所新領域研究センター)、村山真弓(日本貿易振興機構アジア経済研究所地域研究センター)、コメンテーターとして澤田康幸(東京大学大学院経済学研究科)の計5氏が参加し、活発な議論が展開された。現在、このシンポジウムを基にした出版計画が進行している。

国連大学との間では、共同研究プロジェクトを実施することが決まり、現在その企画を進めつつある。

また、本研究科の専攻やプロジェクトなどさまざまな活動主体と連携を強めて、各種シンポジウムやワークショップにも協力している。さらに、小規模な活動として、「人間の安全保障」セミナー・シリーズ(原則として公開)を立ち上げた。学内外から報告者を招いて、本プログラムの研究・教育活動の充実をめざしている。

このプログラムに関する情報は、ウェブサイト上で随時更新している。詳しいことは、http://human-security.c.u-tokyo.ac.jp/index.htm をご覧いただきたい。

「人間の安全保障」プログラム運営委員会 委員長 山影進

5 駒場図書館の改組

平成16年度から駒場図書館(教養学部図書館)が制度上2つの図書館に分離された。ひとつは全学で運営し主として学部前期課程学生へのサービスを担う「駒場図書館」であり、もうひとつは従来どおり総合文化研究科で運営する「総合文化研究科図書館(部局図書館)」で、そのサービス対象は教養学部後期課程学生と総合文化研究科大学院生・教職員である。図書館の建物はひとつであるが、駒場図書館の責任範囲が2階(正面入り口の階)から5階、総合文化研究科図書館の責任範囲が1階と地下1階となっている。駒場図書館には全学で選出した図書館長と運営委員会が、総合文化研究科図書館には従来どおり部局で選出した図書館長と図書委員会が置かれている。しかしながら、両図書館運営の事務組織はこれまでどおり教養学部等事務部図書課であり、両図書館一体となったサービスが継続されているので、2つの図書館の並立が利用者の目に見えることはない。近い将来に建物が増築されれば、この形態を適切に修正して両図書館の並立が利用者の利便をさらに向上させるよう、新たな連携態勢を作る予定である。

このような図書館の改組がなされた背景には、大学における教育機能の重視がある。この点を、東京大学図書行政商議会などの記録文書(第368回東京大学図書行政商議会(平成16.1.14)資料「駒場図書館の組織改革とそれに伴う附属図書館基本規則改正(平成15.11.28)」)を引きながら見てみよう。以下、『』内は引用部分である。

まず、過去になされた『大学院重点化では研究体制の整備・充実に重点が置かれ、着々とその成果を上げているのに対し、教育体制の整備・充実は遅れがちであることが指摘』されていた。とりわけ、『教育を支える学習環境の整備・充実は教育・学習支援機能強化のために必須の課題』となっており、『図書館の教育・学習機能の向上は、その中でも最重要課題の一つである』とされた。このため、平成12年度の東京大学附属図書館図書行政商議会において、『「学習図書館システム」(仮称)を構築し、全学的な学習図書館機能の整備・充実を図る』方針が立てられた。具体的には、『駒場・本郷・柏の3キャンパスのそれぞれに、学習図書館機能を重点的に担う拠点図書館を指定し、準拠点図書館の協力も得て、緊密な調整と連絡のもと、学習図書館機能の整備・充実にあたる』こととされた。もちろん、東京大学の『中期目標・中期計画に明言されているように、学習図書館機能整備という任務は、3つのキャンパスの学習用拠点図書館のみならず、各部局図書館もそれぞれの特質に応じて分担して負うべきものである。この意味において、東京大学附属図書館全体として調和のとれた学習図書整備を可能にする制度および財政的基盤の確立は、中期目標・中期計画の期間内に達成されるべき大きな目標であり、今後全学的な検討がなされねばならない』とされている。

このような方針を実行に移すにあたって、『現在総合文化研究科の部局図書館であり、その管理運営は、同研究科が定めるところにより、これを行っている』駒場図書館の従来の制度の枠組みのままでは『今後駒場図書館が「学習図書館機能を重点的に担う拠点図書館」として全学的な見地から学習図書の整備を担うことは困難であると思われ』た。なぜなら、『前期課程学生の教育には、総合文化研究科・教養学部が主たる責任を負っているが、他の諸部局もまたこれに加わることとされている』のであり、『駒場図書館がこのような学部前期課程学生の教育体制に対応して、学習図書館としての機能を十全に発揮するためには、その管理運営に対しても、全学的な意見が反映される仕組みが必要である』と考えられたからである。『東京大学は、今後駒場図書館を含む3図書館に対して、これまで以上に学習図書購入のための資金を投入するよう努力しなければならないが、全学共通経費や「図書購入集中処理システム」の枠内での全学協力による資金を駒場図書館に配分する前提として、駒場図書館について必要な学習図書費と職員が確保されることが全学に対して明らかにされるように、予算および意思決定の面で、総合文化研究科の研究用図書館部分と明確に区別されることが望ましい。』なぜなら『それによって、図書費の利用と職員組織に関する透明性が確保されるからである。』ただし、『この組織改革に

よって、学部前期課程学生の学習条件が低下することがあってはならないことは当然であり、 総合文化研究科は、学習図書整備の財政的基盤が確立するまでは、附属図書館の協力のもとで、 新しい駒場図書館に対する財政的な支援を継続する』こととなっている。『駒場図書館が名実と もに全学基盤の教育・学習支援の図書館となるまでの全期間において、上記目標を達成するための協議を継続する』ことも附属図書館と総合文化研究科によって合意されている。

このような経緯で、全学運営の駒場図書館が総合文化研究科から制度上独立することとなっ たのであるが、今後は次のようなことが課題となろう。第一は、両図書館がそれぞれの特性に 応じた独自のサービスを展開することにより、学習図書館機能と研究図書館機能をいっそう高 めることである。駒場図書館においては、単に眼前の教養学部前期課程カリキュラムに直結し たサービスを提供するだけでなく、学部後期課程や大学院の広範な分野、さらには社会での進 路を視野に入れたサービス展開が求められるであろう。総合文化研究科図書館においては、現 在やむをえず各研究室に分散配置されている図書をできるだけ一箇所に集中して利用者の利便 性を向上させる必要があり、そのための前提となる建物増築をすみやかに実現しなければなる まい。さらに、部局内の卒論執筆学生や大学院生・研究者に対して、閲覧室内に個室的なブー スを多数用意して図書館での研究活動を支援することも必要であろう。もちろん、将来的には365 日・24時間サービスを実現することも求められる。第二の課題は両図書館の連携である。駒場 図書館は学部前期課程学生の学習向け、総合文化研究科図書館は後期課程学生の学習や大学院 生・教職員等の研究向けとはいっても、収蔵図書を明確に区別することはできない。人文・社 会系の分野において特にそうであり、いままでも学部前期課程学生が研究室に収蔵されている 図書を求めて研究棟を訪ね歩き、なかなか目的の図書にアクセスできないことが学生達の不評 のもととなっている。将来の建物増築後においても、駒場図書館と総合文化研究科図書館が連 携して計画的な図書収集をおこなうとともに、一体となった運営をすることによって、一般的 な利用に関しては両図書館がシームレスであるようにしなければなるまい。

(鹿児島誠一)

6 第6回東アジア4大学フォーラム 北京会議

「大学教育と東アジアにおける文化・文明発展の連関」

平成16年11月22日(月)、23日(火)の二日間にわたって、北京大学で第6回東アジア4大学フォーラムが開催された。北京大学、ソウル大学校、東京大学、ベトナム国家大学ハノイ校の4大学間で教育、研究をめぐる議論を積み重ねていくことを目的とするこのフォーラムは、1999年に駒場ではじまり、4大学を一巡した後2003年の駒場会議から第2ラウンドに入った。「東アジア的価値」を問い直すことを主要な課題とした第1ラウンドを受けて、第2ラウンドでは4大学における教育、研究における実践の成果をより具体的な形で交流することがめざされている。

その最初の試みとして2003年11月に開かれた駒場会議の成果は、会議開催に当たって中心的な役割を演じた中島隆博助教授の努力によって、400頁をこえる『もう一つの眼で見る東アジア』という報告書の形で刊行された。日本語、中国語、韓国語、ベトナム語、英語(東アジア4大学フォーラムは、4つの母語間の同時通訳によって行われてきているが、東京会議でのシェイクスピア研究に関するセッションは英語で行われた)という5つの言語での報告(英語の報告以外はすべて他の3言語による翻訳がついている)がぎっしりとつまったこの大冊は、このフォーラムの一つの到達点と可能性をよく示している。

従って、第2ラウンドの2回目の会議となる北京会議でも、東京会議で示された方向性が受け継がれていくことを、東京大学側の関係者は期待していた。そこで、今回の会議でのセッション構成についての東京大学からの要望も行ったが、北京大学側はそれをきわめて前向きに受け止めて下さった。その点は感謝の気持ちをこめて記しておきたい。

北京大学の国際交流センターを会場として開かれた会議の第1日目の午前には、まず佐々木毅 総長など4大学の学長による基調講演が行われた。佐々木総長は、「21世紀の高等教育を展望し て」と題して、次のような内容の講演を行った。

21世紀の初頭にあたって多くの人々の間で成立しつつある共通認識として、高等教育が社会と人類の将来にとって決定的に重要な意味を持ち、大学が社会においてますます大切な公共財になりつつあるという点があげられる。そうした状況の中で、この数世紀にわたって存在してきた知識と現実についての二つの見方、すなわち、知識や知見が現実によって規定されるという見方と、知識や知見が現実を見る視点を変え、さらには現実そのものをも変えていくという見方の内、後者の重要性が増してきている。21世紀の高等教育は、先端的・専門的知識の開発・研究・教育を行いつつ、先端的な知識や知見が生み出していく新たな現実に即して「何のために」という問いかけを絶えず行っていかなければならない。そういう意味で、これからの高等教育は先端的・専門的知識の高度化に関わるだけでなく、公共的なるものを配慮した人間の新たな展開可能性に刺激を与えるという重要な役割をもっている。

また、主催校である北京大学の許学長は、グローバル化の中で諸文明が多様性をもって繁栄していくことの必要性を説き、とりわけ儒家思想の意味を強調した。ソウル大学校の鄭学長は、大学の使命が知識の伝達よりも知識の創造に求められるべきであると論じ、ベトナム国家大学ハノイ校のタオ学長は、東アジア文明についての教育を共同して進めていくための方策を提案した。

今回の北京会議での一つの特徴は、この各大学の学長による基調講演が終わった後、会場にいたテレビ局の記者や大学院生から各学長への質問が行われたことだった。テレビ局の記者は、学生たちが伝統文化をどこまで大切にしているかを問い、一人の大学院生は、東アジアの各大学が外国に大学院生を送ってそこで学位を取らせることについての見解を質した。

1日日の午後には、「大学教育における西欧およびアジアの古典」についてのセッションと、「東アジアにおけるアメリカ研究」に関するセッションが並行して開かれ、東大からは、大貫隆教授の「日本の大学教育と聖書」という報告と、岡山裕助教授の「日本におけるアメリカ研究―ハブとしてのアメリカとの関係で」という報告が行われた。

大貫報告は、日本の大学でのキリスト教関係の教育の現状に触れた後、自らの経験をも交えて、古典とは何か、古典教育とはいかなるものかについて論じ、自分の存在に関わる問いをもって古典に向き合い、それによって自己と世界を新しく発見し直す経験をすることの大切さを説くものであった。このセッションでは他に6人の報告者があり、焦点が必ずしも十分定まらなかった感があったが、ソウル大学校の朱教授はルネサンスの例を引きながら、社会が変化する中での古典なるものの探求について、大貫報告と重なり合うものをもった報告を行った。また北京大学の著名な思想史家湯一介教授が、伝統に戻り伝統から力を引き出すことが肝要であると力説していたことも印象的であった。

岡山報告はアメリカ以外で進められているアメリカ研究と、アメリカ自体で行われているアメリカ研究との間の関係という点にとくに着目しつつ、日本での研究活動状況を分析したものであった。このセッションは、内容の関連上、次に紹介するシェイクスピアに関するセッションとともに、英語によって行われた。

2日日の午前中には、「東アジア4大学における東アジア文明コースカリキュラムの設定」と題するセッションと、「伝統的価値とシェイクスピア」というセッションがやはり並行してもたれ、それぞれ木畑洋一(「東京大学における東アジア文明をめぐる教育の現状と4大学間の協力に向けての方向性」)と高田康成教授(「シェイクスピアにおける伝統的価値をどう扱うか」)が報告を行った。

木畑は、東京大学教養学部の前期課程・後期課程の双方において東アジア文明関連の授業がどのように行われてきたか、また現在進められているカリキュラム改革の中でそれがどのような形をとろうとしているかについて紹介し、4大学間で授業の面で具体的に協力していぐ形としては、2001年度冬学期に駒場で実施された4大学の教員による共通テーマ講義「アジアの歴史認識と『信』」のような試みが現実的であると、述べた。このセッションではソウル大学校の除教授から、東アジア文明に関する共通シラバスの開発を行ってもいいのではないか、という提言もなされた。各報告につづく討論では、4大学が協力して授業を行っていく場合の言語的な困難さに議論が及んだ時、ソウル大学校の鄭学長が、ソウルでは英語による授業を増やしているので授業協力はいつでも可能であり、他の大学も英語での授業をもっと積極的に増やすべきであると発言したのが、とくに日立った。この4大学フォーラムは、すでに述べたように基本的に4つの言語を用いて行っており、それは東アジアに位置する大学の交流のあり方として確固たる理由をもっているが、その反面、英語を用いることで交流が容易になる側面も否定できない。その間のバランスをいかに模索していくかは、今後の交流にとって大きな課題となる。

英語で行われたシェイクスピア関連のセッションでは、高田教授がシェイクスピアの作品の 背景にその当時の伝統的価値を読み取っていく立場と、現在の読み手の読み方を規定する枠組 みとの関連で伝統的価値を考える立場という二つの立場を提示して、報告をおこなった他、「韓 国におけるハムレット」などの報告や討論を通じて、それぞれの社会におけるシェイクスピア 文学の受容・解釈・研究の多様性が浮きぼりにされ、この多様性を前提とした今後の研究交流 のあり方が検討された。

最後に開かれた総括セッション(閉会式)では、主催校北京大学から、東アジアの各大学での共同カリキュラムをめざしていくという長期的目標が示されるとともに、当面の具体的な提案として、来年ソウル大学校で開かれる次回フォーラムの際に、各大学の学生も参加させて共同授業や相互交流を行っていくという新方針が提起された。本学の古田副学長はじめ、他の3大学の代表もそれに賛意を表し、2005年のソウルでの第7回フォーラムからは、この新しい方式がとられることになった。

(木畑洋一)

7 東京大学リベラルアーツ南京交流センターの開設

東京大学の学術研究奨励資金を用いて設置される海外学術交流拠点として、中国の南京大学中日文化研究センター内に、東京大学リベラルアーツ南京交流センター(東京大学教養教育南京交流中心)が新たに開設され、平成16年11月25日(木)にその開設記念式典と記念講演会がもたれた。

25日午前の開設記念式典では、南京大学側でこのセンターの開設に当たって中心的役割を演じた張異賓副学長による挨拶の後、張副学長と本学の古田元夫副学長がセンターのプレート除幕を行った。次いで古田副学長が「21世紀の教養教育をめざして」という講演を行い、木畑洋一が「東アジアにおける教養教育―東京大学教養学部の経験から」と題して報告した。このセンター開設のニュースは、中国で最大の夕刊紙『揚子晩報』で即日報道され、南京における関小の高さが示された。

古田教授は、1990年代に教養教育に対する風当たりがきわめて厳しくなる状況のもとで、日本全国の大学で教養部がいっせいに姿を消していったこと、しかしその中にあって本学が教養学部を堅持するという姿勢を示したことを、まず強調した。そして教養学部の存続を可能にした要因として、後期課程や大学院の充実を図って研究の面でも他の専門学部にひけを取っていなかった点、また大学全体の理解と協力のもとで90年代初めに教養教育の大幅な刷新をなしえた点の二点を挙げた。さらに、そのような実績の上に立って、グローバル化の時代に活躍する真の知的リーダー、市民的エリートを育てるために、総合的判断力、社会的責任感、地球的な視野という三つの資質を涵養することに、リベラルアーツ教育の今日的課題がある、と説いた。この古田副学長の講演内容は、前述した『揚子晩報』の翌日朝刊(同紙は夕刊の他に朝刊と午後版も発行している)1面に「市民的エリートを育てる教養教育」という見出しのもとに掲載された。

木畑は、東京大学における教養教育の歴史を教養学部の創設時期に重点を置いて紹介し、初代の学部長矢内原忠雄教授が、南京事件があったのと同じ月1937年12月に東大を追われた事情などに論及しつつ、現代における教養教育の重要性を語った。

同日午後は、大学院生や学生を対象とする東京大学教員による講演会が三ヶ所で同時並行的 に開催された。

第一の講演会では、南京大学が非常に強い関心を抱いている表象文化論関連で、総合文化研究科の松浦寿輝教授と田中純助教授の講演が行われた。松浦教授は「偶然性の詩学――表象・テクスト・確率」というタイトルのもとで、芸術創造を「行為」と「時間」の次元において捉え、それによって「作品」の観念の組換えの可能性を提案するという主旨の講演を行った。「作品」を完成形において予定調和的に読むのではなく、それが生成してゆく過程における作者の「行為」と、その「行為」の現場での一瞬ごとの「確率論的な揺らぎ」を重視すべきだと主張したうえで、松浦教授は、そうした観点から、①演奏のたびに偶然を呼びこむ趣向を凝らした現代音楽、及び②文学と芸術諸ジャンルにおける未完の作品群、という二つの徴候的な現象を挙げ、芸術研究における「静的な構造」から「動的な行為」へというパラダイム変換を展望した。それに対して聴衆から活発な質問が出され、偶然と必然の逆理に関する批判的な指摘や、「未完の作品」としてフォークナーの小説や中国文学の古典『紅楼夢』(これは南京を舞台としている)を示唆するコメントなどもなされた。

田中助教授は、多くの画像を投影しながら「建築と文字」と題する講演を行った。田中助教授は、まず漢字が西洋の言語思想に与えた影響から出発し、建築言語における「文字性」をめぐる問題を歴史的にたどった。話の導入部では2002年のヴェネツィア建築ビエンナーレにおける日本館の展示「漢字文化圏における建築言語の生成」が、結論部では2004年における展示「おたく:人格=空間=都市」が、それぞれ講演テーマと関連づけて紹介され、そのアクチュアリ

ティが示唆された。この講演の後、聴衆から、伝統的構造と新しい計画が最も調和しているアジアの都市はどこか、グローバル化によって世界中の都市や建築が一様に均質化しているのではないか、といった質問が出された。それに対して田中助教授は、中国沿海部のように資本の集中する都市こそ一様化が進みがちだが、固有の都市構造とグローバル化の衝突は実は都市ごとに異なる変容過程を生み出しており、その差異にこそ注目すべきものがあると指摘した。

第二の講演会では、総合文化研究科の大貫隆教授と人文社会系研究科の逸身喜一郎教授による講演が行われた。大貫教授は、「日本の大学教育と聖書」と題する講演を行い、南京大学の前身の一つが金陵大学というアメリカのミッションによる大学であったことをも意識して、日本におけるミッション系の大学での「聖書概論」あるいは「キリスト教概論」の実情を紹介し、さらに自らの経験をもとに古典としての聖書に向き合う姿勢を語った。また逸身教授は、「大学におけるギリシャ語教育・ラテン語教育」という講演の中で、近代ヨーロッパの人々がいかにラテン語教育を重視したかを再確認した後、日本に大学制度が導入されてからしばらくの間、すなわち今から100年位前までは、ラテン語・ギリシャ語が相当読める人々がいたこと、同時に「読まねばならないけれどもよく読めない」と思う人も多くいたことに注意を促した。そのような状況は、国粋主義者や脱ヨーロッパを掲げる人々によってないがしろにされていったが、ギリシャ・ローマの著述が、単にヨーロッパの根元というのみならず、人類普遍の問題をなげかけてくるという点に改めて思いを致す必要がある、と逸身教授は強調した。

講演後の質疑の中での一番重要な問いは、両教授が現に日本の大学で古典の研究と教育に携わっているのは、今なお「脱亜入欧」のためなのか、というものであった。両教授とも、東西の違いを超えた普遍性に突き抜ける可能性を信じていること、現在の日本で、西洋古典に限らず西欧文化を学ぶことが「脱亜入欧」の営みと見なされることはもはやほとんどないと回答した。この問いを発した質問者が、現在の中国で「古典」の研究と言えば、儒教の古典の研究を指すとも発言したのに対して、別の大学院生は、自分はその見方に賛同しないこと、そのような「民族主義的なイデオロギーから自由になって、西欧の古典に限らず文学からもっと謙虚に学ぶべきだと思う」と発言した。現在の中国の大学における人文系の分野では、このような二つの潮流が、教師と学生の別を問わず、拮抗しているのではないかという点が垣間見られたやりとりであった。

また第三の講演会場では、総合文化研究科の刈間文俊教授による「中国映画はどこから来たか」という講演と、国際企画室のチン・フェイ特任教授の「禅宗の日本化」と題する講演が行われ、ここでも活発な質疑応答がなされた。

25日夜には、すでに述べたように南京大学側が関心をもち、類似のコース開設などを考えている表象文化論についての懇談会が、張副学長を中心として開かれた。

さらに26日夜には、南京政治協商会議の汪正生主席、張伯興副主席による招宴が設けられ、 東大と南京大学の交流を強く支援するとの姿勢が表明された。両大学の交流に対する南京市側 のこのような激励は、きわめて心強いものがあった。なお汪正生主席は、この3週間後、12月に 入って日本を訪問された際、駒場で「南京の歴史と現在」というタイトルでの講演をされ、南 京が、長い歴史と伝統を踏まえつつ現在きわめてダイナミックな発展を遂げている様相を包括 的に紹介された。

東京大学リベラルアーツ南京交流センターは、今後、自然科学分野も含め、東京大学でのリベラルアーツ教育の経験と成果の発信と相互の交流を進めていく拠点として、活用されることが予定されている。

(木畑洋一)

8 東大·MIT合同展

「彼理(ぺるり)とPerry(ペリー)-交錯する黒船像-」の開催

2004年は、日本が長い「鎖国の夢」から覚め、米国との間で日米和親条約を締結し、「開国」を決断してから、150年目の年にあたった。その関係で、日米双方でさまざまな行事が行われたが、東京大学のアメリカ太平洋地域研究センターでは、マサチューセッツ工科大学(MIT)や東京大学の史料編纂所の協力をえて、「彼理(ぺるり)とPerry(ペリー)一交錯する黒船像一」という展示を駒場の美術博物館で10月3日(日)から10月14日(木)まで開催した。

この展示は二つの部分からなっていた。一つはMITの著名な日本史家であり、日本の占領期の大衆文化の変容を描いた名著『敗北を抱きしめて』の刊行で、ピューリッツアー賞を受賞したジョン・ダワー教授と、同じくMITで言語学を担当し、教材や教授法の電子化を推進している宮川繁教授が中心となって作成された「黒船とサムライ」展示である。

この展示は、MITのグループが、日本の歴史に関係する重要な画像史料をデジタル化して収集し、米国の学生たちに視覚を通して、他文化の身近な理解を促そうとする「多文化の可視化 (Visualizing Cultures)」プロジェクトの一環として作成されたものでもある。

具体的には、日米各地の美術館や博物館に所蔵されているペリー提督や黒船関係の絵画や写真を精巧なデジタル画像の形で収集し、日本側と米国側の画像を対比する形で展示したもので、既にニューポート、ロサンゼルス、首都ワシントンなどで巡回展示され、好評を博していた。また、日本では、東大駒場での展示を皮切りに、11月に下田、2005年2月に長崎、6月に函館、7月に横須賀など開国にゆかりの都市での巡回展示が予定されている。

もう一つは、東京大学の史料編纂所が所蔵している開国関係の貴重な画像史料を史料編纂所 のご協力をえて、展示した。とくに、重要文化財に指定されている「ペリー渡来絵図貼交屏風」 の原寸大のレプリカを作成し展示したほか、「米船渡来旧藩士固之図」や「黒船神奈川縣居之図 提督彼理肖像」などの貴重なコレクションが展示された。

このように今回の「彼理(ぺるり)とPerry(ペリー)―交錯する黒船像―」展示は東京大学とMITとの合同展という性格をもっており、日米和親条約締結150周年を祝うに相応しい、日米共同の展示になったと喜んでいる。また、外務省、アメリカ大使館、アメリカ研究振興会、国際交流基金日米センター、読売新聞社などから後援をいただいた。

ひとは「自文化」という眼鏡を通して「他者」をみるといわれる。幕末の日本で鎖国か開国かをめぐり国論を二分して争っていた時代に、「他者」である「ペリー」や「米国」はどう描かれたのであろうか。また、日本の開国を手がかりとして、中国、さらには東アジア全体への進出を意図していた米国は当時の日本に対してどのような「眼差し」を向けていたのだろうか。

開国当時の日米双方の画像を対比することによって、日米両国のイメージ・ギャップが鮮明に浮かび上がってきたが、それは150年前だけの問題ではなく、現在の日米関係にも関わる異文化コミュニケーションの「難しさ」と、それ故の「面白さ」を、見る者に語ってくれたように思われる。

会場となった駒場の美術博物館は旧制一高時代の図書館という由緒ある建物で、2階部分が吹き抜けとなっており、高い天井の下、広々とした空間をもっているだけに、150年前の日米交歓の有様を追体験するには相応しい会場であった。入場者はまず、美術館の正面に飾られた、「彼理(ぺるり)とPerry(ペリー)」を図案化された薄紫色の大きなポスターに迎えられる。会場に入ると、やや照明を落とした壁に日米双方が描いたペリー像の対比をみることになる。米国側は写真であるが、日本側は似顔絵であるので、やや情けない泣きそうなペリー像となっていて、その対照に興味をそそられる。

正面の壁を過ぎて、第一屋に入ると、左側には東大の総合図書館所蔵の1794年作と推定される「アロウスミスの世界地図」の現物がガラスケースの中におさめられている。右側には日米の画像資料をデジタル画像で対比したMIT展示がならび、左奥のテレビ画像にはMITのジョン





・ダワー教授によるMIT展示の解説VTRが流れている。続いて、第二室の正面には史料編纂所から借り受けた重要文化財の「ペリー渡来絵図貼交屏風」の原寸大のレプリカが置かれ、照明に浮き出されたその美しさに魅了される。さらに、屏風のはるか上部の壁にはペリー来航時の様々な光景の写生が絵巻物のように映し出され、見る者を圧倒する。なお、会場にはMIT展示の英文による説明文の翻訳や東大側の展示物の解説を掲載したパンフレットが配布されていたので、見る者にはMIT展示の内容の理解が容易になっていたと思う。

約2週間の展示期間中には約1300人を超える入場者があった。途中に台風や悪天候の日があったにも拘わらず、盛会の内に展示を終了できたと喜んでいる。マスコミの反応もよく、『読売新聞』は10月2日の社会面と10月7日夕刊の文化面で詳しく展示の模様を伝えてくれたし、Japan Times紙も10月8日付けの紙面で詳しく紹介してくれたので、会場には外国人の姿も多くみられた。

公開の前日、10月2日(土)には、15時から18時まで学際交流ホールで今回の展示を記念するシンポジウムが開催された。最初に山本泰総合文化研究科副研究科長の挨拶があった後、当センターの遠藤泰生教授の司会のもと3人のパネリストの報告があった。それは、元横浜市大学長で幕末開国期のパイオニア的研究者である加藤祐三氏、神奈川大の21世紀COEプログラムの研究員で錦絵の専門家である富沢達三氏、本学の教授で昨年『ペリー来航』を出版された三谷博氏の3報告であったが、いづれも最新の研究に基づく刺激的な報告であり、討論も活発に行われた。その記録は当センターの年報『アメリカ太平洋研究』の第5号に特集として掲載される予定である。

また、同日の夕刻からはレセプションが駒場のファカルティ・ハウスで開催され、能登路雅子教授の司会のもと、まず、当センター長の油井大三郎から開会の挨拶があった。続いて東大を代表して古田元夫副学長からの挨拶と総合文化研究科を代表する浅島誠研究科長の挨拶があった。続いて、外務省の近藤誠一文化交流部長、アメリカ大使館のマーク・デヴィッドソン文化担当官、アメリカ研究振興会の中原伸之理事長、日米協会の久野明子専務理事などの来賓挨拶があった。いづれも今回の東大・MIT展示の実現を高く評価するものであった。続いて、東大に続いてMIT展示を行う予定となっている下田を代表して了仙寺の松井大英住職、東京大学史料編纂所の加藤友康副所長、駒場の美術博物館の義江彰夫委員長からの挨拶があった。急用で欠席された文部科学省の井上正幸国際統括官からは展示の実現を喜ぶメッセージが寄せられた。最後に、当センターの教授で、駒場図書館長でもある木畑洋一教授による閉会の辞でレセプションも盛会の内に終了した。このレセプションの模様は、2005年3月刊行予定の当センターのニューズレターに掲載される。

当センターは、毎年秋に公開シンポジウムを開催してきたが、展示会ははじめての体験であったが、その不安は折茂克哉助手を初めとする美術館側の献身的なサポートによって解消された。また、財政面での負担は、アメリカ研究振興会や学部長室のご配慮によって解決することができた。さらに、当センターの助手、職員、司書の皆さんや2週間の間、監視役を引き受けてくれた学生、院生の協力によって無事、成功裡に展示を終了できたことを喜んでいる。

(アメリカ太平洋地域研究センター長 油井大三郎)

9 特別展示

「第一高等学校創立130周年記念・駒場の歴史展」 について

2004年は教養学部に併合されて幕を閉じた第一高等学校が、その前身東京英語学校の独立から数えて130年目にあたる。教養学部長室は第一高等学校同窓会と協議の上、これを記念して「第一高等学校創立130周年記念・駒場の歴史展」の実施を決定し、美術博物館と自然科学博物館とからなる駒場博物館で開催することとなった。

これを受けて美術博物館と自然科学博物館は4月末に合同委員会を開き、教養学部の前身である第一高等学校の130年の歴史を、同校が駒場に移転するまで駒場キャンパスにあった東京農学校→東京帝国大学農学部の歴史と結合させながら、学校制度・運営、教育、学生生活の三つの角度から明らかにすることを、基本方針として確認し、この三本柱の大綱を以下のように定めた。

第一に学校制度の沿革については、1874年東京英語学校独立を基点とし、1949年新制国立大学設置法による東京大学教養学部への併合までの概略を基本史料とパネルで明らかにする。また駒場の歴史については、駒場の地理的環境を踏まえ、東京農学校から東京帝国大学農学部を経て、第一高等学校の駒場移転までの歴史を俯瞰する。さらに運営の実態については、各時期の校則、学校の姿、教官の採用・辞任、駒場移転に関する引渡し文書・建物見取図・写真・映像などを効果的に組合せて展示する。

次に、学校教育にかんしては、様々な形の教科書や実験器具、入学及び通常試験問題と答案、教育資料としての絵画、各種学校行事などを豊富な実物・写真などを使って再構成する。

また学生生活は寮生活と部活動とを中心に、これを伝える文書 (寮委員会記録・寮歌集・文芸部雑誌)・写真・映像・絵葉書などで実態を再現する。

以上の基本方針に基づいて、両博物館委員と職員は各分野を担当しながら、一体となって資料収集に着手した。資料は、第一高等学校同窓会が所有・保管しているもの、同同窓会から長野県松本市所在の旧制高等学校記念館に寄託されたもの、本郷キャンパスにある東京大学史史料室・農学部・総合図書館が保管・所蔵しているもの、教養学部キャンパス各所に保管・所蔵されているもの、そして第一高等学校の教官・生徒であった方々や御遺族の所蔵として現存しているもの、に大別されるが、原則として可能な限り移管・貸出などの手続きを踏んで駒場博物館に結集し、すべてを見た上で展示品を決定することにした。

この作業はかなり困難であり、4月から始めて8月まで、物によってはそれ以降までの時間を要したが、意外な所から価値の高い遺品が続々と現れたため、結果的には当初の目的を充分に 実現できるという希望を我々に与えた。

9月に両合同委員会を再度開き、4月の基本方針と以上の蒐集品をもとに展示の全体的空間構成、各分野空間での展示品の選定と配列などを決定した。1階美術博物館展示室を第一展示室に宛て、第一高等学校の制度的沿革・学校運営・教育内容・学生生活の順に展示し、文化施設運営委員会会議室を映写室に宛て、2階自然科学博物を第二展示室として、駒場の地理的環境・歴史的経緯がわかる図版・パネルなどと理科教育に使われた実験器具などを展示することが確定した。以下10月29日内覧・11月1日一般公開直前までの時間をかけて、解説パネル・展示品キャプション作成から展示品すべての陳列までを成し遂げた。

以上の結果完成した展示内容は、以下のとおりである。まず学校制度の沿革については、1874 年東京英語学校独立を基点とし→1877年東京大学予備門創立→中学校令に基づく1886年第一高 等中学校の設立→1889年神田から本郷向ヶ丘への移転→1894年高等学校令による第一高等学校 と改称→1935年東京農学校を前身とする東京帝国大学農学部と敷地を交換して駒場への移転→ 1945年戦災にあった東京高等学校の駒場への一時的移転→1949年新制国立大学設置法による東 京大学教養学部への併合までの歩みをパネルと書籍などで展示した。これと不可分の関係の駒







場キャンパスの歴史については、上記の計画に基づき、展示場所を2階自然科学博物館入口に設け、江戸時代の駒場を描いた絵のパネル、明治時代の地形図、東京農学校の平面図、東京帝国大学農学部の写真などを組み合わせて、第一高等学校駒場移転までの前史を示した。

学校運営の実態については、基本資料とともに、夏目漱石が英語教師として採用された時の 自筆の履歴書と退職時の辞職願、内村鑑三の不敬罪による辞職願、駒場移転時に作成された一 高・農学部両キャンパスの建物見取り図、校旗護国旗など、従来公刊・公開されてない資料的 価値の高いものを積極的に展示した。このうち1935年本郷から駒場への一高教師・生徒全員の 徒歩移動を撮影した映像は、学校行事・課外活動を収めた映像とともに、一括して上記1階会議 室で放映した。

教育内容についても、基本資料とともに、未公開のもので資料的価値の高いものを積極的に展示した。例えば、倫理講堂(駒場では現900番教室)に式典の度に全生徒に文武両道の鑑として示された菅公・坂上田村麻呂像(小堀鞆音筆)、英語教師としての夏目漱石が作成した試験問題や彼の英文講義録(森巻吉筆録、後同校校長)、明治時代の生徒成績一覧、第一高等学校までの移動経緯が分かる教育用書籍、各種教科書などは、その代表例である。なお教育用実験器具類は、スペースの都合上上記のように大部分2階に展示した。

寮生活と部活動の部では、基本計画に沿って、まず全員自治寮が生まれた経緯を明らかにし、寮生活の実態を寮委員会記録・写真などで復元し、ボートをはじめ運動各部や文芸部など文化活動、それらの集大成の意味をもった毎年の紀念祭も写真・部誌などで再構成し、そこに浮かび上がる学生生活のイメージを、様々な素材を組み合わせて作成した映像を放映することで、視覚的・動態的に把握できるよう試みた。

本展示へ関心は予想以上に高く、全47日期間中の入館者数は総計6,286名に及んだ。1日平均133人余となる。一高関係者が多いのは当然として、駒場キャンパスの学生や付近の住民の入館が多かったことは、我々の願いがある程度達成された思いである。

上記のように収集された資料は、返還すべき所蔵品を除き、展示会終了後、3箇所に分けて保管されている。おおまかに書籍は図書館に、理科教育用実験器具・模写図等は自然科学博物館に、その他学校行政・教育関係書類・文書、教育用絵画・掛図等から寮生活・部活動記録や映像等にいたる多様な史料は美術博物館に、である。

しかし、収集された資料で、スペースの制約で展示されなかったものも多く、それを含めて上記3箇所の一高関係資料は、多くが未整理状態にある。研究科長室・一高同窓会の了解のもとに、我々3館は、これを「一高コレクション」と名付け、一貫した基準で整理して、美術博物館の常設展示のさいに一高コーナーを常置して展示するとともに、目録を作って、広く学内外からの閲覧希望に応えられるよう、現在準備を進めつつある。

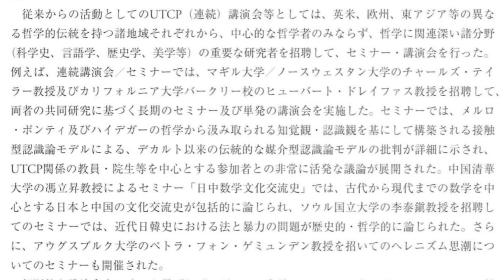
(美術博物館委員長 義江彰夫、自然科学博物館委員長 長谷川寿一)

10 21世紀COEプログラム

1. UTCP

交流から本格的提携へ

文理の枠を超えた総合的な哲学の再編成、ひいては人文科学の総合化・国際化を目指す、「共生のための国際哲学交流センター」(UTCP)は、2004年度に於いては、当初の二年度での海外からの招聘を中心とする国際交流を継続・強化する一方で、海外への発信による交流にも重点を置いた。国内では、海外からの研究者を中心とした会議、セミナー、講演会を、従来通り継続的に開催する一方で、今年度は、被招聘者と日本の研究者との相互交流をより積極的に促進する形態の交流研究会を催した。海外では、UTCPの研究者が海外で発表・研究する機会をより一層支援し、シンポジウム・セミナーを提携研究機関と共催する(若しくはUTCP後援のシンポジウム・セミナーに参加する)等により、海外研究機関との本格的提携を具体化していった。



個別的な講演会をいくつか挙げれば、ボッフム大学のベルンハルト・ヴァルデンフェルス教授 (現象学)、スタンフォード大学のロバート・プロクター教授 (科学史)、カリフォルニア大学サンディエゴ校のジル・フォコニエ (認知言語学)、パリ大学のジャンークロード・レーベンシュタイン教授 (美学)、カーン市民大学のミシェル・オンフレ氏 (市民の視点からの哲学)、等を招聘しての講演会を行った。さらに、石黒ひでUTCPセンター長のイニシアティヴによる、「言語と思考」をテーマとする講演会がいくつか行われた。ケベック大学モントリオール校のマティウ・マリオン博士は、ウィットゲンシュタインの数学の哲学について、コロンビア大学のアキール・ビルグラミ教授は、言語の哲学での外在主義と内在主義とを総合するような、指示対象の概念に重点を置かない、意味論の考え方について、同大学のキャロル・ロヴェイン教授は、集合的人格の考え方について、話された。また、ロンドン大学のドナルド・ギリーズ教授には、トーマス・クーン的な科学史方法論の医学史での適用に関しての講演をしていただき、パリ大学のアントニア・スーレーズ教授には、ウイットゲンシュタインの哲学と音楽との関係についての講演及び色の哲学的問題についてのウイットゲンシュタイン、シュリックらと現象学者(フッサール)・経験主義者(ミル)との対比についての講演をしていただいた。

こういった従来からの講演会・セミナーの中でも、今年度は、海外の研究者と日本の研究者 との討論・交流に一層の重点を置いたものをいくつか開催した。例えば、東西医学思想比較に









ついてのシンポジウムでは、プリンストン高等研究所のハインリッヒ・フォン・シュターデン博士と台湾中央研究院の梁其姿博士の講演に続いて、日本側の研究者からのコメントが行われ、その後活発な討論が行われた。又、中国北京大学哲学科との交流会議でも、討議・交流により重点を置いたセッションを行った。

冒頭にも記したように、今年度は、国内のみならず海外でも積極的な活動を展開したが、例えば、提携関係にあるサイモン・フレーザー大学との技術の哲学をテーマとする交流ワークショップをヴァンクーバーで行った。ここでは、技術と認識、技術と文化といったテーマについての、様々な哲学的視点からの発表及びそれに基づく活発な討論が行われた。又、「国家暴力・記憶・植民地主義再考」をテーマとする日韓の哲学・歴史シンポジウムを、延世大学人文科学研究所との共催でソウルで開催した。さらに、ストラスブール及びコルマールでのフランス日本研究学会のシンポジウムにUTCP側から参加者を出すのにならずシンポジウム自体の後援も行った。こういった海外での活動をさらに発展させて、ドイツのアインシュタイン・フォーラムとシンポジウムを開催する計画も進行中である。

こういった講演・セミナー等は、UTCPの研究活動の大きな柱ではあるが、それを外部に発信する上で重要なのが欧文誌UTCP Bulletin及び和文誌UTCP研究論集をはじめとする出版物である。今年度は、UTCP Bulletinについては、海外でのUTCPの研究者の発表を中心としたVol. IV及びソウルでのシンポジウムをテーマとするVOl.Vが刊行される。加えて、前年度開催のシンポジウム「21世紀におけるプラグマティズムと技術の哲学」の成果の出版計画が、進行中である。又、今年度の東西医学思想シンポジウムの成果も出版が企図されている。

UTCPの活動には上記のような狭い意味での研究活動に加えて、教育的な活動も含まれる。今年度はこの面では、従来にない大きな成果が収められた。UTCPが支援する若手研究者のより自発的・独創的な研究を一層奨励するために、若手研究者の自発的な発案に基づく研究会を組織し、それを支援した。「科学における言葉の運用」、「感性の論理・身体の思考」、「政治哲学」、「学問的方法論比較」の四つのテーマの研究会が活発な活動を行ったが、それらの中には、外部からコメンテータを招いてのシンポジウム・セミナー(UTCPワークショップ)を開催するところもあり(「身体の思考・感覚の論理」及び「ヨーロッパ哲学とシオニズム・イスラエル問題」)、この新たな試みは大きく実を結んだ。これらの若手研究者による研究の成果は、UTCP研究論集第二号・三号としてまとめられる予定である。

(若手フェロー 蟹池陽一)

2. 融合科学創成ステーション

はじめに

総合文化研究科広域科学専攻では、平成14年度に21世紀中核形成プログラム(COE)「融合科学創成ステーション」が学際・融合領域で採択され、平成16年度で3年が経った。ここで、これまで得られた成果の一端を紹介したい。総合文化研究科広域科学専攻では、既に平成11年度より、階層性を有する生命システムの本質を解明する上で、各要素への還元ではない全体論的な見方を、細胞生物学に適用した20世紀COEプロジェクト「複雑系としての生命システムの解析」を進めて来た。平成14年度から開始された21世紀COE「融合科学創成ステーション」ではさらに、このプロジェクトの幅を広げ、分子-生体超分子-細胞-組織-器官-個体-集団・社会に至る、多数の階層を縦断し、下の階層における要素の挙動から上の階層に現れる創発性の仕組みを説明する構成的アプローチにより、生命システムの本質を解明することを目標にしている。世界的に見ても、これだけの幅広い階層にわたり、融合科学という同一の視点で取り組んだプロジェクトはない。本プロジェクトを通じて、生命システムを融合科学的に解明する世界の拠点を目指している。

その目的達成のために、まず組織編成を行った。拠点リーダー(CEO)を中心に、4名の幹事と経理担当の専従の事務員からなるマネージメント機構を立ち上げ、さらに平成16年度には、これまでCOEで研究を行ってきたポスドクの中から、研究会、国際会議、若手支援プログラムなどを担当する特任ポスドクを雇用し、運営体制を強化した。また、融合科学としての研究推進に当たっては、階層横断的課題に取り組む3つの研究グループ、「ジャンプする形態変化・分化」、「自己組織化とコミュニケーション」、「脳の機能から認識・認知への深化」の相互の連携を密にするために年5回の研究会を開催した。特に力を入れた点としては、プロジェクト参加主要研究室が、既存の研究室の壁を取り払った共通研究施設「アドバンストリサーチラボラトリー」に移動することで、分野横断的研究プロジェクト組織の編成を行ったことが挙げられる。また、研究拠点の国際化を図るために、平成13年11月14-15日に国際シンポジウム「生命システムに学ぶ融合科学-要素から全体への総合化」を開催し、融合科学の成果を国内外へ発信した。

以下いくつかの項目について詳細を述べる。

融合的研究によって得られた新たな知見

本プロジェクトでは、数理、物理、化学、生物、認知などの学問分野にまたがる融合的で特色ある研究成果が期待されている。以下に代表的成果を数例紹介したい。

一細胞生物学の創成:両生類の胞胚期アニマルキャップをアクチビンで処理することで約14種類の器官や組織が既に削られているが、細胞集団の相互作用を構成的に制御することで新たに、感覚器官や血管と軟骨をつくることに成功した。また、特に心臓に関しては、生物学と生物物理、複雑系理論にまたがる融合的成果が得られている。まず細胞レベルでは、オンチップセルソーターを用いて、発生段階の揃った細胞を分取することが出来るようになり、細胞間の情報伝達の分子レベル解析が可能になった。さらに心筋細胞を2次元の升目状に作ったマイクロチップ内で培養し、その数を順次増やし10個以上にすると、細胞間での情報伝達の結果、個々の細胞の拍動が引き込まれ、同一位相で拍動するようになることが分かった。さらにアフリカツメガエルの未分化細胞にアクチビンで処理することで構築された心臓という臓器を、オタマジャクシという個体に移植し、正常に作動することで構築された心臓という臓器を、オタマジャクシという個体に移植し、正常に作動することを確認した。この成果は、一細胞から、組織・器官、個体という階層を貫いて心臓の機能を構成的理解することに成功した例と言える。一方、このような細胞間相互作用による発生・分化については、複雑系の理論による体系的理解が進んでいる。今後の再生医療科学の発展にもつながる重要な成果と考えられる。

細胞を創る:通常、生命科学は細胞を生命システムの最小単位として研究を進めているが、こ

のプロジェクトでは、素性の知れた分子を集合化し、そこに化学反応のネットワークを組み込むことで原始細胞モデルが構築できないかという研究が行われている。すでに触媒を含むリポソームの膜内で、自らを構成する膜分子と同一の膜分子を生産させ、それによりリポソーム自体の数が増えるリポソーム自己複製系が創成されている。さらに最近リポソームの内膜上でDNAの複製にも成功した。このようなアプローチで原始細胞モデルが構築されれば、分子と細胞の間にある巨大な障壁がうち破られることになり、その意義は計り知れない。すでに複雑系の理論では、化学反応のネットワークを取り込んだ原始細胞モデルが構築されており、複雑系の理論と化学合成が融合した成果となると期待される。

その他にも、①バイオインフォマティクス:DNA分子がもつ特異性の高い分子認識を利用したDNAコンピュータの構築と、これを用いた生体機能情報処理により生命の遺伝子ネットワーク像を理解する研究、②宿主アズキゾウムシに細胞内共生する細菌Wolbachiaのある系統で、世界で初めて原核細胞から真核細胞への遺伝子水平転移(転移元の起源まで含めて)が起こることの証明、③心理実験とFMRIでの計測を組み合わせた言語機能の研究で、文法処理とブローカ野の関係の証明と、記憶の数理モデル化、など優れた成果が得られている。

人材育成:学際教育と人材育成への取り組み

「融合科学創成ステーション」で得られた最先端の学際的な研究成果を、平易な言葉に置き換え、前期課程・学部後期課程・大学院の講義科目として開講することで、教養学部・大学院総合文化研究科の学生たちが「融合科学」の新概念を学べるようにした。いずれも既存分野の枠にとらわれない学際的・先端的で分野横断的な構成になっている。

(1) 主題講義「融合生命科学 - 細胞の進化」……大学1~2年生向けの講義

「融合生命科学」への導入目的の講義。21世紀COEの事業推進担当者、および関連分野の教官を加えて、オムニバス形式で講義する。1. はじめに:生命としての「自己性」、2. 生命の前段階:分子の自己組織化と化学進化、3. 膜の自己複製: "細胞" を創る、4. 生命としての情報継承:自然選択の作動、5. 細胞の一般的構造、6. 原始細胞の進化、7. 光エネルギーを利用する、8. 性の進化:有性生殖する細胞、9. ナノテクバイオロジーの紹介、10. 一細胞計測系:細胞内での情報保持伝達継承の動態、11. 複雑系としての生命、12. 細胞集合のダイナミクスと進化、13. 生き物の形づくり:多様な形態へ

- (2)「融合科学概論 I, II」……専門学科に進んだ学部3~4年生向けの講義 21世紀COEの事業推進担当者、および関連分野の教官を加えて、オムニバス形式で毎週講義する。夏学期:「生命システムを構成するもの」、冬学期:「生命システムの高次機能」;前半、後半を通じて、生命システムを構成する細胞や遺伝子、分子などの要素が、いかに互いに相互作用しながら全体を構成し、高次の機能を示すようになるかを解説する。
- (3)「融合科学特論 I, Ⅱ」・……実際の研究をベースにした大学院生向けの講義 21世紀COEの公開研究会において、事業推進担当者がそれぞれ展開している研究内容を講演し、大学院生はそれを聴講する。さらに、毎週開かれる実際の研究に直結する解説(事業推進担当者が講義)を聴講し、課題についてレポートを提出する。

これらの講義により、従来は、既存分野の枠に納まった講義で学んできた学生にも徐々に意識の変化が現れている。その成果は、学部1~2年生の中でも特に、数理・物理・情報志向性の高い理科一類生が生命科学に興味を持ち始めたこと、また、もともと学際的・分野横断的な先端教育を理念としてきた教養学部の理科系3学科(基礎科学科、生命・認知科学科、広域科学科)の学生が、この21世紀COE「融合科学創成ステーション」の展開によって、より具体的に関連する他分野に興味を持ち始めたこと、等に現れている。具体例としては、理論物理志向の学生が生命の進化に興味をもったり、化学志向の学生が生命システムの構成を積極的に学び始めた点などが挙げられる。特に、大学院生には、融合科学の視点を意識して、学際教育と人材育成を目指した教育プログラムが受講できるようその整備に力を注いだ。ポスドク・院生については共通研究施設「アドバンストラボ」で、常に他の関連分野の研究者達と同一空間で研究する

ことで、「現場で学際研究を学べる」体制を確立した。

今後の展望

これまでのところ、「融合科学創成ステーション」としては、所定の目標を十分に達成できたと考えている。本研究の展開に伴い浮かび上がって来た課題としては、以下のものが挙げられる。1) 従来の大学組織の中で、「融合科学創成ステーション」での研究に必要とされる真に学際的な研究展開が、どこまで可能か。2) プロジェクト研究と萌芽的基礎研究は両立し得るか。3) 「融合科学創成ステーション」での研究成果を、融合科学の担い手になりうる研究者の養成、また研究者の卵である学部学生の基礎教育へどこまでフィードバックできるか。4) 本拠点形成がとのような形で社会貢献へと繋がるか。

これらの課題を解決すべく残りの2年、本プロジェクトに全力を挙げて取り組みたいと考えている。

(浅島 誠)

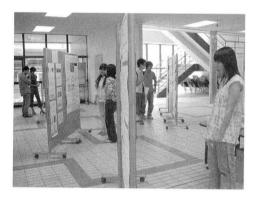
3.「心とことば一進化認知科学的展開」の活動

COEプログラム「心とことば―進化認知科学的展開」も2年目に入り、さまざまな事業が本格化してきた。ここでは、2004年度の活動内容について、いくつかの要点にしぼってご紹介してみたい。

1. 異分野の研究連携

・COEラボのオープン

従来型の研究の枠組みを超えて、本COEが目指す「21世紀型統合人間科学の構築」という学際融合研究を実現していくためには、旧来の研究室に閉じこもってはいられない。異分野の研究者が実際に共同作業をする場が必要である。そのため、研究科(学部長室)のご支援により、昨年度から新ラボの設営を進めてきたが、2004年3月に工事が終わり、4月にラボをオープンさせることができた。場所は17号館(旧情報教育北棟)の1階で、180平米のフロアは、オフィス兼PDワークスペース、赤ちゃんラボ、認知研究ラボ(シールド室、観察室を含む)の3つに別れている。4月から新規雇用の研究員(PD)も加わって、桜の花のもとでの引越しも無事すみ、ラボはさっそく稼動を始めた。6月にはお披露目をかねて、オープンラボが開かれた。高校生や一般の方を含む学内外からの多数の来訪者があり、オフィス前ホールでのポスター研究発表とラボでの実験デモンストレーションを通して研究活動をご紹介した(写真)。オープンキャンパスやホームカミングデー当日にもCOEラボでは一般公開を行った。





· 異分野連携研究

COEラボを中心とした新しい共同研究が複数スタートした。新たに開始された共同研究は、心理言語学実験の脳計測、空間移動表現の言語横断的研究、語彙意味論による計算機用日本語動詞辞書の構築、チンパンジー覚醒時の脳機能計測、類人猿の社会ストレスと生理メカニズム、表情認知機構の解明、性ホルモンとメンタルヘルスの関連などであり、新しいクロスオーバーが各所で始まっている。

2. 学際、国際的教育展開

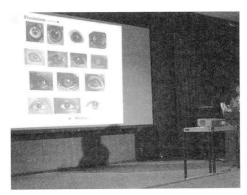
・研究員・RAの採用

学際的な研究の中心を担うのは若手であるというポリシーのもと、昨年度から研究員(PD)を全国規模で公募した。国内外から41名の応募者があり、書類選考の後24名を面接し、17名を採用した。PDはCOEラボまたは事業推進担当者の研究室で研究にあたっている。現在11名のRAは、本COEの各研究プロジェクトの推進、およびCOE全体の円滑な運営を支えている。その他の大学院生、特別研究員が一体となって、これまで4回の研究交流会を開催した。彼らが研究成果を国際発信できるように、国際研究集会への出席を積極的に支援している。

・若手主導型の国際ワークショップの開催

特筆すべきは、PD・院生など若手が一体になって準備、運営にあたってくれた国際ワークショップ「Exploring Social Brain」(2004年3月)の開催である。2日間にわたる研究会には、口頭発表18件ポスター発表33件があり、非常に活発な議論が交わされた。海外からのゲスト2名が来日直前に骨折したり、入院したりといったアクシデントはあったものの、2日間のプログラムは熱気に包まれて終わった。顔表情をはじめとした社会情報の脳内情報処理についての関心の強さが実感できた。これ以外にも、言語科学関係の国際交流も活発に行われ、オフィスにはさまざまな国の言葉が飛び交っている。





・学際交流教育プログラム

言語科学、計算言語学、認知心理学、脳科学などの諸分野における基本的なデータ収集・処理・分析を演習・実習の形で実体験させる形式の大学院科目を開講した。

・教養教育との連携

前期課程のテーマ講義として「心とことば」(受講者約100名)を、また後期課程科目として「進化認知科学」(同約200名)をそれぞれ開講し、COEの成果を教養教育に還元すると同時に、新しい先端学際研究の潮流を次世代に披露する機会を設けた。形式としてはリレー講義(各13回)のスタイルをとり、事業推進担当者とゲストスピーカーが話題提供した。海外ゲストの英語講演も学部生にはたいへんに好評であった。

3 研究成果の国際発信と国際交流

・これまでの研究成果

2003年から2004年末までの研究成果は、PDと事業推進担当者を合わせて、英文論文105編、英文著書8冊、和文論文62編、和文著書35冊、中国語論文3編、韓国語論文1編であった(学会論文集を除く)。これらをまとめた成果報告書は2005年3月に冊子化される予定である。本COEの5つの研究部門ごとに新たな学術的知見の得られた代表的な研究テーマとしては次のようなものがあげられる。

統合言語科学部門:コイネー化と言語変化、論理接続語の多言語比較、受動構文の普遍性と 個別性。

心理言語科学部門:語形成の心内・脳内メカニズム、双生児研究へのベイズ的アプローチ。

計算言語科学部門:質問応答システムの設計、日本語の語彙概念構造の解明。

認知発達臨床科学部門:遅延自己映像認知の脳内機構、抑うつ統合失調症の認知行動理論による解明。

人間進化学部門:エチオピア産人類化石資料を対象とした進化研究、霊長類の脳における発現タンパクの解析、類人猿比較ゲノム解析、唾液中ホルモンの質量分析による定量。

・本COEが主催・共催した国際シンポジウム、ワークショップ、講演会 本COEが主催、共催した国際集会としては、次のようなものがある。

「心の普遍性と多様性」(2003年12月、参加者約200名)「社会脳の探求」(2004年3月、150名)、「北京語・共通語・北方語:文法の尺度からみたコイネー化と言語変化」(同3月、50名)、「日韓言語対照・韓国語教育国際学術発表大会」(同2月、80名)、「世界行動療法認知療法会議」(同7月、600名)、「思考・進化・文化」(同8月、50名)、「Human Evolution」(同8月、400名)、「家族の進化心理学」(同8月、50名)、「認知の進化と発達」(同11月、京大COEとの共催)、「意味論研究会」(月例、毎回約20-40名)

その他、本COEが主催する単発の公開講演会も数多く開催された。詳細は、本COEのニューズレターおよびホームページ http://ecs.c.u-tokyo.ac.jp/をごらんいただきたい。

4. 社会的発信

2004年度に本COEが行ってきた社会的発信活動としては、まず、新入生歓迎シンポジウム「人間とはなにか? どう作られているのか?」(5月)、オープンキャンパス特別講義「ことばの科学」(8月)、駒場祭一般講演会「人間はどのように特別なチンパンジーか」(11月) でそれぞれ講演を行った。日本進化学会の基調シンポジウム「Human Evolution」(8月)、「ジェーン・グドール博士講演会」(11月) も公開で開催された。また、前述のように、3回のオープンラボを実施し、高校生や一般の方々に研究紹介を行った。さらに赤ちゃんラボでは、NHKの幼児向けの番組開発に協力し、その過程はNHKスペシャルで放映された。その他、2004年度のニューズレター2号(7月)と3号(12月)を発行し、ホームページでの活動紹介も随時更新している。教育情報誌やマスコミへの取材にも協力している。

(拠点リーダー 長谷川寿一)

11 受託研究:独立行政法人日本学術振興会 「人文・社会科学振興プロジェクト研究事業」 「ジェノサイド研究の展開」(CGS)

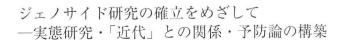
二度と繰り返してはならない!

ギリシャ語で種族、民族を表すgenosと、ラテン語で殺害を表すcideを組み合わせたジェノサイドという言葉は、悲しいことだが、現在の国際社会を語る上で不可欠な用語となった。かつてポーランド出身のユダヤ人法学者ラファエル・レムキンが国際犯罪としてこの造語を提唱し、1948年に国連総会が「ジェノサイドの防止および処罰に関する条約」(ジェノサイド条約)を採択したとき、人びとの念頭にあったのは、第二次世界大戦下のヨーロッパで起きた凄惨なホロコースト(ナチス・ドイツによるユダヤ人大虐殺)であった。「こんなひどいことは二度と繰り返してはならない!」そう言われたのである。

しかし、その後もジェノサイドは世界各地で繰り返された。そのなかには、冷戦後の旧ユーゴスラヴィアのように世界のメディアの注目を集めたケースもあれば、カンボジアやグアテマラのように外からの視線が十分にとどかないまま完遂された事例もあった。

2002年7月、ジェノサイドなどの重罪を犯した個人の責任を追及する国際刑事裁判所 (ICC) の設置を定めた条約 (「ローマ規程」) -日本、未署名-が発効し、ICCは遂に活動を開始した。だがジェノサイド予防の努力が実を結ぶためには、国際刑事司法システムの整備だけでなく、過去のさまざまなジェノサイドの事例を精密に分析し、その発生要因を究明することが重要である。

近年、世界各地で激化する暴力の連鎖は、専ら国家を主体として形成されてきた従来の戦争 認識・紛争予防システムを著しい機能不全に陥れた。ジェノサイドは、行為主体が国家である か否かを問わず、不法な暴力行使の極限形態に他ならない。このメカニズムを解明することは、 21世紀の国際社会が求める平和構築と人間の安全保障を実現する上で不可避の課題となってい る。



「ジェノサイド研究の展開」(CGS = Comparative Genocide Studies)は、独立行政法人日本学術振興会2003年度新規事業「人文・社会科学振興プロジェクト研究事業」に採択された研究プロジェクトで、同事業領域 II 「グローバル化時代における多様な価値観を持つ社会の共生を図るシステムについて研究する領域」のうち「平和構築に向けた知の再編」を担う3つの「コア研究」のひとつである。2003年12月から2005年3月までの「パイロット・スタディ」の段階を経て、2005年4月に「本格研究」(3年間)に移行する予定である。

CGSの目的は、わが国における新たな学問分野としてのジェノサイド研究を確立することにある。目下のところ主として二十世紀以降のジェノサイドとその類似現象に着目し、次の三つの大テーマ、すなわち①「ジェノサイドの実態分析」、②「ジェノサイドと近代(モダニティ)」、③「ジェノサイド予防論」を掲げ、そのもとに14の研究班と総勢50名余りの研究者(大学院生を含む)による共同研究を進めている。





¹ 他の2つの「コア研究」は「地域研究による『人間の安全保障学』の構築」(代表:東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・助教授・黒木英充)、「『アメリカ研究』の再編」(代表:北海道大学・大学院法学研究科・教授・古矢旬)。

ジェノサイドが世界各地で多様な要因によって引き起こされる複合現象であり、それを取り 巻く国際社会の動向とも密接に関連する以上、ジェノサイド研究には個別研究を超えるグロー バルなアプローチと、いくつもの専門分野に跨る多角的で包括的なディシプリンが要請される。 CGSが方法論的に歴史学、地域研究、文化人類学に力点をおきながら、国際政治、国際法、開 発研究、経済学、社会心理学、哲学などの関連分野にも輪を広げ、学融合的な研究を進めてい るのはそのためである。

CGSの独自性

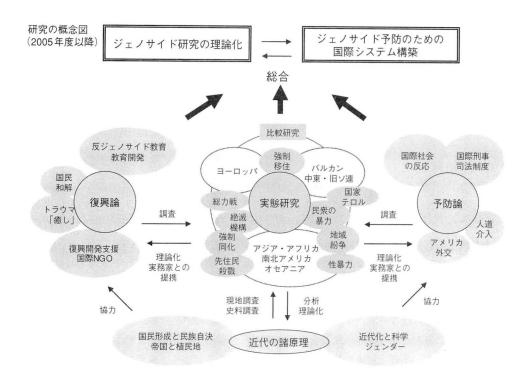
わが国のジェノサイド研究は緒に就いたばかりだが、海外では北米・ヨーロッパ・豪州を中心にすでにかなりの蓄積がある。たとえば米国ではイエール大学やハーヴァード大学を始め20以上の大学に、ヨーロッパではベルリン工科大学(独)、チューリッヒ大学(スイス)、アムステルダム大学(オランダ)など10以上の大学にジェノサイド研究を専門とする大学院研究科・学部または研究所が設置されている。またジェノサイドに関する国際学会も組織され、ジェノサイド研究はディシプリンとして確立しつつある。だがその一方で、各国の歴史的背景の違いから、研究対象となるジェノサイドの事例や問題関心に偏りが見られることも事実である。

CGSは、こうした先行研究の成果と限界を踏まえつつ、次の諸点でオリジナリティを打ちだそうとしている。①研究対象を特定の地域や事例に限ることなく、東北アジアを含む世界全域に射程を広げていること。②ジェノサイドをたんに民族紛争・憎悪の所産とはみなさず、民族自決・人種主義・総力戦・植民地支配・科学など「近代の諸原理」との関連、国際政治の力学の中で捉えようとしていること。③国際法概念としてのジェノサイドを尊重しつつも、「民族浄化」「文化的ジェノサイド」、「戦時ジェノサイド」など「広義のジェノサイド」も視野に入れていること。④ジェノサイド後の社会復興問題を予防論の構築と有機的に結びつけようとしていること。

CGSは現地のフィールドワークにも重きをおいている。たとえば「ジェノサイド後の社会再編」調査班は、「和平合意」後のグアテマラで実施されているマヤ先住民文化に基づく基礎教育プログラムの実態調査とその社会的意義の解明に努めてきたし、「反ジェノサイド教育」研究班は、ジェノサイドの加害国としての過去をもつドイツが戦後その再発防止のためにどのような教育を行ってきたかを検討してきた。

研究成果の発信

CGSは発足以来、研究成果を月例ワークショップと半年に一度開催される国際シンポジウムにおいて公開している。また英文の研究紀要Comparative Genocide Studiesを2004年度に創刊し、海外に向けた成果の発信にも努めている。ワークショップ、シンポジウムの様子はCGSのウェブサイトhttp://www.cgs.c.u-tokyo.ac.jp/で紹介されているので、詳細はそちらをご覧いただきたい。研究の概念図と主な活動の記録は以下の通りである。



2003年

12月13日	創設シンポジウム	ジェノサイド研究の射程
004年	'	
2月23日	ワークショップ	「文化ジェノサイド」と日本の植民地支配
3月18日	ワークショップ	Geschichte der Kaiser-Wilhelm-Gesellschaft im
		Nationalsozialismus (ナチズム体制下の科学者たち)
3月27日	第1回国際シンポジウム	ジェノサイド研究の最前線
3月29日	ワークショップ	Voices from the Lake: A Film about the Secret Genocide
4月17日	ワークショップ	ポル・ポト政権下の粛清・虐殺の構図
5月29日	ワークショップ	グアテマラにおける和平協定後の社会再編過程
6月12日	ワークショップ	民族浄化の抑止と国際人権法
6月25日	ワークショップ	Genocides and Genocide Denials
7月16日	ワークショップ	国民のアイデンティティ生成
	(若手研究報告)	R. レムキンによるジェノサイド論
8月25日	緊急講演会	スーダンで今、何が起きているか
9月 5日	シンポジウム	関東大震災から81年―朝鮮人・中国人虐殺を再考する
10月13日	講演会	グアテマラにおける和平プロセスの展開
11月20日	ワークショップ	旧ソ連・東欧における大量弾圧:ジェノサイドか?
12月 3日	ワークショップ	未来のための記憶―グアテマラ、現場からの報告
12月 4日	第2回国際シンポジウム	平和構築と地域研究

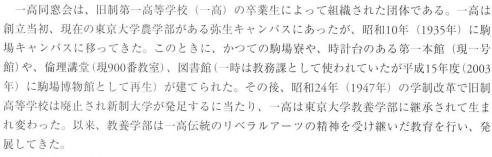
(会場はすべて東京大学駒場キャンパス)

CGSは発足当初から、大学院総合文化研究科・地域文化研究専攻、DESK(ドイツ・ヨーロッパ研究室)、HSP(人間の安全保障プログラム)の支援を得て活動を進めてきた。CGSの催しの大半がこれらの組織との共催によるものであることを、関係者への謝意を込めて記しておきたい。

(地域文化研究専攻、CGS代表 石田勇治)

12 一高同窓会に対する稷門賞の贈呈







一高は多くの優れた人材を輩出した。全寮制であったこともあり、一高同窓会は結束の堅い同窓会である。平成16年(2004年)は一高創立130年に当たり、同窓会は、11月1日に一高同窓会130年記念総会として最後の大きな総会を開かれた。その機会に、三重野康理事長以下の体制から、若井恒雄理事長以下の体制に変わり活動の規模を縮小された。事務所も、これまでの赤坂から東京大学駒場Iキャンパスの「駒場ファカルティ・ハウス」2階に移転され、「駒場友の会」と同居される。



一高同窓会は創立130周年を記念して募金も行われた。その一部を、平成16年2月に、歴史的・地理的なつながりもあり、リベラルアーツの精神を受けついて発展している東京大学大学院総合文化研究科・教養学部の教育研究助成、特に全人的教養教育への有効適切な利用を期待して、計4,600万円のご寄付を下さった。また、平成16年4月に、明治時代の第一高等学校で教鞭を執った外国人教師F. プッチール先生とJ.-B.A. アリヴェ先生の胸像を再建・寄付し、さらに、10月には、同じく外国人教師F.W. ストレンジ先生のレリーフおよび一高記念碑をご寄付下さった(総額約680万円相当)。



本研究科・学部では4,600万円のご寄付を一高記念基金として管理することし、その一部で、一高ゆかりの美術品(駒場美術館所蔵)と書籍の保存事業(駒場図書館所蔵の一高文庫)等を行った。また、残りを一高記念基金として事業を行うことにした。事業の一つは、駒場の学生・大学院生のための「一高記念賞」で、他の一つが駒場Iキャンパスで行われる学術研究集会に対する「一高記念基金学術研究集会支援」である。これらの事業については別項に述べられている。



東京大学では、私財の寄付、ボランティア活動及び援助などにより、本学の活動の発展に大きく貢献した個人、法人又は団体に対し、大学としての感謝の意を表し、及びその功績を称え、これを顕彰するために、「稷門賞」を定めている。(「稷門」(しょくもん)は、同賞の実施要綱によれば、中国の戦国時代の斉(現在の山東省)の首都の城門の名前である。斉の威王、宣王が学者を厚遇したので、斉の都に天下の賢者が集まり、学問が栄えたという故事をこの賞の名称は踏まえている。稷門付近は「稷下」と呼ばれ、多くの学者が集まったことから「稷下の士」という言葉も生まれた。)

功績者に該当すると認める対象者の推薦は部局長が総長に対して行う。総合文化研究科長・教養学部長は、平成16年度の稷門賞候補者として、一高同窓会(代表・三重野康理事長)を推薦したところ、採択された。賞の贈呈式は平成16年11月2日に、弥生キャンパスの武田ホール(武田先端知ビル5階)で行われた。

13 一高記念基金による一高記念賞と一高記念学術研究集 会支援

一高同窓会に対する稷門賞の贈呈の項で述べたように、一高は、昭和10年に現在東京大学農学部がある弥生キャンパスから駒場キャンパスに移ってきて、昭和24年(1947年)の学制改革で東京大学教養学部に生まれ変わった。一高同窓会は、一高卒業生の同窓会であるが、平成13年に始まった旧一高同窓会館の駒場ファカルティ・ハウスへの建て替え・改修を機に、総合文化研究科・教養学部との交流が始まり関係が急に深まった。

本研究科・学部では、一高同窓会が創立130周年記念募金の中から寄付して下さった4,600万円を一高記念基金として管理することし、駒場の学生・大学院生のための「一高記念賞」と、駒場 I キャンパスで行われる学術研究集会に対する「一高記念基金学術研究集会支援」を開始した。基金の運営は一高記念基金運営委員会(委員長は研究科長、委員は副研究科長および専攻主任(現専攻長)・系主任(現系長))が行う。

一高記念賞

一高記念賞は大学院総合文化研究科の大学院学生と教養学部の学生を対象とする賞で、学業、課外活動、社会活動等において特に顕著な業績を挙げ、他の学生の範となった者を顕彰する。 第1回は、教養学部後期課程各学科長および大学院総合文化研究科各専攻・系主任から多様な観点から推薦された優秀な学生を、平成16年3月8日に一高記念基金運営委員会で審査し、下表のような11名の受賞者を決定した。

授賞式は、学部卒業生については、3月26日(金)15時からの教養学部卒業式のあと、大学院修了者については3月25日(木)午後の、各専攻の学位授与式のあとに行った。学部卒業式と学部卒業生の授賞式には一高同窓会から来賓をお招きし、同窓会理事の奥田教久様より祝辞を頂いた。

第1回一高記念賞受賞者

学部卒業生

, a. , , , ,			
学科名	分科・コース名	学生氏名	研究テーマ
超域文化学科	言語情報	島田純理	卒業論文:seem like構文の統語構造と意味分析
地域文化研究学科	ロシア・東欧	藤田晃久	卒業論文:現代ロシアの低出生の原因をめぐる研究
総合社会科学科	相関社会科学	里見龍樹	卒業論文: モダニズムのユートピア (バウハウスの 研究)
基礎科学科	量子	森前智行	卒業研究:量子多体系のエンタングルメントに関す る研究
広域科学科	人文地理	久木元美琴	卒業論文:事業所内保育施設の送迎状況に関する研 究
生命・認知科学科		團野宏樹	卒業研究:発生・分化に関する研究

大学院修士課程修了者

専攻・系名	コース名	学生氏名	研究テーマ
超域文化科学専攻	比較文化	中井真木	修士論文:鎌倉幕府服装制度試論
地域文化研究専攻		田中靖彦	修士論文:中国における三国人物評価と王朝正統論 争

国際社会科学専攻	国際関係論	西 直史	修士論文:国家は国際制度をどのように利用するのか
広域システム科学 系		関口雄一郎	修士論文:一般相対論的天体物理学の研究

大学院博士課程修了者

専攻・系名	コース名	学生氏名	研究テーマ
生命環境科学系		後原綾子	博士論文:カエル初期胚を用いての分化研究

一高記念基金学術研究集会支援

一高記念基金学術研究集会支援は、駒場 I キャンパス内で開催される学術研究集会の必要経費の一部を支援するもので、その詳細は「一高記念基金学術研究集会支援要綱」に定められている。それによれば、応募資格は東京大学大学院総合文化研究科または数理科学研究科の教員で、対象分野は、人文、社会、及び自然科学の全分野である。

支援の対象となる要件を満たす学術集会に対して、研究集会の準備、開催、および事後の事務処理に必要な経費を支援する。1件の支援額は7万円以内とする。年間の採択件数は20件程度。ただし、一高記念基金の存する限りとする。

開催責任者は、「一高記念学術研究集会支援申請書」に必要事項を記入し、総合文化研究科長に申し込む。選考は一高記念基金運営委員会が行う。開催責任者は、学術研究集会終了後速やかに領収証を添付した報告書を提出する。

平成16年度は以下の学術研究集会が支援を受けた。

開催責任者 (氏名・所属)	学術研究集会名称	開催期間	会 場
大澤吉博 (超域文化科学専攻)	ラフカディオ・ハーン:多文化の 異文化と同化	2004年9月25日	数理科学研究科 大講義室
小寺 彰 (国際社会科学専攻)	国際法学会秋期研究大会	2004年10月8日~10日	900番教室、13号館 2号館会議室
池上俊一 (地域文化研究専攻)	新しい中世像をもとめて	2004年10月10日	数理科学研究科棟
松田良一 (生命環境科学系)	筋ジストロフィーの分子治療	2004年11月12~13日	駒場ファカルティハウス・ セミナー室
松田良一 (生命環境科学系)	シンポジウム「世界の科学教育」	2005年1月8日	13号館1313教室

14 「駒場友の会」の発足

駒場友の会の設立総会は、2004年3月20日午後2時より、教養学部アドミニストレーション棟3階の学際交流ホールで行われました。この設立総会で、会則が承認され、本間長世本学名誉教授が初代会長として選出されました。選出された他の理事と監事とは以下の通りです(敬称略、それぞれのカテゴリーであいうえお順)。

副会長—嘉治元郎、毛利秀雄

理 事—浅島誠、石井紫郎、大澤吉博、落合卓四郎、小林寛道、遠山敦子、蓮實重彦、原田 義也、古田元夫、宮川清

監 事—風間勝昭、瀧田佳子

(以上の理事、監事の任期は2005年3月31日までです。)

駒場友の会の特色は、駒場にある大学院総合文化研究科・教養学部で行われる教育研究、文化、スポーツの活動を愛する人ならば誰でも加入できるという開かれた性格にあります。ここで教育を受けた人、ここで働いた人のみならず、近隣の地域の人にもこの会に加わっていただくことを会としては希望しています。ただし、地域の方、そして現役の学生さんには会友という資格で入っていただくので、卒業生、そしてかつての、また現在の教職員がなる会員とはやや区別があるのも事実です。しかし、同窓会がある組織の卒業生だけの会であるのに比べれば、駒場友の会はずっと開放的な組織だと言えるでしょう。そうしたさまざまな人々がこの駒場の教育と研究、文化とスポーツ活動を支えてくださることを、この会は目指しています。

会員数の目標はまず1,000名ということでしたが、その目標達成はまだほど遠いところにあります。2004年11月8日現在、会員は256名、会友は8名です。さらに広く宣伝をして会員数を増やしたいと考えています。どうかこの記事をお読みの方も、この会のことをお知り合いの方に宣伝していただいて、会員・会友の増加にお力をお貸しくださればと思います。会員になれば、駒場図書館・大学院総合文化研究科図書館の蔵書を駒場友の会会員として利用することができます。それもただ館内で読めるだけでなく、借り出すこともできるようになりました(2冊、2週間、借り出し期間延長も可能)。8号館に教養学科図書室があった時は、教養学科の卒業生はかなり自由に図書が使えたのですが、図書館が統合され、学生には便利になったのに反して、卒業生にはやや使い勝手が悪くなりました。その問題点は駒場友の会会員になることでかなり解消されます。もちろん前は会費など不要だったのが、これからは会費が必要になったという点をまことに心苦しく思いますが、その点はどうかご寛恕くださるようお願いする次第です。

駒場友の会の事務室(電話 03-3467-3536)は、旧同窓会館跡地に出来た駒場ファカルティハウス2階にありますが、同ハウス内には「ルヴェ ソン ヴェール 駒場」というレストランと「ファカルティクラブ橄欖(かんらん)」というバー兼レストランがあります。それらはやはり地域に開かれた施設ですが、駒場友の会会員は施設利用に関して特典があります。その点は上記の事務室にお尋ねください。これまで大学には教員・学生の保護者がゆっくり時間を過ごせる施設がありませんでした。欧米の大学にとどまらず、韓国の大学においてもファカルティ・クラブという施設があって、教師、卒業生が食事をしながらゆったりとくつろげる空間があるのが羨ましく思えたものでした。日本は世界第2位の経済大国だと言われながら、大学の施設に関してはその豊かさを実感できることはありませんでした。それがこのファカルティハウスが出来たことで、かなり改善されたように思います。どうぞ在学生の保護者の方々、卒業生の方々に来ていただいて、駒場の目覚ましい変わりようを見ていただきたいと思います。

駒場友の会はまた駒場で開かれる催し物、例えば、オルガン演奏会、駒場博物館の展示など についても会員にお知らせするようにしています。教養学部報は在学中の時にはさして興味を 感じなかった人もいらっしゃると思いますが、これもさまざまなお知らせ、書評などが載った 内容豊かな刊行物です。ご希望の会員には教養学部報をお送りするようにしました。11月1日から12月17日まで駒場博物館で行われた「第一高等学校創立130周年記念・駒場の歴史展」はとても興味深い催し物でした。ゆっくり展示物を見ていれば、優に半日はかかってしまいました。そうした充実した展覧会がこれからも行われる予定です。欧米の大学では学内にすばらしい美術館、博物館があり、さまざまな展覧会が行われているのが普通ですが、駒場もそうした活動を行っていきたいと思います。そうした活動を会員として支えてくださることをお願いします。そうしたことをお知らせする媒体として「駒場友の会会報」を発刊しました。とりあえず年2回の発行を予定しています。その会報に同封してさまざまな催し物のご案内を会員に差し上げます。どうぞそれをご覧ください。ただ、そうした印刷物ではどうしても情報が遅れ気味となりますので、友の会ホームページも開設しました。ホームページのアドレスは次のとおりです。

http://www.c.u-tokyo.ac.jp/ilovekomaba/

そのホームページにはこれまでの駒場友の会の活動が詳しく載っていますので、どうぞご覧ください。適宜、情報は更新されています。

これまで駒場友の会が協賛した学内行事としては、11月13日(土)に行われたホームカミン グディが挙げられるでしょう。これは東京大学としては近年行うようになった行事ですが、私 学ではよく行われてきた卒業生の集いです。昨年は本郷キャンパスだけでしていたものを、2004 年度からは駒場キャンパスでも行うようにしました。その折、「Glorious Ichiko~遺産とその継 承」という記念講演会が行われました。駒場博物館の展示もそうですが、今年は第一高等学校 の創立130周年ですので、そうした一高関係の催し物が続きました。それを駒場友の会が協賛し ているのは、一高同窓会が駒場友の会に団体加入をしているからです。第一高等学校は、昭和10 年に本郷から駒場に移り、昭和24年に新制東京大学が発足するまで、この駒場の地で多くの青 年を教育することに力を注いできました。同じキャンパスを共有した経緯から言って、第一高 等学校は東京大学教養学部のほぼ前身であると言って間違いのないところです。しかし、第一 高等学校は昭和25年にその歴史を閉じ、その後は同窓会が存在するだけとなりました。その同 窓会も次第に卒業生の数が減りつつあるので、2004年、駒場友の会に団体加入をすることで、 その伝統と歴史とを繋げていきたいと考えていらっしゃいます。駒場友の会もその企図にお力 添えしたいと考えます。一高同窓会の事務所も、駒場友の会の事務室と同じところにあります。 会報第一号には、一高同窓会の方々が事務室内で和やかに談笑している写真が載っていますの で、どうぞご覧になってください。

さらに東京高等学校(旧制)同窓会も近く、駒場友の会に団体加入される予定です。旧制の東京高等学校も新制の東京大学が発足する際に、組織として合流した経緯から東京大学の前身の一つと言えます。そうした東京大学教養学部のさまざまな過去の歴史を受け継ぎ、これからの未来を作る組織として駒場友の会は存在します。大学はこれからさまざまな苦難に立ち向かわなければならないでしょう。日本の人口は2006年を頂点にして減り始めると予想されています。すでに高等学校の卒業生は減り始め、マクロの視点から見ると大学全入という恐ろしいシナリオも現実の話題として話されるようになりました。そうした情勢の中で、ますます大学の教育力がためされる時になってきたと思います。学生にとって意味ある教育がどのように行われているかが問われる時代になってきたのです。その場合、大学を支えるのは単に、学生と教員だけではないと思います。在学生の保護者の支援は言うまでもありません。そのほかに、卒業生の支援も必要なのです。大学でどのような教育研究が行われ、どのような文化的活動が遂行されているかを知らせる組織として駒場友の会はありたいと考えています。ご支援をお願いする次第です。

(事務局長 大澤吉博)

15 ホームカミングディの開催

卒業生と大学との交流を深め、一層の親睦を図ることを目的とした「東京大学ホームカミングデイ」が、11月13日(土)に、本郷キャンパスと駒場キャンパスで開催された。ホームカミングデイはこれまで本郷では開催されたことがあったが、駒場では初めての開催となった(「駒場友の会」との共催)。当日のプログラムは以下の通りである。

12:30~1:30 駒場キャンパス全体行事(@数理科学研究科棟大講義室)

- ①大学院総合文化研究科長・教養学部長(浅島誠)挨拶
- ②東京大学総長(佐々木毅)講演……本郷会場からのインターネット中継

1:30~5:30 各種イベントを並行開催

- ①加藤登紀子さんの対談・コンサート…本郷会場からのインターネット中継
- ②駒場博物館「駒場の歴史展」記念講演会 (2:00~4:00@学際交流ホール)
- ③ジェーン・グドール博士特別講演会「アフリカの森からのメッセージ」 (2:30~4:00@900番教室)
- ④キャンパスツアー、研究室訪問(適宜)

5:30~7:30 レセプション(@駒場ファカルティハウス)

私立大学や海外の大学ではこの種の行事はかねてより開催され、同窓会が主催する大きなイベントとして定着し、大学によっては参加者にくじ引きで乗用車の景品があたるところもあるなどと聞くが、東京大学(駒場)では、せいぜいいくつかの学科などで卒業生が年に1回集まって同窓生の集いを開催している程度の取組がこれまでの現状である。

真偽は別として東大の卒業生はそもそも愛校心が薄いとか、(私大と違って) 寄附集めというインセンティブが大学側にない (正確には、これまでなかった) といった様々な事情があるとは思われるが、今後、社会と大学との繋がり・コミュニケーションのあり方を改善していく必要があるのは事実であろう。そのための一歩として、まず卒業生との交流・親睦を深める機会として、大学院総合文化研究科・教養学部ではホームカミングデイの開催に踏み切った。

当日は、駒場の後期課程学科・大学院を卒業・修了された方々、教養学部の前身となった第一高等学校の卒業生、教職員OB/OG、120名余の参加を得た。今回は、駒場博物館の特別展示「第一高等学校創立百三十周年記念 駒場の歴史展」の開催期間にあたっていたことから、当日、ホームカミングデイ企画として、「駒場の歴史展」記念講演会を開催したり、総合文化研究科で推進されている21世紀COE「心とことばー進化認知科学的展開」と共催の特別講演会としてジェーン・グドール博士による「アフリカの森からのメッセージ」を開くなど、盛りだくさんのホームカミングデイとなり、久しぶりに駒場に帰ってこられた卒業生もこのキャンパスの活気ある発展ぶりを目の当たりにしていただけたと確信している。

来年以降も、充実した企画を準備して、卒業生を心から暖かくお迎えしたいと思う。



正門にかけられた「ようこそ駒場キャンパスへ」の看板



ジェーン・グドール博士による「アフリカの 森からのメッセージ」



「駒場の歴史展」記念講演会



駒場ファカルティハウスで開かれたレセプション

16 2004年駒場地区オープンキャンパス報告







2004年8月3日、教養学部、数理科学研究科、駒場 II (リサーチ) キャンパスの共催によって、東京大学オープンキャンパス2004 (駒場地区) が開催された (なお本郷地区は8月2日に開催)。駒場地区としては、2003年に続いて2回目の開催となる。今年度は社会連携委員会 (三谷博委員長) のもとに、石浦章一教授を委員長とする実行委員会を組織し、この実行委員会を主体として準備、運営にあたった。参加者の募集は東大ホームページや高校への案内状を通じて行なわれたが、駒場地区は定員600名の募集にたいして1,200名をこえる応募があり、抽選によって750名の当選者を決定した。なお、当日の参加者は予想をやや下回り557名であった。

当日のプログラムであるが、午前中は900番教室に参加者全員を集め、浅島学部長の挨拶にはじまって、前期、後期課程の紹介、数理科学、駒場 Π キャンパスの紹介と続き、教養学部の伊藤たかね教授による講演(「心とことば」)で締めくくった。90分の昼食休憩をはさんで再開された午後は、合計13の講義、施設見学(図書館、情報教育等、博物館、数理科学研究科、駒 Π)、実験デモンストレーションやパネル展示、そして学生による質問コーナー(「先輩に聞こう」)とまさに盛りだくさんの企画から、参加者が各自の興味にしたがって(ちょうどテレビの番組表でも見るようにして)自由に選び取っていく形をとって進められ、16時30分に無事に終了した。(模擬講義の内容については別表を参照。)

細部に改善すべき点があったとはいえ(たとえば、900番教室の音響の悪さ、女性用トイレの混雑)、当日実施された参加者アンケートの集計結果を見る限り、参加者の満足度は非常に高く、今年度も本企画は十分に成功をおさめたと見てよいだろう。昨年に引き続き午後のコースを参加者の自由な選択に委ねたことはとりわけ好評であった。キャンパスを自由に移動しながら、図書館の設備に感嘆したり実験デモンストレーションに目を輝かせていた彼らの姿が印象に残る。また、大学での講義に初めて接した高校生が感銘を受けている様子も十分にうかがうことができた。ある参加者は伊藤教授が午前の講演の冒頭で言われた言葉を受けて、「一人の意見としての授業」という形式にとても興味を引かれたという感想を記している。文字通り答えの分かっていないことを研究するから研究なのであり、授業もまたそうした追求のプロセスを反映しうるという発見はたしかに貴重なものであり、もしも多くの参加者にとってそうした発見の場となることができれば、オープンキャンパスという試みも、大学の単なる宣伝(受験生集めの手段)をこえて、社会に向けた教育活動としての意味をもちうるのではないだろうか。

本年度の特徴としてとくに、新たに発足したジュニアTA制度を活用して30名をこえる学生諸君の協力をえることができたことをあげておきたい。質問コーナーはもちろんのこと、実験の準備、受付や施設見学の案内にも大いに活躍してもらった。また終了後にも実施体制の改善のためのさまざまな意見を寄せてくれた。高校生から見れば、在学生は教員よりもはるかに身近な存在であり、未来の自分の姿を映す鏡(少しはゆがんでいたりするかも知れないが、それでも教員ほどゆがんではいないだろう)でもある。その協力は高校と大学の橋渡しを目指すこの種の企画にとって、これからも必要不可欠なものとなるにちがいない。

全体として成功だったとはいえ、問題点はもちろんある。まず、オープンキャンパスと称しながら、参加者の人数制限を行ったことであり、本年もまた抽選に漏れたり、抽選のあることを知らないままに受付に来た人たちが30名をこえた。抽選を実施している以上、当選者と同じ扱いにはできず、施設見学を除いては、参加をお断りせざるをえなかったが、そのような対応が望ましいものでないことは言うまでもない。内容を薄め、真の意味でオープンとするか、それとも抽選を実施してでもプログラムの充実をはかるかは、実施にかかるさまざまなコストとのかねあいも含めて、容易には解答を見いだしがたい問題である。

またこれは理念に関わることであるが、、学生質問コーナーを文系、理系に分けたことと、 便宜上とはいえ、講義もまた文系講義と理系講義に分けたことは、文理の融合をうたう教養学 部としては避けるべきであったのかもしれない。同じ指摘は、ジュニアTAとして協力してくれた学生諸君の側からも寄せられた。

ともあれ、こうした広報活動の必要性は今後高まることはあっても、低まることはないであろう。毎年、少しずつでも改善を加えていくことで、まずは参加者にとって、そして実施側にとっても満足感、充実感の残る企画となっていくことが望まれる。

(山田広昭)

模擬講義一覧

映画空間の構造	松浦 寿輝
観光の文化人類学	山下 晋司
カリブ海のフランス	増田 一夫
北朝鮮の経済「改革」評価	深川由起子
戦後日中関係の展開	石井 明
公共性とは何だろう	山脇 直司
運動の上手下手と脳の働き	大築 立志
言語の脳科学	酒井 邦嘉
生き物の再生	松田 良一
身近な危険を考える	廣野 喜幸
100年目の相対性理論	加藤 光裕
不可能の証明	斎藤 秀司
かたち	今野 宏

17 社会連携への取り組み

大学における教育研究活動の成果を直接に社会へ還元するため、総合文化研究科・教養学部 では、初等中等教育との連携プログラムや、オープンキャンパス、研究室公開、美術博物館の 展示会、公開オルガン演奏会などの活動を行っている。2004年度は別に記すオープンキャンパ スや美術博物館の展示を行ったほか、高校生のための公開講座を毎週金曜日の夕方に開催した。 多くの高校生や市民がこれに参加したが、その講義記録をもとに、昨年度と今年度の講座の多 くを編集して『16歳からの東大冒険講座』として刊行した。その映像記録の一部も新年度に教 養学部のウェブ・サイトに公開する予定である。

(1)「高校生のための金曜特別講座」

夏学期に15回、冬学期に13回、「高校生のための金曜日特別講座」を開講した。毎回、30名 から200余名の高校生や保護者、高校教員、一般社会人らが受講し、教養学部の教員を中心とし た講師の講義のあと、活発な質疑を展開した。受講の生徒には、教養学部発行の出席カードを 配布し、出席した場合はそれに捺印し、高校の「学外学習」の単位認定に対応した。日時と場 所、およびプログラムは、以下の通りであった。なお、このプログラムは、教養学部のウェブ ・サイトに随時、最新のものを公開している。

http://www.c.u-tokyo.ac.jp/jpn/kyoyo/

日時: 毎週金曜日 18:10-19:30

場所: 東京大学教養学部13号館2階1323教室

夏学期

コーディネイター: 松田良一助教授(生命環境科学系・生物学)

4月16日 「大学で心理学を学ぶ:心理学との出会い、心理学の面白さ」

丹野義彦(生命環境科学系・心理学)

橋本毅彦 (先端科学技術研究センター・科学史) 4月23日 「時計と時間の歴史」

嶋田正和(広域システム科学系・生物学) 4月30日 「進化とは何だろうか」

石田英敬 (言語情報科学専攻・フランス語) 5月7日 「記号の知」

船曳健夫(超域文化科学専攻・文化人類学) 5月14日 「日本人論の行方」

5月21日 「イタリア! イタリア!」 村松真理子 (地域文化研究専攻・イタリア語)

5月28日 「国境紛争から地域協力への道 - 中ロ関係の50年」

石井 明(国際社会科学専攻・中国外交史)

6月4日 「21世紀の物理学-超弦理論とはどんなものか」

米谷民明 (相関基礎科学系・物理学)

6月11日 「人間生命科学入門:からだは細胞のすみか-そしてあるじはわたし」

跡見順子 (生命環境科学系・スポーツ身体運動)

小森陽一 (言語情報科学専攻・国文漢文学) 6月25日 「21世紀に読み直す宮澤賢治」

7月2日 「写真と異文化理解-21世紀の対話のために」

6月18日 「認知と進化の複雑系理論」

今橋映子 (超域文化科学専攻・フランス語)

池上高志 (広域システム科学系・物理学)

三谷 博(地域文化研究専攻・歴史学) 7月9日 「日本史の中の謎」

山脇直司(国際社会科学専攻・社会思想史) 7月16日 「21世紀の日本社会を考える」

薩摩順吉 (数理科学研究科・数学) 7月23日 「微積分の力」

冬学期

コーディネーター: 小森陽一教授(言語情報科学専攻・国文漢文学)

10月8日 「21世紀の社会と学問」 小森陽一 (言語情報科学専攻・国文漢文学)

10月15日 「アフリカの飢餓と戦う」 Gordon Sato (米国科学アカデミー会員・生物学)

10月22日 「科学技術の発展と人間社会」 廣野喜幸(相関基礎科学系・科学史科学哲学)

10月29日 「心と戦争」 高橋哲哉 (超域文化科学専攻・哲学)

11月5日 「すべり運動-生き物の運動とそのしくみ」

上村慎治(生命環境科学系·生物学)

11月12日 「ヨーロッパ統合を考える―『新しいヨーロッパ』の視点から」

柴 宣弘(地域文化研究専攻・歴史学)

11月19日 「なぜ宇宙を研究するか」 蜂巣 泉(広域システム科学系・宇宙地球科学)

11月26日 「言語と脳から見た健康と病」 酒井邦嘉 (生命環境科学系・心理学)

12月3日 「21世紀の学力」 佐藤 学(教育学研究科)

12月10日 「文学のたくらみ、翻訳の不思議」エリス俊子 (言語情報科学専攻・英語)

12月17日 「原子・分子たちと人間―量子化学の視点に立った物質観・世界観」

永田 敬(相関基礎科学系・化学)

1月21日 「人ゲノムの解読と人権」(会場は12号館1225番教室)

石浦章一(生命環境科学系・生物学)

1月28日 「日米関係の現在と将来」 油井大三郎(地域文化研究専攻・歴史学)

出版

東京大学教養学部編『16歳からの東大冒険講座』1~2、培風館、2005年。

(2)「教養学部オルガン演奏会」

総合文化研究科・教養学部にはオルガン委員会が組織されており、毎年、3・4回、キャンパス最大の歴史ある教室900番に設置されたオルガンを使って演奏会を催し、無料で学内外に公開している(定員先着500名)。今年度は第100回の記念演奏会を開いたほか、総計3回の演奏会を催し、いずれも多くの聴衆を集めた。演奏会のプログラムは次のウェブ・サイトに随時掲載されている。

URL http://organ.c.u-tokyo.ac.jp/

第100回記念オルガン演奏会

この記念すべき演奏会には、バッハ・コレギウム・ジャパンを率いて国内外で活躍している 鈴木雅明氏を四人の声楽家とともに迎え、J・S・バッハのオルガン・ミサ『クラヴィーア練習 曲集』第三巻の抜粋を演奏していただいた。定員を上回る700名もの聴衆が集まるほどの盛況で あった。

日時:6月7日(月)午後6時30分開演

演奏:鈴木雅明 (オルガン)

藤崎美苗 (ソプラノ)

上杉清仁 (カウンターテナー)

水越 啓 (テノール)

渡辺祐介 (バス)

曲目:J·S·バッハオルガン・ミサ『クラヴィーア練習曲集』第3巻より

プレリュード 変ホ長調 (BWV552/1)

キリエ、永遠の父なる神よ (BWV672)

キリストよ、世の人すべての慰め (BWV67)

キリエ、聖霊なる神よ (BWV674)

いと高きには神にのみ栄光あれ (BWV675,677) これぞ聖なる十戒 (BWV 679) われらみな一なる神を信ず (BWV681) 天にましますわれらの父よ (BWV683) われらの主キリスト、ヨルダンの川に来たり (BWV685) 深き淵より、われ汝に呼ばわる (BWV687) われらの救い主なるイエス・キリストよ (BWV689) デュエット 4曲 フーガ 変ホ長調 (BWV 552/2)

第101回オルガン演奏会 「別れの主題に寄せて」

日 時:10月13日(水)午後6時30分開演

指 揮:カイ=ウヴェ・イェルカ

オルガン:ミヒャエル・ウツ

合 唱:国立ベルリン大聖堂合唱団

曲 目:グレゴリア聖歌 「サルヴェ・レギナ」

H・イザーク 「あなたはまことに美しい」 オルランド・ディ・ラッソ 「巫女の預言」より

L・レヒネル 「生と死の格言」より

H・イザーク 「インスブルックよ、さようなら」

バッハコラール「今や野山は憩いて」

作者不詳 「さらばと告げん」

I・P・スヴェーリンク 「歳若くして命尽きたり」

J・ブラームス コラール前奏曲「おおこの世よ、さようなら」

M・レーガー「マリアの歌」

ドイツ民謡より「マリアの歌」

第102回オルガン演奏会 「バッハ鍵盤音楽の楽しみ」

日 時:11月25日(木)午後6時30分開演

オルガン:松居直美

曲 目:J.S.バッハ 前奏曲とフーガ イ長調

コラール・パルティータ 「おお神よ、汝いつくしみ深き神よ」

幻想曲とフーガ ハ短調

「いざ来たれ、異邦人の救い主よ」

前奏曲とフーガイ短調

18 平成18年度からの学部前期課程のカリキュラム改革と 進学振分け制度の改革

1. はじめに

東京大学の学部前期課程教育は、本学の教育理念の根幹を支え、後期課程教育の土台を形作るものであり、本学入学者の在学中及びその後の勉学の基礎を作るうえで、きわめて重要である。その教育の実施は、全学の協力・連携の下に、大学院総合文化研究科・教養学部が責任部局として担っているが、カリキュラムや進学振分け制度を含む基本事項は、常に全学的な議論を経て策定される。

東京大学の学部前期課程教育の根底を流れるものは、旧制第一高等学校の伝統であつたリベラル・アーツ教育である。平成15年3月に制定された「東京大学憲章」にも、「東京大学は、学部教育において、幅広いリベラル・アーツ教育を基礎と」することが謳われている。この基本的な方向を堅持しつつ、社会の要請に応える優れたカリキュラムを維持することが我々に要請されている。現行のカリキュラムは平成5年に施行され、その後も不断の改良を加えられてきた。その理念は、10年余の教育において大筋で生かされてきたが、学問の進展や時代の要請、学生の気質の変化に伴って、いくつかの見直すべき点が顕在化してきたことも否めない。平成18年4月からは新学習指導要領による初等中等教育の修了者が入学してくる。それらに総合的に対応すべく、今回のカリキュラムの改革を行った。

2. 今回の学部前期課程カリキュラムおよび進学振分け制度検討の体制

東京大学では、平成12年10月に「東京大学21世紀学術経営戦略会議(UT21会議)」を評議会の下に設置し、平成13年10月にはその下の委員会として「教育体制検討委員会」が発足した。同委員会は平成18年度の入学生から、新カリキュラムによる前期課程教育と新しい進学振分け制度を実施することを決定し、その下に置かれた「教育体制検討WG」および「進学振分け制度検討WG」で、本格的な検討を開始した。

平成14年度の議論で、科類ごとのカリキュラムに特徴をもたせること、および進学振分け制度の自由度を増大させることが、基本的な指針として合意された。平成15年度は、この指針に従いつつ初等中等教育における学習指導要領の変化に対応する基礎教育の強化の要請にも応える改革案の作成が、教養学部のカリキュラム改革委員会において行われた。前期課程教育に責任をもつ教養学部と後期課程各学部との全学的な対話の中で前期課程カリキュラムの改革案が練り上げられていったことが、今回の大きな特徴となっている。

平成16年4月の法人化に際して全学的な検討組織は改められ、新たに設けられた「教育運営委員会」の下の「学部前期課程部会」、および「教育企画室」の下の「進学振分け制度検討WG」で検討が進められた。

教養学部では、平成13年に上記「UT21会議・教育体制検討委員会」における全学的な議論が始まると同時に、学部長の下にアドバイザリー・グループを置いてその審議に対応した。平成14年10月には「前期課程カリキュラム改革WG」を設置して集中的な検討を行った。平成15年4月に「前期カリキュラム改革委員会」設置し、具体的なカリキュラムの改革に着手した。また、進学振分け制度については、学部の常置委員会である「前期運営委員会」の下に「進学振分けWG」を置いて検討した。

3. 科類の特徴の策定

東京大学教養学部前期課程の学生は、文科一類、文科二類、文科三類、理科一類、理科二類、

理科三類のいずれかに分かれて入学する。全学の「教育体制検討委員会」において、この科類 の特徴を明確にすることが方針として定められた。明文化された科類の特徴は以下のようなものである。

文科一類:法と政治を中心にして社会科学全般の基礎を学び、関連する人文科学と自然科学 の諸分野にわたって理解を深め、人間と社会について広い見識を養う。

文科二類:経済を中心にして社会科学全般の基礎を学び、関連する人文科学と自然科学の諸 分野にわたって理解を深め、人間と組織について広い見識を養う。

文科三類:言語、思想、歴史を中心にして人文科学全般の基礎を学び、関連する社会科学と 自然科学の諸分野にわたって理解を深め、人間と文化的・社会的営為について広 い見識を養う。

理科一類:数学、物理学、化学を中心にして数理科学・物質科学・生命科学の基礎を学び、 自然の基本法則に関する探究心を養い、科学や技術と社会の関わりについても理 解を深める。

理科二類:生物学、化学、物理学を中心にして生命科学・物質科学・数理科学の基礎を学び、 自然の諸法則に関する探究心を養い、科学や技術と社会の関わりについても理解 を深める。

理科三類:生物学、化学、物理学を中心にして生命科学・物質科学・数理科学の基礎を学び、 人間についての探究心を養い、生命と社会の関わりについても理解を深める。

カリキュラムの構成のみによって、これらの特徴を持った人材の養成を保証することは、もとより不可能である。この明文化はむしろ、東京大学が、人材養成の方向をこの6種類に分類してカバーしようとしていることを学内外に明示することによって、受験生が自分の望む科類を選んだり、教養学部がカリキュラムや授業内容を特徴付けたり、後期課程各学部・学科等が進学振分けの条件を定めたりする際の参考に供するものである。これら3者の判断や選択が有効に働いて始めて、結果的に科類の特徴が体現されると考えている。

4. 平成18年度からのカリキュラムの概要

平成5年から施行されている現在のカリキュラムの基本構造(基礎科目・総合科目・主題科目) は維持されている。

1. 基礎科目

基礎科目は、学部前期課程において身につけておくべき、幅広い専門分野において通用する 基本的な知識と技能と方法を習得させるものである。今回の改定では以下のような変更を行った。

- (1) 外国語、数学演習、および全学自由研究ゼミナールの1コマ (90分授業) あたりの単位数を 従来の1コマ (90分授業) 1単位から1コマ2単位に改める。
- (2) 外国語の必修単位数(正確には必修コマ数)を削減する。このように実質の必修単位数を減らすかわりに1クラスあたりの定員を減らし、少人数で密度の濃い授業を実現する。
- (3) 情報教育については、高校での「情報」の必修化を踏まえて、現行の「情報処理」の授業内容を見直し、科目名も「情報」とする。
- (4) 文系の基礎科目については、現在は「方法論基礎」の科目群の中から8単位選択必修(文系 3科類共通)であるが、「方法論基礎」という大分類を廃止し、基礎科目を「社会科学」「人 文科学」「方法基礎」に分類し、類ごとに異なった履修要求によって、文科各類の特徴を出 す。
- (5) 理系の基礎科目は、全て科目指定の必修である。数学を強化し、理科全類共通に数学8単位を必修とすると共に、数学演習4単位も必修化する。物質科学では「熱力学」(理科一類)、「化学熱力学」(理科二、三類)を基礎科目として必修化する。また、理科一類の基礎科目に、「生命科学」を新設し、理科三類に、生命倫理、認知脳科学を含んだ基礎科目「人間総

合科学」を新設するなど、生物科学も強化する。

2. 総合科目

総合科目は、現代において共有すべき知の基本的枠組みを、多様な角度・観点から習得して 総合的な判断力や柔軟な理解力を養う科目である。

今般のカリキュラム改革作業の中での総合科目の見直しは、総合科目の基本的性格を堅持し、AからFまでの6系列を置く基本的枠組みを維持するという前提のもとで進められた。その上で、大科目と各大科目内の科目についての修正や追加を行った。同時に、全ての総合科目について、開講手配に関する責任をもつ母体(責任母体)を、原則として大科目毎に確定した。

総合科目の選択必修科目単位数については、現行の18単位から16単位に変更した。

3. 主題科目

主題科目は、小人数クラスを通して培われる深い問題意識と動機づけを修得する科目である。全学の、研究所を含むさまざまな部局の教官が数多く参加して、多数開講されている。現行の「テーマ講義」と「全学自由研究ゼミナール」に新たに「全学体験ゼミナール」を加える。また、これまで主題科目の中でも「全学自由研究ゼミナール」は1コマ!単位であったが、主題科目はすべて1コマ2単位に変更する。その上で、2単位以上を選択必修とする。

5. 平成18年度入学者からの進学振分け制度

(1) 2段階方式の維持

これまでと同様に2段階に分けて振分けを行うこととし、第1段階で定員の7割、第2段階で3割の進学先を決める。

(2)「指定科類枠」と「全科類枠」

現行の進学振分け同様、各学科等(進学振分けの受入単位)がそれぞれの科類からの進学定数を指定して、その範囲内で希望者の中から成績順に進学者を内定することを基本とし、これを「指定科類枠」と呼ぶ。これに加えて「全科類枠」を導入することにより、全ての科類から全ての学部(注:「全ての学科」ではない)に進学できるようにする。

(3) 進学振分けにかかわる成績評価

進学振分けの選抜は、従来通り本人の志望と成績のみによる。第1段階の「指定科類枠」では全学科に共通な成績評価を用いる。第2段階の「指定科類枠」では、従来通り学科等ごとに特徴ある成績評価法を導入する事が可能である。「全科類枠」では、第1段階、第2段階とも、各学科等の要求科目(次項参照)を考慮した全学科に共通な成績評価を用いる。

(4)「全科類枠」と「要求科目」

「全科類枠」によってある学科等に進学しようとする学生は、自分が所属する科類の進学振分け対象要件の諸科目・単位数と、(その学科等が「要求科目」を指定している場合は)「要求科目」の単位を取得していなければならない。「要求科目」は学科等の指定科類の必修科目の中から指定される。各学科等はこの他「要望科目」を指定することができる。

19 キャンパスの整備

1. 2004年度の施設・環境整備の概要

2004年度の施設・環境整備については、まず昨年度末に完成した「駒場ファカルティ・ハウス(国際学術交流会館)」、「男女共同参画支援施設(保育所)」の本格利用が始まったこと、また、「情報教育南棟増築」に新システムが入り4月の新学期から運用が始まったことが挙げられる。これらについては別に詳しく報告する。また、12階建ての文理融合研究棟第1期棟は2004年9月に建築工事が完成し、2004年度中に引っ越しが行われる。進行中の計画としては、「駒場コミュニケーション・プラザ(仮称)」の新築をPFI事業で行うことが昨年度認められ、本年度は事業が開始された。また、2004年度の補正予算で5号館の改修が認められ、2005年度末の完成を日途に工事が開始される。

(1) 駒場コミュニケーション・プラザ

旧駒場寮跡地に計画された「駒場コミュニケーション・プラザ(仮称)」の進捗状況について述べる。2003年度のPFI事業としての導入可能性調査にもとづき、本年はその具体的実現に向けて、「実施方針の公表」、「特定事業の選定・公表」、「入札説明書公表」、2回にわたる「質問受付」と「質問回答公表」を経て、12月に事業者による提案書を受付し、1月にヒヤリングを実施した後、落札者が選定された。本契約の後、具体的な設計を経て、工事が行われる。詳細は東京大学ホームページ(http://www.u-tokyo.ac.jp/fac01/b07_03_01_j.html)を参照されたい。

本事業は、最終的に教育施設と福利厚生施設を複合させるものとなった。

その内容については、PFI事業の性格上、最終判断は民間事業者の意思にまかせることとなるため、前述の「入札説明書」の一部を構成する「要求水準書」を作成し、大学の希望を条件として記述することが求められた。「要求水準書」作成に当たっては、総合文化研究科内に「WG」を設け検討を進める一方で、学生課を通じて学生の要望を聞いた。また、2003年度より通算して10回にわたる学生説明会を開き、その進捗状況を報告するとともに、可能な限り学生の要望が取り入れられるよう配慮した。「要求水準書」では、本施設は教育施設と購買部からなる北棟、食堂からなる南棟と和館の3棟から構成される。北棟については、2006年3月、南棟、和館については、2006年9月に完成予定である。

(2) 総合研究棟(18号館)

2003年初頭から行われていた総合研究棟の建築工事が2004年9月に完了した。その後、家具の納入、引越しが行われ、2005年度当初から利用可能となる。

本施設は、研究棟ではあるが、積極的に院生学習・端末室や院生ラウンジ等を設け、専用の学習・研究や休息・交流の場が著しく乏しい大学院学生に配慮したものとなっている。また、映像情報、音声情報や言語情報の解析・発表の場、およびマルチメディア教材開発の場等を設け、教育・教材開発・研究のいっそうの充実を場の提供という観点から支援している。これに関連して、1階に設置されたAVホールは、これまで施設の制約により困難であった舞台芸術などの教育・発表の場としても利用できるよう計画されている。さらには、研究プロジェクト室、コラボレーションルーム、ファカルティラウンジ、ユニヴァーサルユニットなど教員の共同研究や研究者間の交流を促進させる場を積極的に提供することで、研究・教育のいっそうの進展を企図している。なお、本施設の完成により、複数の教員が1室を共有して利用するという劣悪な個人研究室の状況が改善されることはいうまでもない。

(3) 特別高圧変電設備更新

概算要求の最優先で要求していた、基幹整備の一つである特別高圧変電設備(数理科学研究棟)の更新が認められた。駒場 I キャンパスは東京電力から2万ボルトで受電して、6千ボルトに変圧して各建物に送電している。従来の変圧器容量は $3,000kVA \times 2$ 台であった。これを、2万ボルトで受電できる最大容量である $5,000kVA \times 2$ 台 = 100,000kVA とした。この工事のために、土・日・休日を使って7回の半日停電と1回の1日停電が必要(各建物については1回)であったが、これによって、当分の間、受電容量不足による支障の心配は解消された。

(4) 銀行ATMの設置

三井住友銀行が東京大学法人のメインバンクになるに当たって設置することになった同銀行のATMのうちの一台が駒場に設置された。場所は、防犯上の見地および利便性から、正門入って左の車庫の一部を改修して用意した。当初の案では守衛室横からアドミニストレーション棟に至る歩行者用通路沿いの南側空き地が予定されていたが、キャンパスの景観を損なうおそれがあるので、既設建物内に設置することとした。配置の設計にあたっては、可能な限り奥まって配置することにより、景観の保護、雨天時の車椅子を含む待ち行列の雨宿りの空間を確保することに努めた。

(5) 外構環境整備

外部環境の整備に関しては以下の工事が行われた。

a) 旧制第一高等学校関連

旧制第一高等学校同窓会のご厚意により、1号館前の広場の一角に「ここに一高ありき」の碑、また、陸上競技場北東角に体育振興に貢献された外国人教師「ストレンジ先生」の碑が設置された。なお、これに関連して、駒場ファカルティハウス南庭に外国語教育に寄与された外国人教師であるフランスの「アリヴェ先生」とドイツの「プッチール先生」の碑が、同様の経緯で設置された。p.60以下を参照。

b) その他

昨年完成した、学際交流棟のアドミニストレーション棟と博物館棟との間の池に橋を設置した。この件は、昨年から一部の利用者から要望があったが、様子を見てから最終判断をすることとし、実施が延期されていた。学内利用者の要望が多いことから実施したものである。

さらに、1号館、101号館周辺にある共同溝の換気塔の塗装および換気ガラリの交換を行った。 この件は昨年度実施であるが、「駒場2003」に記載されていないのでここに記載する。

2. 駒場ファカルティ・ハウス



駒場ファカルティハウスは、「国立学校建物基準」では「研究者交流施設」という名称を持つ 建物である。こうした研究者交流のための施設の必要性はこれまでも指摘されてきたが、この 度ようやく実現に至った。当施設は、食堂棟と宿泊棟から構成され、平成16年4月末より営業を 開始した。



食堂棟は昭和12年に建設された旧制第一高等学校同窓会館の洋館を改修し、用途変更して利 用するものである。大学の教育研究を担い、支える教職員にとって望ましい、職場環境整備の 一環として、教育研究や事務の活性化につながる教職員食堂を構想した。1階はややカジュアル なレストランとし、2階については、より格調の高いファカルティクラブ(レストラン)とする こととした。



レストラン業者については募集による選定を行った。この間、教員による業者の紹介や教職 員アンケートが行われ、最終的に、京都大学や本郷キャンパスの周辺のフォレスト本郷に営業 実績のある「ルヴェ・ソン・ヴェール」を事業者として選定した。1階のレストラン名は選定業 者の希望もあり、「ルヴェ・ソン・ヴェール駒場」とした。2階のファカルティクラブは、第一 高等学校にゆかりのあるオリーブの和名である「橄欖」と名づけた。1階の「ルヴェ・ソン・ヴ ェール駒場」の営業時間は午前11時から午後9時まで、2階の「橄欖」の営業時間は午後0時から 2時半、6時から9時半である。当初は日曜・祭日休業であったが、利用者の要望もあり、10月か ら日曜・祭日の営業も行っている。



レストランの利用に関しては、アンケートの結果等から授業期間中の昼食需要は見込めたが、 夜間や夏期休暇に代表される授業期間外の利用に不安があった。しかしながら、日本経済新聞 等、複数の新聞、テレビ番組等で紹介されたこともあって、学外者の利用が約半数にのほり、 連日賑わっている。学生の利用者もある。特にウイークデイの昼食時は、行列ができ、職員が 昼休みの間に昼食がとれないという苦情が出るほどである。夜間についても1日平均50名程度の 利用があり、特に10月から12月は、パーティや懇親会の利用が数多い。セミナー室についても、 講演会や懇親会で数多く利用されている。



宿泊棟は、旧制第一高等学校同窓会館の和館部分を取り壊し、その位置に新築された。1階に は、宿泊受付事務のほか、セミナー室と和室に加えて、宿泊者用の食事室、洗濯室等が用意さ れている。また、セミナー室に隣接する3層吹き抜けのホールは可動間仕切りを開けることによ りセミナー室と一体で利用でき、中規模の懇親会等の利用が可能となっている。2階、3階には 駒場友の会事務室に加えて、12室のシングル宿泊室、2室のツイン宿泊室、計14室の宿泊室が設 けられている。宿泊利用の窓口は総務課研究交流係である。宿泊利用者は東京大学に研究のた めに滞在する外国の研究者とし、その利用申し込みは当該研究者の招へい教員が行う。朝食に ついては、事前予約により「ルヴェ・ソン・ヴェール」で提供可能である。



宿泊室の利用状況は月によって異なるが、概ね、9月までは5-6割、10月、11月は8割の利用 率であった。2ないし3室を緊急対応用にあけた形で運用しているので、実質的な利用率は、9月 まで6-7割であり、10月、11月は9割を超え、ほぼ満室状態であった。9月までの利用状況が低 いのは、季節変動要因に加えて、周知までの時間差が影響していると考えられる。したがって、 早めの予約が望ましい。

なお、当施設の南に面する庭には、旧制第一高等学校時代のお雇い外国人教師であるフラン スのアリヴェ先生とドイツのプッチール先生の胸像が設置されている。当該胸像は以前美術博 物館北の空地に設置されていたものであるが、損傷が激しく、松本にある旧制高等学校記念館 に預けられていた。今回、旧制第一高等学校同窓会の厚意により修復され、本建物の庭に設置

また、実施設計と並行して、埋蔵文化財調査が本学埋蔵文化財調査室により行われ、当敷地 が旧石器時代に遡る土地であることが確認された。その史的価値については、報告書を作成す るだけでなく、地層標本を展示する形で当施設に盛り込まれている。

876 フィルフレークッグフス・フックス(東国)

・ 駒場Iキャンパスには一高記念の碑がいくつかある。最も大きなものは、ファカルティハウ スの庭にある「玉杯の碑」である。そのほか、記念植樹の碑が1号館入り口の両脇と、駒場寮跡 近くにある。

平成16年度には、別項に報告されているように、一高同窓会から、一高記念基金のほか、胸像2体の修復とレリーフおよび石碑のご寄付を頂いた。

胸像はドイツ生まれのフリッツ・プッチール先生とフランス生まれのジャン・バプティスト・アルテュール・アリヴェ先生のブロンズ像である。再建にあたり専門家の手で傷の修復と表面処理が施され、台座は新たに造られた。2004年5月7日の駒場ファカルティハウスのオープン式典に先立ち、4月29日に、一高同窓会の皆様をお招きして、駒場ファカルティハウスの庭に設置した2胸像の除幕式と、一高ゆかりの木であるオリーブ(和名橄欖)の記念植樹を行った。一方、レリーフは英国生まれのフレデリック・ウィリアム・ストレンジ先生のものである。また、石碑は「一高ここにありき」の碑で、ともに新しく製作され、11月1日に行われた一高同窓会の「第一高等學校開学130年記念大会」に先立つ10月29日に一高同窓会の皆様をお招きして除幕式を行った。

プッチール先生とアリヴェ先生の胸像

両先生の胸像は一高が本郷弥生にあった時代に建立され、昭和10年(1935年)のキャンパス交換の際に駒場の地に移され、図書館(現駒場博物館)脇の木陰に置かれていた。昭和40年代の紛争の時に際に傷つけられたらしく、駒場図書館の倉庫に移されて、人々の記憶から消えていた。それを再発見したのはボン大学日本研究所長ペーター・パンツァー教授である。同教授は、ボンでたまたまプッチール先生のお孫さんに会い、同先生がかつて一高で長年教鞭を執っていたこと、死後、フランス人のアリヴェ先生とともに胸像が造られたが、行方不明になっていることを知り、同氏自身が日本に見えて探した結果、駒場の図書館の倉庫で発見された。その後、平成5年に松本市の旧制高等学校記念館が開設するにあたり、他の一高関連資料とともに、再建の日が来るまでの予定で同館に寄託された。このたび、旧一高同窓会館を改築・改修して駒場ファカルティ・ハウスが完成するのを機に、記念館から引き取られた。除幕式には、奥田氏のご尽力で、パンツァー博士をご招待し、胸像再発見のいきさつなどのお話を頂いた。

一高同窓会の奥田教久氏によれば、両先生の経歴の概要は以下の通りである。

プッチール先生は明治17年(1884年)、東京大学予備門の教官となり、以来16年余にわたり、一高でドイツ語、ラテン語、西洋史を教えた。一高の「校友会雑誌」には「容貌魁梧(魁偉に同じ)、雄弁流るるが如く、真に英雄の威風を存し給ひき。講ずるや慇懃、説くや諄々、常に日本を以て第二の故郷となし給ひぬ。先生は自ら日本的外人と称し、最もよく神州の尊むべき所以を知り給ひぬ」とある。明治34年5月、東京で死去。墓は今も青山墓地にある。

一方、アリヴェ先生は、明治10年(1877年)来日し、東京英語学校、司法省法学校を経て一高の教官となり、フランス語、ラテン語、哲学、西洋史を講ずること実に25年、「校友会雑誌」には「諄々として倦まず、孜々としてあせらず、苟も我が校にありて仏語を学べるもの先生に依らざるものなし。本邦仏語学界に貢献する所、寔に大なり」と讃えている。プッチール先生に遅れること1年、明治35年5月に死去、同じく青山墓地に葬られ、今もそこに眠っておられる。台座に刻まれた銘文は以下の通りである。

Friedrich Putzier (1851-1901)

Born in Germany, Friedrich Putzier came to Japan in 1884 and served at the First Higher School (Ichiko) for more than 16 years as a lecturer in German, Latin and World History until he died in Tokyo in 1901. He used to say that Japan was his adopted homeland.

Jean - Baptiste Arthur Arrivet (1846-1902)

Born in France, Jean-Baptiste Arthur Arrivet came to Japan in 1877 to teach French, Latin, Philosophy and World History at the First Higher School (Ichiko). For 25 years, he contributed to French language education in Japan.

ストレンジ先生のレリーフ

ストレンジ先生は、英国出身の外国人教師で、第一高等学校の前身である東京英語学校、東京大学予備門、第一高等中学校で英語、時に数学を教えた。同先生は、わが国に近代スポーツを始めて紹介、指導した日本の近代スポーツの父として、知る人ぞ知る方である。ストレンジ先生の建議と指導のもとに、明治16年に東京大学予備門合同の陸上運動会を開催された。それは後に本郷の御殿下グラウンドで開かれていたが、昭和61年からは、駒場の第1グラウンドで開かれている。レリーフは、残された横顔の写真を元に今回専門家によって作られ、第1グラウンド入り口に建てられた。銘文は以下の通りである。

Frederick William Strange (1854-89)

英国 Devonshire 州に生まれた Eton 校 Oxford 大学を卒業1875(明治8)年来日し 東京英語学校 東京大学予備門 第一高等中学校の各教諭として英語を教える傍ら ボートフットボールベースボール 各種陸上競技など欧米のあらゆる近代スポーツの紹介と奨励に努めた1883年 先生が著した小冊子 "Outdoor Games" はわが国の近代スポーツ解説書の原典となった

先生自身 万能のスポーツマンで とくに先生の建議と指導のもとに創始された帝国大学の陸上運動会ならびに水上運動会(ボートレース)はわが国の最も権威ある学生運動会となった 一高開学130周年を迎えるにあたり「日本の近代スポーツの父」と称される先生の遺徳を偲び偉業を後世に伝えたい

2004(平成16)年11月1日

一高同窓会





「一高ここにありき」の碑

駒場 I キャンパスに「一高ここにありき」の碑を建立することも、一高同窓会のたってのご 希望であり、教養学部で検討した結果、正門を入って左の小広場に置くことになった。除幕式 は、多くの一高同窓会関係者においでいたただき、ストレンジ先生のレリーフの除幕に引き続 いて行われた。当日は駒場博物館で開催予定の「一高130年記念駒場の歴史展」の内覧会も行われた。碑文は以下の通りである。

第一高等学校は明治7年(1874)東京英語学校として開学 東京大学予備門 第一高等中学校を経て 明治27年(1894)本郷向ヶ岡 即ち向陵の地にて第一高等学校と称す 昭和10年(1935)この地駒場に移り 昭和25年(1950)学制改革により旧制高校としての終焉を迎えその後は東京大学教養学部に引き継がれる

この間 全国より選ばれた俊秀 若き日の3年をここに学び 高き志を養う また多感な 友らと皆寄宿制自治寮の生活を共にしつつ切磋琢磨して 教養を深め 人は如何に生くべきかを真摯に探る 卒業生はいずれもこれを誇りとし 生涯 この地を智恵と正義と友情 に満ちた魂の故郷と懐う

一高の校章は柏葉と橄欖(オリーブ)を組み合わせ ギリシャ・ローマ神話に基づき 橄欖は文を柏は武を象徴したものである さらに柏葉と橄欖の中央に「國」の字を配して校旗とし「護國旗」と称した これらはわが一高の精神的伝統を象徴するものである

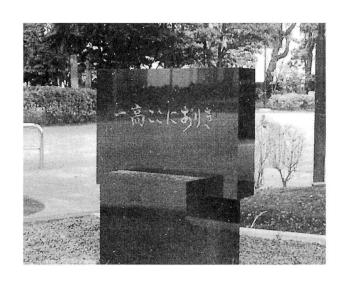
かくて一高は開学以来 良き伝統のもと二万余の有為の人材 ここに己を培い 広く各界に於いて活躍し わが国の進運に大きく寄与した

平成16年(2004) 開学130周年に当たり かつ一高同窓会が本格的活動を終えんとするに際し ここに貞石を留め 以って記念とする

縁あってこの地に学ぶ若人 縁あってこの碑を読む旅人 願わくはこの碑に込められた 向陵精神を汲み 真摯な歩みに恵まれんことを

平成16年(2004)11月1日

一高同窓会理事長 三重野 康撰 碑銘 園部達郎 書





男女共同参画支援施設が2004年5月に完成し、現在、東大駒場地区保育所の園舎として使用されている。「東京大学男女共同参画基本計画」は、その基本方策の中で、育児等の環境整備の一つとして「学内に保育および子育て支援施設を整備する」としている。この男女共同参画支援施設は駒場キャンパスにおける「基本計画」の具体化であり、施設の名称もこれに由来している。

東大駒場地区保育所は駒場キャンパス内の保育所として、1971年以来30年余の歴史を持ち、認可外保育所として、駒場の教職員や学生だけでなく、地域住民の子育て支援を行ってきた。しかし、裏門脇にあった園舎の老朽化がすすみ、地震による倒壊の危険も指摘されていた。利用者からの耐震補強の要望と男女共同参画ワーキンググループの提言が出されたのを機に保育所の改築が学部の建築計画に組み込まれ、本施設が建設された。施設の新しい建物は、キャンパスの東北の端、教職員コート南側に位置し、写真のような木造平屋で、定員30名規模の保育所の基準を満たす広さと構造を備えている。

保育所の設置者であり、かつ運営全般の責任を負う組織として、NPO法人「東大駒場保育の会」が2003年4月に設立された。また2004年9月から保育所は東京都の認証保育所となった。(注:都は、認可外保育所のうち、面積や設備などにおいて都の示す条件を満たす施設を認証保育所と認定し、補助金額を規定の水準まで増額する政策をとっている。認証保育所は、規模の小さいB型と、規模が大きく、かつ補助金も多いA型の二つがあるが、東大駒場地区保育所はA型として認定された。)利用の機会は、本学教職員・学生のみならず地域住民にも等しく開かれている。このことは地域に開かれた大学としての役割を果たすことに加え、「男女共同参画社会形成への寄与」(「東京大学男女共同参画基本計画」)という意義もある。このような観点に鑑み、現在、大学は法人に施設の無償使用を認めている。保育所が地域に開かれていることのもう一つの利点は自治体の認証を受けて運営費補助が受けられることである。東京都および目黒区からの補助金は現在保育所運営経費の約50%を占め、運営の財政的な安定化に大きく寄与している。こうして駒場キャンパスの保育所は新しい一歩を踏み出すことになったが、利用申込の急増という予想外の事態に直面することになった。在籍園児は2005年初頭で38名、空き待ち(待機)が20名に達している。また2005年初頭の時点で4月からの利用の申込が21名に達しており、その多くを受け入れられない恐れがあるという悩みを抱えている。

上述のように東大駒場地区保育所は学内の組織ではないが、以下にその園児定員、職員数、 提供しているサービスなどをまとめておく。

園児定員は30名で、その標準内訳は、0歳児3名、1歳児6名、2歳児6名、3歳児5名、4-5歳児10名である。これに対応する職員の標準配置は、施設長1名、保育者7名、調理士1名およびパート4名である。30名をこえる園児を受け入れる場合は、特別に園児増員の申請を行い、保育者を増員して対応する。また、園児の年齢分布が変わるとそれに伴って、最低限必要な保育者の数も変化する

提供しているサービスは、運営費補助の対象となる基本事業と対象外の自主事業に区分される。基本事業には通常保育、土曜保育、時間外保育等のサービスがあり、自主事業には曜日契約保育、緊急応需保育、一時保育、放課後育成支援等がある。

保育所の詳細はウェブページ(http://www4.ocn.ne.jp/ $^\sim$ komabaho/)および利用のしおり(上記のウェブページからダウンロード可能)で見ることができる。







5. 駒場キャンパスマスタープラン

「駒場地区駒場Iキャンパス整備計画概要」改正について

1. はじめに

東京大学では、本郷地区キャンパス、柏地区キャンパス、駒場地区キャンパスをその基幹をなす3極として位置づけ(「東京大学キャンパス計画の概要」平成4年評議会承認)、各地区のキャンパスの整備に努めてきた。

各地区キャンパスの将来計画は、上記の「東京大学キャンパス計画の概要」の趣旨に則り、 その基本計画を定める「再開発・利用計画要綱」とこの要綱に基づいて基本計画を実行に移す ための具体的な建物の配置計画を定める「整備計画概要」の2段構えの構成をとっている。

駒場地区キャンパスの「整備計画概要」に関しては、総合文化研究科・教養学部、数理科学研究科の位置する地区を「駒場地区駒場 I キャンパス」、生産技術研究所や先端科学技術研究センター等のある地区を「駒場地区駒場 II キャンパス」と呼び、それぞれの独自性を尊重して別々に「整備計画概要」を策定することにしている。

駒場地区駒場 I キャンパスに関しては、平成5年に「駒場地区キャンパス再開発・整備計画要綱」(以下「要綱」と略記)が策定され、平成11年に、「駒場地区駒場 I キャンパス第1次整備計画概要」(以下「第1次整備計画概要」と略記)が策定された。

なお、「整備計画概要」は「要綱」に基づき、概ね5年ごとに見直すこととなっている。さらに、「第1次整備計画概要」策定後に提示された文部科学省の「緊急整備5ヵ年計画」との整合性の確保や国立大学法人化という組織変更、これに伴う「中期計画」との整合性など、全学的に「整備計画概要」の改訂の緊急性が顕在化した。そこで、駒場 I キャンパスについても、その改正である「駒場地区駒場 I キャンパス第2次整備計画概要」(以下「第2次整備計画概要」と略記)策定が求められた。この「第2次整備計画概要」は、その将来計画を全学の意志として位置づけるだけでなく、文部科学省への施設整備補助金要求の説明資料としても使用される重要なものであり、その策定が急がれた次第である。

これを受けて、「キャンパス計画委員会」の下に組織された「駒場地区部会」は、「駒場地区キャンパス整備計画概要策定WG」を設け、その原案作成を依頼した。このWGの主査は浅島地区部会長(総合文化研究科長)、副査は総合文化研究科の加藤教授(キャンパス計画室)が勤めた。他の委員として、生産技術研究所から曲渕助教授(キャンパス計画室)と中埜助教授、総合文化研究科から兵頭評議員(総合文化研究科・教養学部建設委員長)と高橋教授(地区部会委員)、生端科学技術研究センターから大西教授(地区部会委員)、事務局から施設部計画課長等が参加した。このWGにおける原案作成は、改正の基本方針を全体で検討し、その後、駒場 I キャンパス、駒場 II キャンパスに分かれてそれぞれの案を検討し、さらに全体で調整するという方法で進められた。

駒場 I キャンパスにおける原案作成にあたっては、5年前に策定された「第1次整備計画概要」を下敷きにWGで必要な修正を行うだけでなく、建設委員会にも諮り、総務委員会で途中経過を報告するなど、可能な限り当キャンパスの構成員の意向を尊重するよう行われたことはいうまでもない。

なお、この原案は、平成16年12月に「キャンパス計画委員会・駒場地区部会」で中間報告され、同12月の教授会にも諮って承認された。平成17年2月の「駒場地区部会」で承認され、全学の方針となる。

2. 「第2次整備計画概要」の要点

「整備計画概要」は「建物整備計画」と「建物以外の整備計画」から構成される。

a) 建物整備計画(付図「段階別施設配置図」参照)

5年前の「第1次整備計画」は、改築・取り壊しを主たる手段とするスクラップアンドビルド 方式を前提として策定された。ところが、その策定後、文部科学省が提示した「緊急整備5ヵ年 計画」では、既存施設の有効利用の視点から、改修を中心とする整備手法への変更が求められた。これに伴い、駒場 I キャンパスでは、すでに3号館改修や旧図書館改修、旧制第一高等学校同窓会館改修など、「第1次整備計画」とは異なる形で整備が続けられてきた。また、5号館、8号館、9号館についても改修を前提に整備計画が立てられている。その背景には、教室棟に代表される学生が利用する建物の整備状況が遅れており、その対応が急がれるという事情があった。さらには、平成18年のカリキュラム改正に向けて、教室整備の緊急性がある。もちろん、これらの計画変更は、その都度、建設委員会や駒場地区部会に諮り、承認を得て進めてきたものである。しかし、「第1次整備計画」とは、必ずしも整合するものではない。そこで、本概要改正では、上記の進行状況を組み込んで、「既存建物の有効利用の視点から改築が望まれる建物についても改修を先行させる」こととした。なお、改修の質と量の確保の視点から、「質の高い改修」の必要性と「必要に応じた一部増築」を明文化している。

第2のポイントは、平成11年当時にはなかった新しい構想を整備計画に組み込むことである。 第2段階に予定されている「複雑系生命科学研究センター」や「ヒューマン・ダイナミクス・システム研究センター」等がこれに相当する。

第3は、現図書館の将来構想の見直しである。「第1次整備計画概要」では、図書館は第一段階に予定された14,000m²に加えて、第2段階の「国際地域交流メディアセンター」6,000m²を会わせて一体で構想されていた。その後、第1段階の14,000m²のうち8,500m²(設備スペースを含む)が建設され、現在に至っている。一方で、「駒場ファカルティ・ハウス」の完成や「情報教育棟」増築の完成等により、田「国際地域交流メディアセンター」と重複する機能の整理の必要性もあって中身の再検討が求められた。また、本年より駒場図書館における部局図書館を除く部分の運営が全学支援の対象となったこともあり、新構想の駒場図書館として2段階に分けて整備を進めることとした。

また、キャンパス環境の改善の視点から、付図には、第2グランド、テニスコートやキャンパス東端の池周辺の整備など、建物以外の空地整備も取り込んである。

最後に、誤解をさけるため、段階別施設配置について若干の説明を加える。第1段階の計画は、現状において直ちに実施可能なものであり、第2段階、第3段階の計画はそれぞれ前段階の建築の進行に伴い、実施が可能になるものである。したがって、第2段階、第3段階に配置された計画も、前段階の計画がすべて実現しなければ実施できないというものではなく、その中には前段階の計画の一部が進行・実現すれば実施可能となり、段階が繰り上がっていくものも含まれている。

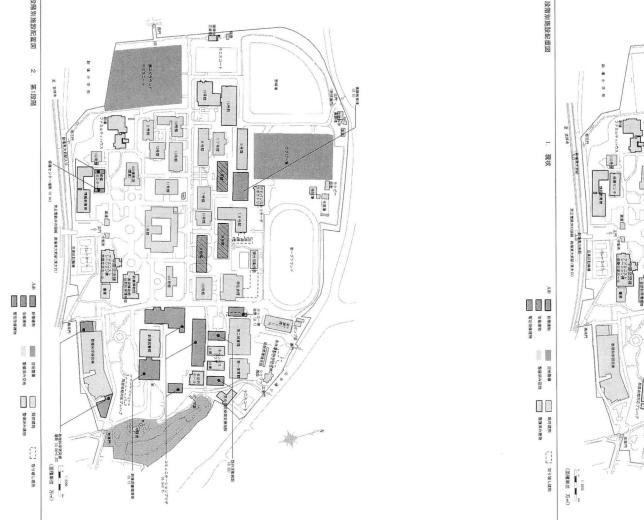
なお、5号館の改修については平成16年度補正予算で認められた。平成16年度中に着手し、平成17年度末までに完了する。

b) 建物以外の整備計画

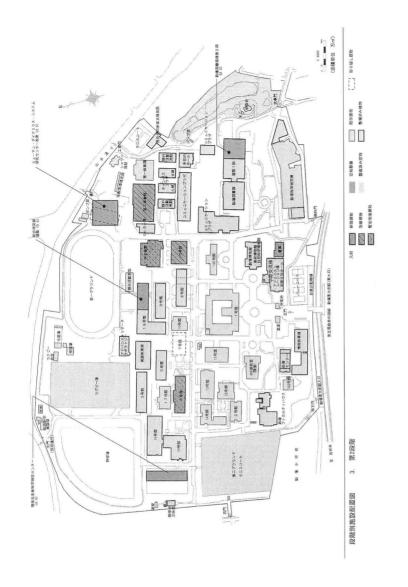
今回の新しい視点は、近隣環境への配慮を明文化したことである。これまでの計画はどちらかといえば、学内需要を優先化させた結果、周辺への配慮に欠けた嫌いがある。その結果、本郷地区弥生キャンパスや駒場 II キャンパスでは、近隣住民と摩擦を起こしてきた。これを踏まえ、今回の改正では、近隣住民との共生を積極的に考慮することとした。駒場 I キャンパスでは、炊事門雨水流出対策やラグビー場、第2グランドの砂塵防止対策を挙げている。また、環境委員会での議論を踏まえて改築・改修時における「廃棄物置き場の整備」を明文化するほか、道路・広場におけるユニヴァーサルデザイン(バリアフリー)などを付加している。

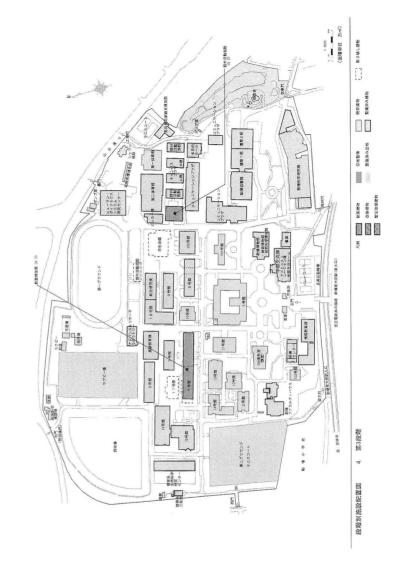
3. おわりに

以上の計画は、いま直ちに実現できるというものではない。その実現にあたっては、「整備計画概要」に基づいて施設整備補助金の要求を行い、予算を獲得するというプロセスが控えている。 更に、建物以外の整備計画の項目としてあげた道路・広場の計画やエネルギー対策などについては、その具体的方法について今後とも検討を重ねていく必要がある問題も多い。駒場 I キャンパスのマスタープラン策定は現在進行形である。



WEEK STATE 101-52





付属資料1

2004(平成16)年度授業日程表

4月9日(金)~7月20日(火)

第1・3学期授業

7月21日(水)~7月31日(土)

第1・3学期試験前半

8月1日(日)~8月31日(火)

夏季休業

9月1日(水)~9月3日(金)

第1・3学期試験後半

9月4日(土)~10月3日(日)

秋季休業

10月4日(月)~12月24日(金)

第2・4学期授業前半

12月25日(土)~平成17年1月10日(月) 冬季休業

1月11日(火)~1月31日(月)

第2·4学期授業後半

2月1日(火)~2月14日(月)

第2・4学期試験

教養学部の授業時間

1時限 9時00分~10時30分

2時限 10時40分~12時10分

3時限 13時00分~14時30分

4時限 14時40分~16時10分

5時限 16時20分~17時50分

2004(平成16)年度志願·合格·入学状況

教養学部前期課程

エリ **5	試験日程	志願者	受験者	合格者	入学者	定員外	ሉ	入学者総数
科類						特選第1種	国費	
文科一類	前期	1,277	1,113	378	378	1	3	382
	後期	1,079	199	43	43			
二類	前期	1,105	982	332	331	3	3(1)	337
	後期	536	178	38	38			
三類	前期	1,734	1,309	439	438	2	9	449
	後期	1,107	252	53	51			
理科一類	前期	2,738	2,565	1,043	1,038	6	14(7)	1,058
	後期	1,968	551	124	119			
二類	前期	1,953	1,711	505	497	3	0	500
	後期	610	255	62	59			
三類	前期	489	315	80	80	0	0	80
	後期	155	49	10	10			
計	前期	9,296	7,995	2,777	2,762	15	29(8)	2,806
	後期	5,455	1,484	330	320			

定員外・国費欄の()内は外国政府派遣・日韓共同理工系学部留学生を内数で示す。

教養学部後期課程

学 科	平成16年度進学者	学士入学者等
超域文化科学科	. 28	
地域文化研究学科	40	1
総合社会科学科	37	
基礎科学科	41	2
広域科学科	18	
生命・認知科学科	20	
計	184	3

大学院総合文化研究科

± +		修士課種	±		博士後期課程			
専 攻	志願者	合格者	入学者		合格者	入学者		
言語情報科学	77	27	26	60	24	23		
超域文化科学	163	40	39	62	30	29		
地域文化研究	99	40	40	61	36	34		
国際社会科学	199	. 40	36	51	26	26		
広域科学	261	122	111	81	73	72		
(生命環境科学系)	(104)	(48)	(47)	(29)	(28)	(27)		
(広域システム科学系)	(62)	(33)	(28)	(21)	(16)	(16)		
(相関基礎科学系)	(95)	(41)	(36)	(31)	(29)	(29)		
計	799	269	252	315	189	184		

2005(平成17)年度進学内定者数

2004年10月4日

学	部学科	定数		内		定				数										
	HP 7 11	~C xx	文一	文二	文三	理一	理二	理三	小 計	合 計	Α	В	С	D	計					
			609 (9)	4	3	3	4		623(9)											
法		605	3						3(0)	626 (9)	5		4		9					
			-			1	10	93	104(0)											
	医 学	100							0 (0)	104(0)					0					
医 -									0(0)											
	健康科学			2	2	3	15		22(0)											
	・看護学	40	1		2	2	7		12(0)	38(0)					0					
	——————————————————————————————————————			1	1		2		4(0)		_									
				2	5	591 (28)	48		646(28)											
I		945			1	259			260(0)	907〈28〉	907〈28〉	12	4	7	5	28				
						1			1 (0)											
			4	8	237〈3〉	4	2		255(3)											
文		416		5	74	6	5		90(0)	349(3)	2		1		3					
					4				4(0)											
						142(5)	54(1)	>	196(6)											
理		287				63	32		95(0)	292(6)	4		2		6					
						1			1 (0)											
			1	1	8	18	161 (3)	\rangle	189(3)											
農		290		1	4	6	92		103(0)	297〈3〉	297 (3)	297〈3〉	2		1		3			
							5		5(0)											
			2	317(9)	5	4	4		332(9)											
経	済	365		7					7(0)	$340\langle 9\rangle$	3	1	5		9					
				1					1(0)											
	_		7	15	42 (4)	33	18		115(4)											
教	養	183	7	13	28	13	19		80 (0)	195 (4)	4				4					
									0(0)											
				2	59	6	2		69(0)											
教	育	97		2	32	4	3		41 (0)	$110\langle 0 \rangle$					0					
									$0\langle 0\rangle$											
						14	42 (1)	>	56(1)											
薬		80				6	31		37(0)	93(1)	1				1					
									$_{0\langle 0\rangle}$)											
			623 (9)	351(9)	361 (7)	819(33)	360 (5)	93(0)	2,607(63)											
	計	3,408	11(0)	$28\langle 0 \rangle$	141(0)	359(0)	189(0	0 (0)	728(0)	3,351 (63)	33	5	20	5	63					
			$0\langle 0\rangle$	$2\langle 0 \rangle$	5(0)	2(0)	7(0	0 (0)	16(0)											
総	計	3,408	634(9)	381 (9)	507(7)	1,180 (33)	556(5)	93(0)	3,351 (63)	3,351 (63)	33	5	20	5	63					
		<u> </u>																		

備考 1. 〈 〉は外国人留学生(定数外)で外数

^{2.} 上段:第一段階 中段:第二段階 下段:再志望

^{3.} A:日本政府(文部科学省)奨学金留学生 B:外国政府派遣留学生 C:外国学校卒業学生特別選考第1種 D:日韓共同理工系学部 留学生

定員の推移 1999(平成11)年度~2004(平成16)年度

教養学部前期課程入学定員

	年 度	平成11 1999	平成12 2000	平成13 2001					平成16 2004
	文科一類	605	605	605	605	605	415		
科	文科二類	365	365	365	365	365	365		
	文科三類	500	495	495	485	485	485		
	理科一類	1,23	1,147	1,147	1,147	1,147	1,147		
類	理科二類	55	57 551	551	551	551	551		
	理科三類	9	90	90	90	90	90		
	計	1,470 1,88	3 1,465 1,788	1,465 1,788	1,455 1,788	1,455 1,788	1,265 1,788		
		3,353	3,253	3,253	3,243	3,243	3,053		

教養学部後期課程受入定員

年 度	平成11 1999	平成12 2000	平成13 2001	平成14 2002	平成15 2003	平成16 2004
超域文化科学科	20	20	20	20	20	20
対 地域文化研究学科	35	35	35	35	35	35
総合社会科学科	15	10	10	10	10	10
基礎科学科	45	40	40	40	40	40
斗 広域科学科	25	20	20	20	20	20
生命・認知科学科	20	15	15	15	15	15
計	160	140	140	140	140	140

大学院総合文化研究科入学定員

	年度	平点 19	•	平成 20		平成 20		平成 20	•	平成 20	•	平成 20	
	課程	修士	博士										
	言語情報科学	30	24	30	24	30	24	30	24	33	26	37	27
専	超域文化科学	41	29	41	29	41	29	41	29	41	29	41	29
-	地域文化研究	43	27	43	27	43	27	43	27	43	27	47	28
	国際社会科学	34	23	34	23	34	23	34	23	34	23	38	24
攻	広域科学* (生命環境科学系) (広域システム科学系) (相関基礎科学系)	100 (38) (25) (37)	61 (23) (15) (23)	100 (38) (25) (37)	61 (23) (15) (23)	100 (38) (25) (37)	61 (23) (15) (23)	102 (38) (27) (37)	62 (23) (16) (23)	102 (38) (27) (37)	62 (23) (16) (23)	106 (38) (31) (37)	63 (23) (17) (23)
	計	248	164	248	164	248	164	250	165	253	167	269	171
		41	2	41:	2	41	2	4	15	4	20	4	i40

*印 広域科学専攻は3系からなり、各系の入学定員は目安である。

2004(平成16)年度クラス編成表 (1年)

(2004年5月1日現在)

	文	科一類			高†
	入学	留年	入学	留年	_
1 A	2		1		3
3 E			2		2
4 F	23		27		50
5 F	22		28		50
6 F	22	_	27		49
7 F	22		27		49
8 F	22		27		49
9 F	11		14		25
10 G	5		6		11
_11 H	24	1	22		47
12H	24		21		45
13H	12		11		23
14	10		17		27
15 B	33		23	1	57
16B	33	1	22		56
17B	33		22		55
18 D	26		16		42
19D	26		15		41
20 D	26		15		41
21 D	24		17		41
22 D	25		16		41

(合計804)

	Ž	て科三類	計	
	 入学	留年		
1 A	5		5	
2 C	5		5	
3 E	2		2	
4 F	36		36	
5 F	36		36	
6 F	36	1	37	
7 G	13		13	
8 H	49		49	
9 H	25	1	26	
10 1	17	1	18	
11 B	59		59	
12B	59		59	
13 D	46		46	
14 D	45		45	
15 D	45	1	46	
16 D	22		22	

(合計504)

A: ドイツ語既修クラス B: ドイツ語初修クラス C: フランス語既修クラス D: フランス語初修クラス E: 中国語既修クラス F:中国語初修クラス G:ロシア語初修クラス H:スペイン語初修クラス I:韓国朝鮮語初修クラス

₩ =1 =

総計3,183名

			計
	入学	留年	
1 A		1	1
2 C	2		2
3 E	•3		3
4 F	51		51
5 F	51		51
6 F	51	1	52
7 F	51		51
8 F	51	1	52
9 F	50	4	54
10 G	11		11
11 H	51		51
12H	50	1	51
13H	25	2	27
14	42		42
15 B	44		44
16 B	44	1	45
17B	44	2	46
18 B	44	4	48
19B	44	1	45
20 B	44		44
21 B	44		44
22 B	44	1	45
23 B	43		43
24 B	43	1	44
25 B	43		43
26 D	42	2	44
27 D	42		42
28 D	41	4	45
29 D	41	1	42
30 D	41	1	42
			(A =1)

(合計1,205)

	玛	科二類	玛	科三類	計
	入学	留年	 入学	留年	
1 A	1				1
2 C	1		1		2
3 E	2				2
4 F	47	6	5		58
5 F	46	1	6		53
6 G	47		5		52
7 G	8		1		9
8 H	45		3		48
9 H	23		2		25
10	18	1			19
11 B	38		6		44
12B	36	3	7		46
13B	35	2	7		44
14 B	36	4	7		47
15 B	34		7		41
16 B	36	1	7		44
17 D	18		3		21
18 D	35		9		44
19 D	35	1	9		45
20 D	17	3	5		25

(合計670)

2004(平成16)年度クラス編成表 (2年)

(2004年5月1日現在)

		文科一類		科二類	計
	進級	留年	進級	留年	
1 A	1				1
2 C	5	1	1		7
3 E			1		1
4 F	32	2	23	5	62
5 F	32	1	23	3	59
6 F	32	3	23	3	61
7 F	32	3	23	1	59
8 F	32	2	23		57
9 F	31		23		54
10 G	9	2	5		16
11 H	29	3	19		51
12H	30	1	19	1	51
13H	29	3	20	2	54
14	16	3	12	3	34
15B	29	3	17	1	50
16B	29	7	17	2	55
17B	30	3	17		50
18B	31	5	16	2	54
19 D	32	2	16		50
20 D	31	1	17	2	51
21 D	32	1	15	1	49
22 D	32	3	15	2	52
23 D	32	3	15		50
24 D	32	3	15	6	56

(合計1,084)

		て科三類	_ 計	
	進級	留年		
1 A	3		3	
2 C	5	1	6	
3 E	1		1	
4 F	51	9	60	
5 F	51	3	54	
6 F	25	3	28	
7 G	14	2	16	
8 H	45	7	52	
9 H	23	5	28	
10	11	3	14	
11 B	39	9	48	
12B	39	4	43	
13B	19	4	23	
14 D	42	9	51	
15 D	41	4	45	
16 D	42	4	46	
17 D	40	2	42	

(合計560)

A: ドイツ語既修クラス B: ドイツ語初修クラス C: フランス語既修クラス D: フランス語初修クラス E: 中国語既修クラス

F:中国語初修クラス G:ロシア語初修クラス H:スペイン語初修クラス I:韓国朝鮮語初修クラス

総計3,722名

		理科一類	計
	進級	留年	
1 A	2	_1	3
2 C	3_	1	4
3 E	2_		2
4 F	49	12_	61
5 F	49	7	56
6 F	49	12	61
7 F	48	14	62
8 F	46	11	57
9 F	44		44
10 G	21	4	25
11 H	45	11	56
12H	43	4	47
13H	18	5	23
14	28	3	31
15 B	52	6	58
16 B	52_	13	65
17 B	50	6	56
18 B	49	5	54
19B	52	9	61
20 B	52	8	60
21 B	51	13	64
22 B	48	6	54
23 B	50	5	55
24 B	50	5	55
25 D	43	3	46
26 D	41	6	47
27 D	41	8	49
28 D	40	13	53
29 D	42	7	49

(合計1,358)

	理	科二類	廷	2科三類	計
	進級	留年	進級	留年	_
1 A			1		1
2 C	2		1		3
3 E	1			-	1
4 F	46	10	3		59
5 F	48	5	3	1	57
6 F	25		1		26
7 G	7	1			8
8 H	44	3	8		55
9 H	21	3	4		28
10	11	2	1		14
11 B	42	7	8		57
12B	42	10	7		59
13B	42	5	7		54
14 B	42	6	7	1	56
15 B	44	6	7		57
16B	42	9	7		58
17 D	30	4	11	1	46
18 D	33	3	10		46
19 D	17	10	5	3	35

(合計720)

研究生

総合文化研究科大学院研究生, 外国人研究生数

(2004年11月1日現在)

専 攻	大学院研究生	外国人研究生	āt
言語情報科学	2	12	14
超域文化科学	3	16	19
地域文化研究	4	11	15
国際社会科学	6	10	16
広域科学	8	9	17
ät	23	58	81

大学院研究生の出願資格は、総合文化研究科修士課程修了、博士後期課程修 了、同課程満期退学又は同程度の学力を有する者。 外国人研究生の出願資格は、外国籍を有し、大学を卒業又は外国において、 学校教育における16年の課程を修了した者。

教養学部研究生数

(2004年11月1日現在)

後期課程 9 (このうち外国人3)

研究生の出願資格は、4年制大学卒業又は同程度の学力を有する者。 (前期課程には、学部研究生制度がない。)

留学生

(2004年11月1日現在)

国 名	学部 学生	大学院	完学生	学部 研究生	短期 交換	大学院 外国人	大学院 研究生	計
	- -	———— 修士	博士		留学生	研究生	P/1701	п
バングラデシュ	1					7777		
スリランカ			1			-		
ミャンマー			1					
タイ	6					1		
マレーシア	1	1		_	2			
シンガポール	(1) 6	1			1			(1)
インドネシア	4				2	1		
フィリピン	2			-	1		-	
中国 (香港)		1	1					
韓国	(1) 21	22	42		3	14	1	(1)10
モンゴル	(1) 10							(1) 1
ベトナム	15		,	1	1			1
中国	(2) 38	13	25	2	4	9		(2) 9
カンボジア	1							<u> </u>
マカオ	1					······································		
		5	11			3		l
トルコ	1		1			1		
エジプト		1	2			<u> </u>		
オーストラリア	2		1			2		-
ニュージーランド		1	 1		2	1		
カナダ			<u>·</u> 1		<u>-</u>	3		
アメリカ合衆国	1		1		3	5		1
メキシコ			1					
ブラジル			1			1		
パラグアイ	1							
アルゼンチン						2		
チリ		1			1	_		
コロンピア						1		
イギリス		1	2			2		
オランダ			1					
ドイツ		1		-	1	1		
フランス			1		3	•		
スペイン			<u>.</u> 1			1		
イタリア			1	-				
オーストリア								
スイス					1			
ポーランド						1		
ハンガリー	3		1			1		
セルビア・モンテネグロ			1			1		
ルーマニア	(2) 6	1	•			1		(2)
ブルガリア	2		2			 1		(2)
ロシア	2	2	3			2		
エストニア						1		 .
ウクライナ			1					
カザフスタン	2							
スロベニア		1						
キルギス	(1) 1	•						(1)
計	(8) 127	52	104	3	25	58	3	(8) 37

[※]学部学生数の()付数字は後期課程学生を内数で示す。

[※]国・地域名は東京大学概要の表記方法に従った。

付属資料2

題目/使用言語	会場/期日	主なパネリスト・参加者	主催者	その他
国際シンポジウム 「ジェノサイド研究の最前線」	駒場キャンパス 学際交流ホール 2004.3.27	石田勇治(東大) 井関正久(東大) 吉村貴之(日本学術振興会) Tessa Hofmann(ベルリン大) 福永美和子(東大) 清水明子(東京外国語大) また(東京の大) 林博史(関東学院大) 黒木英充(東京外国語大) 井上茂子(上智大) 川喜田敦子(東大) 木畑洋一(東大)	学振興プロジェクト」領域 II「平 和構築に向けた知の再編」「ジ	共催:ドイツ・ヨーロッパ研究室(DESK)
シンポジウム「私はどのようにして専門分野を決めたか」	駒場キャンパス 学際交流ホール 2004.4.23	森田朗教授(法学部) 清水孝雄教授(医学部) 笠木伸英教授(工学部) 辺 裕教授(文学部) 村尾美緒助教授(理 学部) 井上真助教授(農学部) 松井 彰彦教授(経済学部) 金子邦彦教授 (教養学部) 土方苑子教授(教養学 部) 福山透(薬学部)	教養学部進学情報センター	
21世紀COEと教養教育:教養 学部3COE合同新入生歓迎シンポジウム 「人間とは何か? どう作られ ているのか?―細胞・類人猿・ 自我―」		浅島誠(東京大学,融合科学創成ステーションCOE)長谷川寿一(東京大学,心とことば:進化認知科学的展開COE)門脇俊介(東京大学,共生のための国際交流センターCOE)司会:小林康夫(東京大学,共生のための国際交流センターCOE)	UTCP	共生のための国際哲学交流センターCOE、心とことば:進化認知科学的展開COE、融合科学創成ステーションCOEと共催
環境と開発 - 今、何が問われているのか -	駒場キャンパス 学際交流ホール 2004.6.7	木村秀雄(社会人類学) 丸山真人(環境人類学) 幸田シャーミン(環境ジャーナリスト) 奥村浩延(元ニカラグア派遣青年海外協力隊員) 永田淳輔(政治生態学)		
第6回言語情報科学シンポジウム翻訳の言語態 - 翻訳の楽しみ、 翻訳の苦しみ		宮下志朗教授, 丹治愛教授, 青木誠 之教授, 湯浅博雄教授	言語情報科学専攻	
COE「心とことば」 共催シンポジウム 「Human Evolution」	駒場キャンパス 900番教室 2004.8.5	Leslea J.Hlusko (University of Illinois at Champaign) Tim D White (UC Ber- keley) Tetsuro . Matsuzawa (Kyoto Univ) Saitou Naruya (National Insti- tute Genetics)		

題目/使用言語	会場/期日	主なパネリスト・参加者	主催者	その他
公開シンポジウム 関東大震災 から81年 - 朝鮮人・中国人虐殺 を再考する		石田勇治(東大) 山田昭次(立教大名 營教授) 笠原十九司(都留文科大) 芝健介(東京女子大) 佐藤達哉(立命 館大) 申惠手(青山学院大) 高橋哲 哉(東大) 黒住真(東大) 木畑洋一 (東大)	学振興プロジェクト」領域Ⅱ「平	共催:ドイツ・ヨーロッパ研究室(DESK)
小泉八雲 Lafcadio Hearn 没後 百年記念国際シンポジウム「世 界の中のラフカディオ・ハー ン」	数理科学研究科大講義室	菅原克也(東大教授) 大澤吉博(東大教授) 平川祐弘(東大名誉教授) 牧野陽子(成城大教授) 梅本順子(日大教授) 小林範子 天木ひと美 George Hughes(University of Tokyo) Susan Fisher(University College of the Fraser Valley) Roy Starrs (University of Otago) John Clubbe (University of Kentucky) Delia LaBarre Louis Solo Martinel(University of Tokyo) Muriel Détrie(University of Paris III) Alain Quella-Villéger(University of Poitiers) Jean Guitteau Libos		
The Vancouver Workshop, 2004: Technology, Culture and Cognition	•	Ian Angus (Simon Fraser University) Andrew Feenberg (Simon Fraser University) Samir Gandesha (Simon Fraser University) Larry Hickman (Southern Illinois University) Alan Richardson (The University of British Columbia) John Willinsky (The University of British Columbia) 門林岳志(東京大学)門脇俊介(東京大学)門脇俊介(東京大学)小林康夫(東京大学)東谷昌義(東京大学)信原幸弘(東京大学)村田純一(東京大学)	UTCP	The Applied Communication and Technology Laboratory at Simon Fraser Universityとの共催
シンポジウム「世界の科学教育」	駒場キャンパス 11号館1106教室 2004.10.9	星元紀(日本学術会議会員,慶応大教授)藤原一成(文科省専門官)キミ・ホソウメ(カリフォルニア大バークリー校ローレンス科学教育研究所副所長)滝川洋二(国際基督教大高校)西村和雄(京都大教授)松田良一(東大助教授)筒井勝美(英進館長)酒井由紀子(東大教養学部理科2類2年生)古谷美央(東大大学院理学系研究科博士課程2年)林万雅(中国語教師)下村博文(自民党副幹事長)	委員会,ティーチングキッズ,	共催:高等教育フォーラム

題目/使用言語	会場/期日	主なパネリスト・参加者	主催者	その他
ヨーロッパ中世史・国際シンポジウム「新しい中世像を求めて - 西洋文化における他者の生成	数理科学研究科	Maria Giuseppina Muzzarelli(ボローニャ大) Francesco Furlan(パリ第8大) 高山博(東大) Michael Borgolte(ベルリン・フンボルト大) Gerd Althoff (ミュンスター大) Harald Kleinach- midt(筑波大, DESK) 茜野尚志(東大)池上俊一(東大)村松真理子(東大) 相澤隆(東大)	地域文化研究専攻	共催:ドイツ・ヨーロッパ研究室(DESK)
「ヨーロッパ哲学とシオニズム ・イスラエル問題」	14号館208号室 2004.10.25	鵜飼哲(一橋大学教授) 藤本一勇(早稲田大学助教授)報告者:早尾貴紀(日本学術振興会特別研究員・元へブライ大学トルーマン研究所中東班客員研究員)	UTCP	
「フィーンバーグ著 『 技術への 問い』を巡って」	14号館208号室 2004.10.28	Andrew Feenberg (Simon Fraser University) 直江清隆(山形大学)石原孝二(北海道大学)河野哲也(玉川大学)	UTCP	
貧困と開発 - フィールドから見 えること	駒場キャンパス 13号館1313教室 2004.10.30	遠藤貢(東大・HSP運営委員) 中西 徹(東大) 澤田康幸(東大) 野上裕生 (日本貿易振興機構アジア経済研究 所新領域研究センター) 村上真弓 (日本貿易振興機構アジア経済研究 所新領域研究センター)		共催:IDE
「東西医学思想の対話」	東京大学駒場ファカルティ ハウスセミナー室 2004.11.8	佐々木力(東京大学)Heinrich von Staden (Institute for Advanced Study, Princeton) Ki Che Angela Leung(梁 其姿)(Academica Sinica & National Tsing-hua University, Taiwan)小松美彦(東京海洋大学)慎耆健(東京理科大学)市野川容孝(東京大学)加藤茂生(早稲川大学)司会:岡本拓司(東京大学)	UTCP	
CGS国際シンポジウム 「平和構築と地域研究」	駒場キャンパス 学際交流ホール 2004.12.04	川喜田敦子(東大)中井和夫(東大) 石田勇治(東大)	日本学術振興会「人文・社会科学振興プロジェクト」領域Ⅱ「平和構築に向けた知の再編」「ジェノサイド研究の展開」(CGS)	共催:地域文化研究専攻
日韓・歴史/哲学ワークショップ 「国家暴力・記憶・植民地主義 再考」	研究所	白永瑞(延世大学)金鐘曄(韓国神学大学)李京塤(延世大学)朴明林(延世大学)鄭鉉柏(成均館大学)北川東子(東京大学)金泰吴(東京大学)高橋哲哉(東京大学)中島隆博(東京大学)宮本久雄(東京大学)	UTCP	延世大学人文科学研究所と共催

題目/使用言語	会場/期日	主なパネリスト・参加者	主催者	その他
DESKシンポジウム 市民から視た拡大EU	駒場キャンパス 学際交流ホール 2004.12.11	廣田功(東大)中村民雄(東大)柴 宣弘(東大)小森田秋夫(東大)上 原良子(フェリス女学院大,DESK) 木畑洋一(東大)森井裕一(東大)		
「身体の思考・感覚の論理」	12号館1225号室 2004.12.11	前田英樹(立教大学文学部フランス 文学科教授)大澤真幸(京都大学人 間・環境学研究科助教授)河野哲也 (玉川大学文学部人間科学科助教授) 鈴木貴之(UTCP) 荒谷大輔(UTCP) 染谷昌義(UTCP) 千葉雅也(東京 大学大学院総合文化研究科博士課程)平倉圭(東京大学大学院学際情報学府博士課程)横山太郎(東京大学大学院学院情報学府博士課程)横山太郎(東京大学大学院総合文化研究科助手)門林岳史(UTCP)竹峰義和(UTCP/東京大学大学院総合文化研究科博士課程)御園生涼子(UTCP/東京大学大学院総合文化研究科博士課程)司会:小林康夫(UTCP/拠点リーダー/東京大学大学院総合文化研究科博士課程)司会:小林康夫(UTCP/拠点リーダー/東京大学大学院総合文化研究科教授)	UTCP	
「善における他者と死者 - 『語りえないことを』をどう語るか」		末木文美士(東京大学)	UTCP	
Sixieme Colloque de la Société Français des Etudes Japonaise	フランス、ストラスブール・マルク・プロシュ大学(ストラスブール)及びアルザス・日本研究ヨーロッパセンター(コルマール) 2004.12.17-19		Société Français des Etudes Ja- ponaise, Centre Européen d'Etudes Japonaises d'Alsace, Départment d'Etudes Japonaises de l'Université Marc Bloch de Strasbourg	後接:UTCPその他
「科学と哲学―東西思想の交流 の観点から」	14号館208号室 2004.12.22	趙敦華(北京大学)	UTCP	
Between Being and Becoming: The Beginning of Metaphysics and Science		今井知正(東京大学)	UTCP	
「知的両岸:20世紀20年代の中 国における「科学と衒学論争」」	14号館208号室 2004.12.22	周程(北京大学)佐々木力(東京大 学)	UTCP	
The Modern China's Intellectual Response to the Impact of Western Science in the way of Du Ya-quan		任元彪(北京大学)岡本拓司(東京 大学)	UTCP	

題目/使用言語	会場/期日	主なパネリスト・参加者	主催者	その他
DESK国際シンポジウム 「神話と国家政治」	駒場キャンパス 数理科学研究科 大講義室 2004.12.27	Gerhard Schepers (国際基督教大) Harald Kleinschmidt (筑波大・DESK) Dirk Lueddecke (ミュンヘン大) Hart- mut Behr (筑波大) Clemens Kauff- mann (エアランゲン大) 臼井隆一郎 (DESK運営委員長)	ドイツ・ヨーロッパ研究室 (DESK)	
シンポジウム 「世界の科学教育」	駒場キャンパス 13号館1313教室 2005.1.8	星元紀(日本学術会議会員,慶応大教授) 筒井勝美(英進館館長) 北原和夫(日本学術会議会員,国際基督教大教授) 西村和雄(京都大教授) 波辺正(東大教授) 松田良一(東大助教授) 椎廣行(国立教育政策研究所社会教育実践研究センター長) 古川和(ジャパンGEMSセンター 事務局長) 酒井由紀子(東大教養学部理科2類2年) 古谷美央(東大大学院医学系研究科博士課程1年) 林万雅(中国語教師)下村博文(衆議院議員)立花隆(評論家) 黒田玲子(東大教授)		共催:高等教育フォーラム
第12回身体運動科学シンポジウム「21世紀を支える科学・技術と身体」		石井直方(生命環境科学系) 村越隆 之(生命環境科学系) 金久博昭(生命 環境科学系) 工藤和俊(生命環境科 学系) 吉川弘之(産業技術総合研究 所理事長/元東京大学総長) 加藤道 夫(広域システム科学系) 小林康夫 (超域文化科学) 跡見順子(生命環境 科学系)	生命環境科学系·身体運動科学 研究室	

講師	所属機関/職	題目/使用言語	会場/期日	主催者
Laurent Van Depoele	ルーバン大学教授	The Creation of a Single Market (1987-1992) and the Need for Economic and Social Cohesion		DESK ドイツ・ヨーロッパ研究室
Bernhard Waldenfels	Ruhr-Universität Bochum	Bodily Experience between Selfhood and Otherness	14号館208号室 2004.4.5	UTCP
Petra von Gemünden	Universität Augsburg	ヘレニズム思潮と感情論	8号館411B教室 2004.4.13,20,27,5.11,25, 6.1,8,15,22,7.6,13	UTCP
Petra von Gemünden	Universität Augsburg	Die emotionale Frau und der vernünftige Mann? Die Affekte und der Logos in ihrer Zuordnung zu den Geschlechtern in der Antike. Ein Kapitel historischer Psycho-logie	2004.7.6	UTCP
Manuela de Barros	Université Paris VIII	Picturing the Body From Anatomy to Biotech Art	8号館419号室 2004.4.21	表象文化論研究室と共催/UTCP
Joël Thoraval	EHESS	現代中国思想における記憶と忘却	14号館708号室 2004.5.14,18,20,25,27	UTCP
馮立昇	中国清華大学	日中数学文化交流史	14号館303号室 2004.6.2,9,16,23,30,7.7, 14	UTCP
Claire Fauvergue	名古屋大学	Réalité et ordre chez Leibniz et Diderot	101号館研修室 2004.6.4	UTCP
Daniel Horowitz	Mary Huggins Gamble Professor of Amerikan Studies, Smith College	The Response to American Affluence at the End of the 20th Century 英語	14号館会議室 2004.6.4	アメリカ太平洋地域研究センター
John Howard	King's College,University of London	'Go Safely': The Country Music industry Responds to Rural AIDS 英語	14号館会議室 2004.6.11	アメリカ太平洋地域研究センター
Charles Taylor Hubert Dreyfus	McGill University/Northwestern University University of California at Berkeley	The Mediational model and its limits	14号館708号室 2004.6.11	UTCP
Charles Taylor Hubert Dreyfus	McGill University/Northwestern University University of California at Berkeley	An alternative model of our relation to the world	14号館708号室 2004.6.18	UTCP
Charles Taylor Hubert Dreyfus	McGill University/Northwestern University University of California at Berkeley	Realism	14号館708号室 2004.6.25	UTCP
Charles Taylor Hubert Dreyfus	McGill University/Northwestern University University of California at Berkeley	Personal and Cultural Relevance	14号館708号室 2004.6.29	UTCP

講師	所属機関/職	題目/使用言語	会場/期日	主催者
Marita Sturken	University of Southern California / Professor	Media and Trauma: Contesting the Space of Ground Zero in New York 英語	14号館会議室 2004.6.16	アメリカ太平洋地域研究センター
Allen Forte	Battell Professor of the Theory of Music, Yale University	Classic American Popular Songs of the Golden Era: 1925-1950 英語	14号館会議室 2004.6.18	アメリカ太平洋地域研究センター
李泰鎭	ソウル国立大学教授	歴史・法・暴力―近代日韓関係史における 法と暴力	13号館1311/1321号室 2004.6.24·25,7.1,2,8,9	UTCP
李泰鎭	ソウル国立大学	Age of Globalization: beyond historical disputes	学際交流ホール 2004.7.15	UTCP
Laurence Breiner	Professor, Department of English, Boston University	Taking Possession: Caribbean Imagination and Caribbean Space 英語	14号館会議室 2004.6.30	アメリカ太平洋地域研究センター
Charles Taylor Hubert Dreyfus	McGill University/Northwestern University University of California at Berkeley	Overcoming Representationalism: Retrieving Realism	キャンパス・ファカル ティハウス・セミナー 室 2004.7.1	UTCP
Jean-Claude Lebensztejn	Université Paris I	Parergon et manières	学際交流ホール 2004.7.8	UTCP .
Lon Kurashige	University of Southern California, Associate Professor of History, American Studies and Ethnicity, Affiliate, Southern California Studies Center	アジア系アメリカ研究史にむけて	14号館会議室 2004.7.12	アメリカ太平洋地域研究センター
Laura Hein	Associate Professor of Japanese History, History Department, Northwestern University	Social Scientists vs ,Bureaucrats : A Different Japanese-American Alliance in Occupied Japan 英語		アメリカ太平洋地域研究センター
栗田 禎子 栗本 英世	千葉大学 大阪大学	スーダンで今,何が起きているか	学際交流ホール 2004.8.25	DESK ドイツ・ヨーロッパ研究室
Mathieu Marion	Université du Québec à Montréal	Operations and Thoughts in the Tractatus Logico-Philosophicus	14号館706号室 2004.9.15	UTCP
Mathieu Marion	Université du Québec à Montréal	Logic and Arithmetic in the Tractatus Logico- Philosophicus and the role of operations	14号館706号室 2004.9.16	UTCP
Michel Onfray	Université Populaire de Caen	L'Université Populaire de Philosophie: Une Alternative Universitaire	8号館419号室 2004.10.8	表象文化論研究室と共催/UTCP
Estell Freedman	Edgar E.Robinson Professor in U.S.History, Stanford University	No Turning Back: The History of Feminism and the Future of Women 英語	14号館会議室 2004.10.13	アメリカ太平洋地域研究センター
Béatrice Didier	Ecole Nolmale Supérieure	Le mythe littéraire et l'opéra en Europe des Lu- mières au romantisme	10号館301号室 2004.10.25	教養学科地域文化研究学科フランス文 化と共催/UTCP
Peter Johanek	Münster Universität	中世都市における歴史記述と歴史の伝承	学際交流ホール 2004.11.6	UTCP

講師	所属機関/職	題目/使用言語	会場/期日	主催者
Peter Johanek	Münster Universität	英語による教会史セミナー	2号館308会議室 2004.11.8,10,15,29	UTCP
Peter Johanek	Münster Universität	都会とシトー会女子修道院―研究計画の展 望	1号館158教室 2004.11.17	UTCP
Peter Johanek	Münster Universität	君主の入市儀礼一国政史の一要素として	1号館162教室 2004.11.26	UTCP
岡本 拓司	東京大学大学院総合文化研究科講師	Glorious Ichiko ~遺産とその継承~	学際交流ホール 2004.11.13	教養学部 美術博物館 駒場友の会
François Jullien	Université Paris VII	Une déconstruction du dehors, ou comment concevoir le dialogue entre les cultures?	10号館301号室 2004.11.22	総合文化研究科言語情報科学専攻と共 催/UTCP
Akeel Bilgrami	Columbia University	Meaning, Reference, and Intentionality	14号館706号室 2004.11.25	UTCP
Akeel Bilgrami	Columbia University	Islam and the West: The Relevance of Conflict for Democracy	3号館121号室 2004.11.26	UTCP
Carol Rovane	Columbia University	Personal Identity and Group Identity	3号館121号室 2004.11.26	UTCP
Peter Wycisk	ハレ=ウッテンベルク大学教授	産業廃棄物の処理 - 欧州学術政策の課題 英語	駒場ファカルティーハ ウス内セミナー室 2004.12.1	DESK ドイツ・ヨーロッパ研究室
阿部 望	明治学院大学	東欧の移行経済と直接投資	駒場ファカルティーハ ウス内セミナー室 2004.12.6	HSP:「人間の安全保障」プログラム DESK:ドイツ・ヨーロッパ研究室 IDE-JETRO:日本貿易振興機構 アジア経済研究所
Gilles Fauconnier	University of California at San Diego	Metaphor, Counterfactuals, and Integration Networks: Compression and Emergent Struc- ture		UTCP
Donald Gillies	University College of London	Does Kuhn apply to Medicine? – The Semmelweis Case –	14号館208号室 2004.12.9	UTCP
Mary Beth Norton	Mary Donlon Alger Professor of American History, Department of History ,Cornell University	Rethinking the Metanarrative of Salem Witch- craft 英語	14号館会議室 2004.12.14	アメリカ太平洋地域研究センター
Robert Proctor	Stanford University	Acheulean Enigma: How Lower Paleolithic 'Handaxes' Became puzzling in Palaeolithic Ar- chaeology		UTCP
Robert Proctor	Stanford University	The Cigarette in Global Lung History: How Matches, Mechanization and Mass Marketing led to Mass Death and Deception		UTCP

学外からの評価

受賞など

総合文化研究科

 氏名	賞の名称	年月日
神﨑 素樹	東京体育学賞	2004.3.7
蜂巣 泉	第8回林忠四郎賞(日本天文学会)	2004.3.23
今橋 映子	第3回島田謹二記念学芸賞 2004年度日本写真協会賞 学芸賞	2004.4.4 2004.6.1
E井 哲雄	2003年度論文賞(日本ソフトウェア科学会)	2004.6.9
丹羽 清	Medal of Excellence Award(技術経営国際会議)	2004.8.3
伊藤 元己	Journal of Plant Research, Best Paper Award 2004 (日本植物学会)	2004.9.11
廣松 毅	平成16年度優秀論文賞(日本社会情報学会)	2004.9.16
玉井 哲雄	大川出版賞 (大川情報通信財団)	2004.11.25
黒田 玲子	第4回山崎貞一賞	2004.11.29
永井 淳一	本認知科学会 奨励論文賞	2004.12.11

数理科学研究科

氏名	賞の名称	年月日
儀我 美一	第20回井上学術賞(井上科学振興財団)	2004.2.4
稲葉 寿	第9回日本人口学会学会賞(日本人口学会)	2004.6.11

2004(平成16)年度 科学研究費補助金

	研究種目	研究代表者	職	研究課題目	配分額(千円)
1	学術創成	山影 進	教授	マルチエージェント・シミュレータによる社会秩序変動の研究	32,900
2	特別推進	小宮山 進	教授	半導体量子構造の平衡・非平衡電子ダイナミクスの解明と量子制御	22,000
3	特定領域	米谷 民明	教授	超弦理論の時空構造と対称性	1,300
4	特定領域	石浦 章一	教授	アミロイド前駆体セクレターゼ活性をモジュレートする分子による治療薬の開発	15, 200
5	特定領域	玉井 哲雄	教授	信頼性の高いコンポーネント技術の研究	32,000
6	特定領域	陶山 明	教授	DNAコンピュータによるSNPsおよび遺伝子発現解析法の開発	8,800
7	特定領域	瀬川 浩司	助教授	光機能性分子組織体の構築と界面物性制御材料への展開	11,800
8	特定領域	染田 清彦	助教授	分子の光誘起状態の生成条件と性質の解明	3, 200
9	特定領域	山下 晋司	教授	文化資源の生成と利用	11, 100
10	特定領域	福島 孝治	助教授	モンテカルロ法による複雑情報処理系の研究	1,900
11	特定領域	兵頭 俊夫	教授	ITを活用した生徒と自然のふれあいを媒介する教師のための教材の製作	3,700
12	特定領域	渡邊 雄一郎	助教授	植物でのRNA情報の移行および発現制御	2,500
13	特定領域	小川 桂一郎	助教授	水素結合組織体におけるプロトン移動フォトクロミズム	2,400
14	特定領域	船渡 陽子	助手	中~大~巨大質量ブラックホールの形成に関する恒星系力学からみた統一的理解の構築	1,800
15	特定領域	柴田 大	助教授	高速回転する大質量星の重力崩壊に伴うブラックホールとディスクからなる系の形成	1,000
16	特定領域	鹿児島 誠一	教授	高圧縮された有機導体の構造と電子状態	6,500
17	特定領域	菅原 正	教授	有機無機複合型スピン分極ナノ粒子	15,500
18	特定領域	笹川 昇	助手	筋強直性ジストロフィーの分子機構解明	3,000
19	特定領域	安達 裕之	教授	幕末における洋式海事技術関係書・翻訳書の所在調査と総合目録の作成	1,800
20	特定領域	柴田 大	助教授	合体するコンパクト連星からの重力波に対する数値一般相対論的研究	2,800
21	特定領域	尾中 篤	助教授	ホモアリル型アルコールの触媒的不斉エポキシ化反応の機構解明と速度論的光学分割	2,000
22	特定領域	榎本 真哉	助手	スピンクロスオーバー錯体と導電性有機分子による多重機能性ヘテロ分子集合体の開発	2, 100
23	特定領域	真船 文隆	助教授	金属微粒子を媒体とした液体中のマイクロプラズマ生成と制御	2,800
24	特定領域	村田 昌之	教授	セミインタクト細胞を用いたVero毒素の輸送・毒性発現機構の可視化解析	3,000
25	特定領域	栗栖 源嗣	助教授	立体構造から探るフェレドキシン依存性循環電子伝達でのチトクロムb6f複合体の役割	3,600
26	特定領域	小島 憲道	教授	配位空間を活用したヘテロ分子集合体の構築と特異な光・磁気相乗効果の創出	2, 100
27	特定領域	須藤 和夫	教授	ミオシンナノシステムによる細胞内情報制御	8, 100
28	特定領域	本村 凌二	教授	カンパニア都市とヴィッラ集落をめぐる社会史的研究	10, 200
29	基盤A	本村 凌二	教授	地中海世界における社会変動と識字率	6,500
30	基盤A	高橋 均	教授	奴隷制社会における拘束型労働の実践と記憶ならびに制度正当化の言説	9,600
31	基盤A	鈴木 英夫	教授	21世紀の大学における教養英語教育の可能性の研究	8, 400

	研究種目	研究代表者	職	研究課題目	配分額(千円)
32	基盤A	鹿児島 誠一	教授	一軸性圧縮による有機超伝導体の電子状態制御	11,100
33	基盤A	小林 寛道	教授	体幹深部筋力強化トレーニングマシンシステムの開発・応用	6,500
34	基盤A	能登路 雅子	教授	アジアにおけるアメリカ文化外交の展開と変容	10,600
35	基盤A	若林 正丈	教授	脱植民地化諸地域における政治と思想日本植民地主義と西欧植民地主義の比較と国際環境	12, 200
36	基盤A	松岡 心平	教授	近世における音曲と演劇テクストの総合比較研究	5,600
37	基盤A	大澤 吉博	教授	近代東アジアにおける異文化要素の異化と同化	7, 300
38	基盤A	油井 大三郎	教授	アジア系アメリカ人の越境と文化混合に関する比較研究	8,500
39	基盤A	鳥井 寿夫	助教授	連続発振原子レーザーの開発およびその諸特性の研究	12,000
40	基盤A	高塚 和夫	教授	分子量子ダイナミクスの基礎理論と応用	14, 100
41	基盤A	馬渕 一誠	教授	細胞質分裂における収縮環形成のメカニズム	16, 100
42	基盤A	植田 一博	助教授	読書の熟達化プロセスの解明とその教育への応用	29, 300
43	基盤A	古田 元夫	教授	グローバリゼーション下における地域形成と地域連関に関する比較研究	7,700
44	基盤A	齊藤 文子	助教授	新しい情報技術を利用したオープンリソース型スペイン語教育標準の構築	10, 100
45	基盤A	兵頭 俊夫	教授	ポジトロニウム-原子・分子相互作用の研究	9,700
46	基盤A	磯崎 行雄	教授	古生代末2段階大量絶滅の研究:G-L境界とP-T境界事件	25, 900
47	基盤A	木村 秀雄	教授	南米アンデス山地とアマゾン低地の社会文化的相互関係の人類学的研究	6, 400
48	基盤B	S Hones	助教授	19世紀末英米文学における都市の表象に関する新歴史主義的研究	2,400
49	基盤B	松井 哲男	教授	クォーク・グルオンプラズマと超相対論的原子核衝突の理論的研究	1,400
50	基盤B	上村 慎治	助教授	精密マイクロフロー解析による微小生物遊泳機序の研究	2, 200
51	基盤B	杉橋 陽一	教授	芸術作品のインタラクティヴィティに関する総合的研究	3,000
52	基盤B	山本 泰	教授	現代日本における公共性の実践	2,900
_53	基盤B	石井 洋二郎	教授	フランス第二帝政下における都市の変容と文学・芸術	1,100
54	基盤B	生越 直樹	教授	東アジア諸語のカテゴリー化と文法化に関する対照研究-多様性から普遍性へ-	3, 200
_ 55	基盤B	恒川 惠市	教授	民主主義体制定着の条件に関する比較研究	2,900
56	基盤B	前田 京剛	助教授	ショットノイズ測定による強相関物質の電荷素励起の研究	2,700
57	基盤B	氷上 忍	教授	ランダム行列理論でのユニバーサリティーと量子カオス	3,000
58	基盤B	小川 桂一郎	助教授	有機結晶の蛍光サーモクロミズム	1,500
59	基盤B	加藤 恒昭	助教授	大規模テキストを対象とした質問応答技術の高度化に関する研究	3, 100
60	基盤B	中西 徹	教授	経済発展過程における社会変容:親族制度と社会慣習の国際比較	2,700
61	基盤B	丸山 真人	教授	カナダにおける日本の海外直接投資と地域通貨	2, 100
62	基盤B	嶋田 正和	教授	マメ科植物とその寄生/共生生物の系統対応から見た共進化過程の解明	3,900
63	基盤B	開 一夫	助教授	母子間相互作用における2個体脳活動同時計測とその力学系シミュレーションモデル	5, 400
64	基盤B	跡見 順子	教授	LT強度の運動が心身の健康によい理由を明らかにする	7,900
65	基盤B	陶山 明	教授	自律型分子計算機のためのヘアピンDNA分子デバイスに関する研究	3,700
66	基盤B	佐藤 良明	教授	本における「うた」の総合的研究 そのフュージョンとアイデンティティーをめぐって	4,000
67	基盤B	ロバート キャンベル	助教授	文明開化における教訓と文学の総合比較研究	2,500
68	基盤B	山本 史郎	教授	18世紀後半以降のイギリスにおけるイングリッシュネス概念の生成に関する文化研究	3,700

	研究種目	研究代表者	職	研究課題目	配分額(千円)
69	基盤B	齋藤 希史	助教授	幕末明治期における漢詩文系作文書の総合的研究	2,700
70	基盤B	今橋 映子	助教授	比較芸術論の新たな構築 - 文学と視覚芸術の相関に関する総合的研究	1,600
71	基盤B	永田 敬	教授	クラスターを媒体とする新規な負イオン化学の開拓	2,800
72	基盤B	河野 泰朗	助手	陽イオン性ボランシグマ錯体の合成とホウ素 - 水素結合の不均等解裂に関する研究	2,900
73	基盤B	小島 憲道	教授	スピンと電荷の相乗効果による動的スピンクロスオーバー現象とその多重機能性の開発	3,800
74	基盤B	佐藤 直樹	教授	ゲノム比較に基づくシアノバクテリアとプラスチドの進化に関する研究	5,600
75	基盤B	伊藤 元己	助教授	無融合種子生殖種における遺伝的多様性獲得機構の解析	3, 100
76	基盤B	須藤 和夫	教授	組換えダイニンの運動特性計測に基づいたAAA型モーター作動機構の解明	7,300
77	基盤B	長谷川 壽一	教授	スリランカ乾燥地帯における大型野生動物の行動生態学的研究 - 分子生態から保全まで	4,900
78	基盤B	廣松 毅	教授	情報通信技術が経済構造へ与える影響に関する定量的分析	4,500
79	基盤B	大築 立志	教授	心理的変動が運動スキルに及ぼす影響に関する脳神経科学的研究	6, 100
80	基盤B	石井 直方	教授	運動・トレーニングによる筋肥大の機構:血流制限モデル系を用いた研究	9,300
81	基盤B	河合 祥一郎	助教授	現代舞台芸術の映像資料デジタル・アーカイヴ構築に向けて	3,400
82	基盤B	湯淺 博雄	教授	翻訳の言語態-言語論的視点と文化論的視点から	5,700
83	基盤B	菅原 克也	教授	東アジア近代文学における対欧米意識と相互認識	5, 100
84	基盤B	吉川 雅之	助教授	香港におけるレテラシーの変遷と変異に関する社会言語学的研究	3,700
85	基盤B	尚 秀夫	教授	音声英語コミュニケーションにおける相互作用研究-伝達能力とストラテジーの関係	3,700
86	基盤B	柴 宜弘	教授	バルカン諸国歴史教科書の比較研究	3,900
87	基盤B	米谷 民明	教授	超弦理論に基づく量子重力統一理論の構築	3,500
88	基盤B	小牧 研一郎	教授	低速多価イオンによる表面吸着原子の無損傷超高感度元素分析と構造解析	8,600
89	基盤B	尾中 篤	助教授	ナノポーラス物質を基盤とするメタセシス触媒の創製	7,800
90	基盤B	松本 忠夫	教授	北米産ネバダオオシロアリの日本への侵入に伴う社会生態及び遺伝的変異性の変化	7, 100
91	基盤B	池内 昌彦	教授	シアノバクテリアの新規光受容体と光応答系の機能・構造解析	5, 700
92	基盤B	安田 賢二	助教授	「コミュニティ・エフェクト」を明らかにするオンチップー細胞計測解析技術の開発	4,000
93	基盤B	豊島 陽子	助教授	AAA型分子モーターダイニンの作動メカニズム	7, 100
94	基盤B	渡邊 雄一郎	助教授	ウイルス細胞移行にかかわる複合体VMCの分子解析	10,000
95	基盤B	伊藤 元己	助教授	ニュージーランドにおける植物の適応放散的種分化の解析	4,700
96	基盤C	石橋 純	助教授	民族創生の臨界点	500
97	基盤C	門脇 俊介	教授	現代哲学および現代人間科学に対するハイデガー哲学の意義の解明	600
98	基盤C	信原 幸弘	助教授	表象の種類とその認知機能に関する相互作用主義的観点からの研究	700
99	基盤C	北川 東子	教授	「自己理解」と現代の身体文化 – 脱身体化社会についての哲学的研究	1,100
100	基盤C	伊藤 たかね	教授	語形成に関わる心的・脳内メカニズムについての理論的・実証的研究	1,000
101	基盤C	岩澤 雄司	教授	国際法の国内適用――国内適用可能性の概念を中心として	700
102	基盤C	石田 勇治	助教授	比較ジェノサイド研究 - 第二次世界大戦下ヨーロッパの事例から	1,000
103	基盤C	吉岡 大二郎	教授	二層量子ホール系の基底状態に関する研究	1,100
104	基盤C	清水 明	助教授	多数のキュービットをもつ量子計算機のディコヒーレンス	800
105	基盤C	中澤 恒子	助教授	前提に関する計算論理学的研究	700

	研究種目	研究代表者	職	研究課題目	配分額(千円)
106	基盤C	藤垣 裕子	助教授	学際研究分野における研究テーマ発展ダイナミクスの数量的分析と理論的検討	1,000
107	基盤C	丹羽 清	教授	学際的研究チームにおける研究開発支援システムの研究	800
108	基盤C	川合 .	教授	高精度な状況評価機能の自動学習の研究	1,100
109	基盤C	中村 政隆	助教授	メタ戦略を樹形探索に用いた高速な系統樹構築ソフトの開発とその実用化	900
110	基盤C	山田 茂	助教授	肝臓の骨格筋肥大に対する役割-骨格筋肥大機構の新たな展開-	2,200
111	基盤C	鈴木 賢次郎	教授	回転画像を用いた心的切断テスト	1,800
112	基盤C	村田 純一	教授	知識と実践-知識論における「実践論的転回」の意義と射程	1,000
113	基盤C	田中 純	助教授	イメージ分析における形態学的方法の思想史的研究	800
114	基盤C	内野 儀	助教授	グローバリゼーション時代における現代アメリカ演劇の比較演劇学的研究	800
115	基盤C	松村 剛	助教授	中世フランス語版ジャン・ブレット『典礼大全』の言語地理学的・文献学的語彙研究	1, 100
116	基盤C	高田 康成	教授	アングロサクソン文化を構成する「他者」に関する表象文化論的考察	1,500
117	基盤C	林 文代	教授	英米における文学・言語・メディア教育の比較研究	1,000
118	基盤C	宮下 志朗	教授	19世紀後半のフランスにおける小説の受容に関する、文化史的研究	700
119	基盤C	田中 伸一	助教授	最適性理論に基づく日英語アクセント体系の共時変異と通時変化に関する統合モデル研究	700
120	基盤C	丹野 義彦	助教授	妄想の発生のメカニズムと心理学的介入についての実証的研究	1, 100
121	基盤C	上野 宗孝	助手	宇宙における超微弱光検出用赤外線検出器の開発	1,100
122	基盤C	風間 洋一	教授	超弦理論とM理論における非摂動的ダイナミックスの研究	1,000
123	基盤C	國場 敦夫	助教授	量子群と離散可積分系	600
124	基盤C	金久 博昭	助教授	発育期における筋腱複合体の形状と機能に関する研究	2,400
125	基盤C	宮本 久雄	教授	ヘブライ的存在・ハーヤー論を基盤とした「アウシュヴィッツ以後」の新倫理学の構築	1, 100
126	基盤C	今井 知正	教授	哲学的自然主義の再検討	2,000
127	基盤C	山本 巍	教授	友愛の哲学-アリストテレス研究-	1,700
128	基盤C	安西 信一	助教授	古典主義絵画理論の射程-近世アカデミー的絵画論(特にデュフレノワ)の受容と変容	1,300
129	基盤C	川中子 義勝	教授	ドイツ近代文学における「予型論」の系譜	1,100
130	基盤C	上田 博人	教授	スペイン語語彙バリエーションに関する調査とデータベース化	500
131	基盤C	池上 俊一	教授	ヨーロッパの中世の音風景	1,900
132	基盤C	荒井 良雄	教授	インターネット・携帯電話による地域情報発信に関する地理学的研究	1,400
133	基盤C	遠藤 貢	助教授	アフリカ諸国における「民主化」の帰結:その批判的再検討	900
134	基盤C	本宮 正史	助教授	朝鮮半島から見た北東アジア国際秩序:その形成と変動力学に関する再検討	1,300
135	基盤C	石井 明	教授	1970年代初期の日台政治関係に関する研究	800
136	基盤C	古城 佳子	教授	エイズ治療薬製造に関する国際制度、国家、企業、NGO間の合意形成過程の研究	700
137	基盤C	蜂巣 泉	助教授	Ia型超新星の進化経路および爆発メカニズムの解明	900
138	基盤C	江里口 良治	教授	強磁場を伴う軸対称回転星の平衡状態とその安定性解析を行うための数値計算法の開発	2,700
139	基盤C	佐々 真一	助教授	小さな非平衡系における揺らぎ、応答、熱力学	900
140	基盤C	小河 正基	助教授	力学系としてのマントルの相転移と地球の進化:太古代・原生代境界への応用	2, 200
141	基盤C	村田 滋	助教授	脂質二分子膜を反応場とする光誘起電子移動反応の機構と高効率化に関する研究	1,800
142	基盤C	嶋田 正和	教授	学習行動から個体数ダイナミクスを経て共進化に至る3者関係:実験・モデル解析	2,800

	研究種目	研究代表者	職	研究課題目	配分額(千円)
143	基盤C	和田 元	助教授	光合成装置のアセブリーおよび安定化におけるホスファチジルグリセロールの機能	2,700
144	基盤C	増田 建	助教授	緑葉体形成における光依存性プロトクロロフィリド還元酵素アイソザイムの生理機能解析	2,200
145	萌芽	松田 良一	助教授	カラーインクジェットプリンターによる成長因子アレイの作製	1,000
146	萌芽	前田 京剛	助教授	高周波電磁場・強磁場に対するDNAの電気伝導特性の研究	1,200
147	萌芽	山崎 泰規	教授	真空中にトラップされた不安定核イオンの核崩壊を用いた"半衝突法"の開発	800
148	萌芽	伊藤 元己	助教授	シャジクモ藻網植物における多細胞体制と器官形成の起源の解析	700
149	萌芽	跡見 順子	教授	からだ/運動を通じて生命と脳を理解する教育プログラムの開発	2,600
150	萌芽	秋本 崇之	助手	潜在性ウイルスDNAを指標としたスポーツ選手の感染症罹患リスク把握の試み	2,000
151	萌芽	兵頭 俊夫	教授	イオン照射によるポリマー表面改質の低速陽電子ビームを用いた評価法の開発	3,400
152	萌芽	瀬川 浩司	助教授	光で充電できる新型色素増感太陽電池の開発	1,400
153	萌芽	尾中 篤	助教授	水中エステル化反応を可能とするナノ次元疎水性環境場酵素の開発	2,000
154	萌芽	村田 昌之	教授	セミインタクト細胞系を利用した細胞ストレス応答に関わる翻訳制御機構の解明	1, 100
155	若手A	酒井 邦嘉	助教授	機能イメージング法による言語の脳システムの解明	9, 100
156	若手A	秋本 崇之	助手	培養細胞系を用いた物理的刺激によるPGC-1遺伝子活性化メカニズムの解析	9,600
157	若手A	福重 俊幸	助手	次世代多体シミュレーション専用計算機による銀河形成および星団形成の理論的研究	7,300
158	若手B	徳盛 誠	講師	本居宣長『古事記伝』と中世書紀学との連関について	500
159	若手B	田尻 芳樹	助教授	モダニズム文学におけるテクノロジーと感覚変容に関する研究	1,000
160	若手B	清野 聡子	助手	汽水域における生態系保全と水産業に配慮した河口処理法の最適化の研究	1,000
161	若手B	杉山 亨	助手	RecAタンパク質の相同性認識機構に学んだ人工リプレッサーの医薬分子設計	700
162	若手B	高橋 成雄	助教授	4次元形状のための設計・解析・可視化手法の研究	1,000
163	若手B	神﨑 素樹	助手	協働筋の活動交替の発現機序をIa群求心性神経活動から解明する	1,100
164	若手B	工藤 和俊	助手	素早さと正確さを必要とする運動における動作および筋活動の協調的変動に関する研究	1,200
165	若手B	久保 啓太郎	助手	伸張 – 短縮サイクル運動の能力向上のメカニズムの解明	1,000
166	若手B	平工 志穂	助手	フェイントが混在する状況における脳機能の対処についての研究	1,700
167	若手B	田原 史起	助教授	中国村落の社会経済構造と自治形式をめぐる地域間比較分析 - 北京・山東・江西	500
168	若手B	小林 宜子	助教授	中世後期英文学に見られる王権と正義の概念に関する考察	700
169	若手B	松本 和子	助教授	変異理論を用いた方言接触と言語消滅の研究-旧南洋群島パラオ島の日本語	900
170	若手B	清水 剛	助教授	企業行動の制度的コントロール:モデルと計量分析によるアプローチ	600
171	若手B	永井 淳一	助手	視覚的注意の抑制メカニズムにおける適応的機能性の解明	800
172	若手B	柴田 大	助教授	回転する大質量星の重力崩壊に関する数値一般相対論的研究	600
173	若手B	橋本 幸士	助手	弦理論の非摂動的側面、特に高次元物体(プレーン)の力学についての研究	1, 100
174	若手B	柴田 尚和	助手	スピン自由度をもつ量子ホール系の密度行列繰り込み群による研究	1,100
175	若手B	畠山 温	助手	周期的静電磁場を横切る原子の内部・外部自由度のコヒーレント制御	800
176	若手B	北野 晴久	助手	高温超伝導体における秩序変数の競合/共存とその揺らぎの定量的評価	1,300
177	若手B	川本 清	助手	表面応力制御基盤とエピタキシー	700
178	若手B	栗栖 源嗣	助教授	X線結晶解析法によるフェレドキシンと亜硫酸還元酵素による電子伝達複合体の構造研究	1,700
179	若手B	青木 誠志郎	助手	適応進化の分子的検証および復元	1,400

	研究種目	研究代表者	職	研究課題目	配分額(千円)
180	若手B	金子 知適	助手	アルゴリズムに応じた知識獲得手法の研究	1,300
181	若手B	木本 哲也	助手	ストレスステロイドが海馬神経の損傷を引き起こす機構の解明	1,600
182	若手B	大森 拓哉	助手	学習者の誤り診断・修正支援をする適応型WBTシステムの構築	800
183	若手B	笹川 昇	助手	単純なDNA繰返し配列が切り拓く新たなゲノム機能研究	1,900
184	若手B	原 和之	助教授	二十世紀における「分析」の歴史:精神分析・現象学・分析哲学と言語の「存在」	1,600
185	若手B	内山 融	助教授	経済学専門家の政策決定過程における役割に関する比較研究	1,100
186	若手B	岡山 裕	助教授	民主主義と専門家統治の緊張関係:アメリカ独立行政委員会の形成過程の総合的研究	1,200
187	若手B	竹野 太三	助教授	貧困改善を促す関税の段階的削減に関する研究	900
188	若手B	佐久問 雅	助手	独立集合族に付随するTDI不等式に対する構造定理の構築を目指して	1,100
189	若手B	藤井 宏次	助手	QCD熱力学系の素励起モードとプラズマ生成シグナルの理論的研究	900
190	若手B	吉川 豊	助手	光成型法を用いた原子回路の実現	2,800
191	若手B	住吉 吉英	助手	新しい2重共鳴分光法を用いた含金属炭素鎖分子の分子構造及び電子構造の研究	1,300
192	若手B	牛山 浩	助手	比較的大きな系におけるプロトン移動反応の量子・半古典ダイナミクス	1,600
193	若手B	井口 佳哉	助手	表面吸着した分子およびクラスターのトンネル電子励起発光分光法の開発	2,900
194	若手B	原田 潤	助手	単結晶瞬間冷却法による不安定配座のX線解析	2,000
195	若手B	片山 光徳	助手	シアノバクテリア光応答遺伝子の発現制御機構の解明	1,900
196	若手B	加納 ふみ	助手	セミインタクト細胞を用いた細胞周期依存的オルガネラダイナミクスの分子機構の解明	2,000
197	特別研究員 奨励費	齋藤 大地	DC1	DNA分析を用いたイワヒバリの繁殖生態	1,000
198	特別研究員 奨励費	福家 聡	DC1	ヒトドーパミントランスポーターの多型の生理的意義と個体における機能の解析	1,000
199	特別研究員 奨励費	満島 直子	PD	ディドロ思想における「怪物」概念の諸相を巡る総合的研究	800
200	特別研究員 奨励費	村岡 哲郎	PD	身体活動に対する受動トルクの貢献に関する研究	1,200
201	特別研究員 奨励費	水野 達朗	PD	近代日本におけるエマソンの受容と文学的規範の変容過程	800
202	特別研究員 奨励費	前川 一郎	PD	英領南アフリカ連邦形成過程における帝国支配の重層構造と「ドミニオン的理念」	800
203	特別研究員 奨励費	高橋 秀治	PD	ツメガエル杯葉形成に係わる新規ノーダル遺伝子の解析と誘導メカニズム	1,200
204	特別研究員 奨励費	辻 英史	PD	市民社会から「民族共同体」へ-ドイツ都市における社会政策実践1900-1930	800
205	特別研究員 奨励費	内藤 千珠子	PD	言語態分析による近代日本の考察 - 戦争期の言説をめぐる差別と文学	800
206	特別研究員 奨励費	上野 雄一郎	PD	地球初期生命の多様性:太古代地質体における炭素、窒素、及び硫黄同位体分布	1,200
207	特別研究員 奨励費	谷口 敬介	PD	連星中性子星における一般相対論的準平衡形状の数値的研究	1,200

	研究種目	研究代表者	職	研究課題目	配分額(千円)
208	特別研究員 奨励費	鈴木 正	PD	分数量子ホール系の動力学と素励起	1, 100
209	特別研究員 奨励費	那珂 通博	PD	超重力理論による超対称ゲージ理論の強結合力学の研究	1,200
210	特別研究員 奨励費	受田 宏之	PD	先住民と貧困:メキシコ市の先住民移住者の事例	500
211	特別研究員 奨励費	梅田 郷子 (大泉)	PD	物の認識と心の認識の関連性 - 発達認知神経科学研究からの検討 -	1,084
212	特別研究員 奨励費	岡田 敦美	PD	メキシコの国民統合と少数民族:ソノラ州ヤキ族とその組織化(1920-1940)	1,200
213	特別研究員 奨励費	安達 直子 (旦)	PD	乳児における映像メディアの認知発達過程	40
214	特別研究員 奨励費	鄭 栄龍	PD	異文化コミュニケーションと他者認識	1,000
215	特別研究員 奨励費	岸 清香	PD	芸術生産の国際社会学	1,200
216	特別研究員 奨励費	渋井 進	PD	表情および顔カテゴリーの分類過程に関する実験心理学的検討	1,200
217	特別研究員 奨励費	中町 千絵(酒井)	PD	アジアにおける日本 - 人、文化、情報の相互的国際移動をめぐって -	1,200
218	特別研究員 奨励費	小林 哲生	PD	顔の魅力に関する進化心理学的研究	1,200
219	特別研究員 奨励費	豊田 太郎	DC1	両親媒性分子を用いた人工複製系の構築	1,000
220	特別研究員 奨励費	中川 洋子	DC1	現代中国語の連用修飾について	600
221	特別研究員 奨励費	三村 太郎	DC1	アラビア語写本校訂を通じた中世イスラームにおける天文観測器具にまつわる歴史研究	900
222	特別研究員 奨励費	齋藤 慈子	DC1	霊長類における色覚の個体差と行動	1,000
223	特別研究員 奨励費	鈴木 絢女	DC1	東南アジア諸国の社会福祉政策-国民統合の視点から-	1,000
224	特別研究員 奨励費	千住 淳	DC1	自閉症児の心の理論に関する実験心理学的研究	1,000
225	特別研究員 奨励費	佐々木 淳	DC1	対人恐怖症や精神分裂病等にみられる自我漏洩感の発生メカニズムの認知論的解明	1,000
226	特別研究員 奨励費	越川 滋行	DC1	シロアリの兵隊カースト分化における形態形成の分子メカニズムと社会進化に関する研究	1,000
227	特別研究員 奨励費	寺尾 隆吉	PD	ベネズエラとコロンビアの比較小説研究から見た文学のアイデンティティ形成への寄与	800

	研究種目	研究代表者	職	研究課題目	配分額(千円)
228	特別研究員 奨励費	華表 友晩	PD	癌抑制遺伝子産物P53のPIAS1を介したSUMO化の制御の解析	900
229	特別研究員 奨励費	田中 亜路	PD	セミインタクト細胞とGFP可視化解析によるABCA1の細胞内輸送と分解機構の解明	900
230	特別研究員 奨励費	山内 忍	PD	セミインタクト細胞系を用いたアグリソーム形成機構の分子基盤とその制御機構の解析	1, 100
231	特別研究員 奨励費	奥島 真一郎	PD	応用一般均衡モデルによる環境政策の社会経済学的分析	1,000
232	特別研究員 奨励費	金杉 武司	PD	心の哲学における自然主義の代案の探求 - 合理性の観点からの自由論・感情論を中心に -	700
233	特別研究員 奨励費	貞包 英之	PD	近代日本における国民国家成立過程の研究	700
234	特別研究員 奨励費	高久 恭子 (中西)	PD	ユリアヌスの宗教復興構想の形成と後期ローマ帝国におけるその受容	1, 100
235	特別研究員 奨励 費	早尾 貴紀	PD	ヨーロッパ社会思想史における「国民国家」と「イスラエル建国」問題	700
236	特別研究員 奨励費	日高 優	PD	写真という装置-アメリカにおいて写真を通じて生きられる民主主義的思考の検証	700
237	特別研究員 奨励費	古屋 博子	PD	在外ベトナム人と「祖国」ベトナム	1, 100
238	特別研究員 奨励費	渡部 森哉	PD	植民地時代初期アンデスにおける社会動態の研究	1, 100
239	特別研究員 奨励費	西野 晃徳	PD	量子多体系におけるエネルギー準位交差現象の解析的・数値的研究	1, 100
240	特別研究員 奨励費	五十嵐 智子 (澁谷)	DC2	聞こえることと聞こえないことの文化論的研究	900
241	特別研究員 奨励費	加治屋 健司	DC2	1950年代アメリカのモダニズム絵画とフォーマリズム批評の形成とその文化的背景	900
242	特別研究員 奨励費	黒崎 将広	DC2	戦争法秩序の規範構造	900
243	特別研究員 奨励費	香西 豊子	DC2	ドネーションの歴史社会学的考察	900
244	特別研究員 奨励費	菅原 光	PD	明治時代の政治思想を西周を軸に据えて考察する	900
245	特別研究員 奨励費	豊田 真穂	PD	アメリカ占領下の日本における女性労働改革	700
246	特別研究員 奨励費	西山 達也	DC2	ハイデッカーと「翻訳」:30-40年代の思想とそのフランスにおける受容	500
247	特別研究員 奨励費	吉田 徹	DC2	欧州統合に伴う各国政治の変容	900

	研究種目	研究代表者	職	研究課題目	配分額(千円)
248	特別研究員 奨励費	吉村 貴之	DC2	ソヴィエト・アルメニア1920年代における共産党と民族政党との関係	500
249	特別研究員 奨励費	藍 弘岳	DC2	十八世紀日本における儒学的知 - 易学の展開をめぐって	500
250	特別研究員 奨励費	鷲田 任邦	DC2	タイとマレーシアにおける財政政策と代議制	900
251	特別研究員 奨励費	和仁 健太郎	DC2	中立制度の成立契機に関する歴史的研究	500
252	特別研究員 奨励費	富樫 祐一	PD	分子数の離散性が化学反応ネットワークに及ぼす効果	900
253	特別研究員 奨励費	安部 淳	DC2	極端な雌偏向性比を示す寄性蜂Melittobiaの雄問闘争と性比調節の進化	900
254	特別研究員 奨励費	紀 嘉浩	DC2	筋強直性ジストロフィーのモデル構築とRNAリピート配列結合タンパク質の解析	900
255	特別研究員 奨励費	北條 優	DC2	シロアリ兵隊における額腺に関する分子発生学的及び進化生態学的研究	900
256	特別研究員 奨励費	猪瀬 浩平	DC1	差異の再定位にむけて:障害をめぐる組織・政策・実践を手がかりにして	900
257	特別研究員 奨励費	小堀 修	DC1	完全主義と精神病理との関連についての認知臨床心理学的研究	900
258	特別研究員 奨励費	地田 徹朗	DC1	ソビエト連邦構成共和国党エリートと中央・地方関係(1964-1991)	900
259	特別研究員 奨励費	樋渡 雅人	DC1	ウズベキスタンにおける慣習経済の分析と貧困問題への適用に関する研究	900
260	特別研究員 奨励費	丸山 麻子	DC1	インドのコミュニティ識字学習センターにおける文書・学習者・組織の微視的研究	900
261	特別研究員 奨励費	李 佳ファ	DC1	近代中国・日本における西洋科学技術の受容	900
262	特別研究員 奨励費	久保 祥一	DC1	フォトニック結晶を用いた光機能性材料の作製	900
263	特別研究員 奨励費	乾 雅史	DC1	ツメガエルの細胞接着と受容体に関する分子生物学的研究	900
264	特別研究員 奨励費	佐藤 礼子	DCI	アフリカツメガエルにおける新規の神経形成遺伝子の機能解析	900
265	特別研究員 奨励費	伊藤 洋	DC1	白律進化する食物網モデルによる生態系の進化動態解析	900
266	特別研究員 奨励費	海老原 淳	DC1	コケシノブ科における種分化様式の比較研究	900
267	特別研究員 奨励費	森口 裕之	DC1	培養細胞の微小環境制御を目指した新しい微細加工技術の開発と応用	900

	研究種目	研究代表者	職	研究課題目	配分額(千円)
268	特別研究員 奨励費	若本 祐一	DC1	1細胞計測を用いた細胞の表現型のダイナミックな変化の解析	900
269	特別研究員 奨励費	宮崎 裕助	DC2	ジャック・デリタの思想における討議倫理の帰趨:「来たるべき民主主義」のプログラム	500
270	特別研究員 奨励費	野田 直紀	DC1	コヒーレントな運動をする分子モーターの3次元的動態の研究	1,000
271	特別研究員 奨励費	山本 典史	PD	遷移状態理論を超えた「新しい化学反応論」	1,200
272	特別研究員 奨励費	荒原 邦博	PD	プルーストにおける絵画の受容論的研究 - 第三共和制下の美術旅行・美術館・展覧会 -	800
273	特別研究員 奨励費	荒原 山紀子	PD	フローベールと地質学 - 19世紀フランス文学と科学の大衆化運動の文献学的資料研究 -	800
274	特別研究員 奨励費	有田 雅樹	PD	公的/私的領域の言説構成の批判的検証と、それに基づく現代政治倫理の再構築	800
275	特別研究員 奨励費	沖本 幸子	PD	日本中世芸能の身体-今様・自拍子・猿楽-	1,200
276	特別研究員 奨励費	神長 斉子 (大野)	PD	メディア研究による19世紀ロシア文学の大衆化過程の解明	800
277	特別研究員 奨励費	嶋田 総太郎	PD	自己認識における感覚統合メカニズム-遅延自己映像を用いた認知神経科学的研究	1,200
278	特別研究員 奨励費	菅原 由紀子 (川口)	PD	推論的な言語理解の概念的枠組みを提示する学際的理論の構築	1,200
279	特別研究員 奨励費	瀬﨑 圭二	PD	大正期消費社会の成立過程と〈文学〉をめぐる文化史的研究	800
280	特別研究員 奨励費	園部 裕子	PD	フランスにおける国民国家・福祉国家と社会的権利の変容過程:女性移住者の連帯を例に	1,200
281	特別研究員 奨励費	多湖 淳	PD	集団正当化をめぐる国際政治の実証研究 理念重視と手続重視の二つの正当化に注目して	1,200
282	特別研究員 奨励費	中島 聡子	PD	十六世紀スペインにおける重婚、移動、絆	1,200
283	特別研究員 奨励費	星野 靖二	PD	近代日本に見る宗教の位相と宗教者達の自己定位との相互変容	1,200
284	特別研究員 奨励費	真﨑 裕子 (神島)	PD	国境を超える社会正義論の倫理的根拠に関する研究	1,200
285	特別研究員 奨励費	宮本 大人	PD	占領下日本の子供漫画についての表象文化論的研究	800
286	特別研究員 奨励費	村上 謙	PD	近世後期上方語の研究	1,200
287	特別研究員 奨励費	山上 紀子	PD	芸術と社会-オディロン・ルドンの作品研究	1,200

	研究種目	研究代表者	職	研究課題目	配分額(千円)
288	特別研究員 奨励費	渡邉 暁	PD	現代ラテンアメリカにおける地方政治の役割に関する比較研究	1,200
289	特別研究員 奨励費	前田 啓一	PD	極超新星とガンマ線バーストの爆発機構及び高赤方偏移における天体形成・進化の研究	1,200
290	特別研究員 奨励費	荒木 光典	PD	DIB候補である非直線炭素鎖分子の高感度・高分解能レーザー分光	1,200
291	特別研究員 奨励費	八木 清	PD	第一原理に基づく電子・原子系の反応過程に対する理論開発と応用	1, 200
292	特別研究員 奨励費	金 賢徹	PD	オンチップ再構成細胞系とAFM超微量分子採取技術を用いた細胞内一分子計測系の構築	1,200
293	特別研究員 奨励費	藤田 愛	PD	シロアリのカーストによる栄養生理の相違と特異的栄養の利用システム	1,200
294	特別研究員 奨励費	小宮 京	DC2	鳩山一郎と戦後政治 自由民主党の成立	1,000
295	特別研究員 奨励費	井伊 あかり	DC2	マドレーヌ・ヴィオネ論 - モードにおける近代的システムと眼差しの誕生	1,000
296	特別研究員 奨励費	井家 晴子	DC2	モロッコにおける出産の医療化と地域社会の変動 - 住民の選択的行動と葛藤 -	1,000
297	特別研究員 奨励費	神田 豊隆	DC2	池田内閣成立から対中国交正常化に至る時期の日本の中国政策についての歴史学的研究	1,000
298	特別研究員 奨励費	小森 謙一郎	DC2	ジャック・デリダにおける生産の概念 - 美学、マルクス主義、脱構築	600
299	特別研究員 奨励費	砂原 庸介	DC2	地域社会のガバナンス 新しい地域政策の構想	900
300	特別研究員 奨励費	相馬 直子	DC2	世代間・世代内公正の日本モデル:少子社会における次世代育成戦略の動態的国際比較	1,000
301	特別研究員 奨励費	土屋 和代	DC2	1960年代後半の「貧困との戦い」- 人種、階級、ジェンダーの検討を中心に	600
302	特別研究員 奨励費	堂下 恵	DC2	日本型エコツーリズムに関する研究:京都府美山町の事例研究を通して	1,000
303	特別研究員 奨励費	西村 もも子	DC2	国際制度構築をめぐる多国間交渉における民間企業と先進国政府の行動の実証的研究	1,000
304	特別研究員 奨励費	前島 志保	DC2	1920-30年代「大日本帝国」における総合・大衆雑誌の中の心象地理に関する研究	1,000
305	特別研究員 奨励費	三津間 康幸	DC2	前2世紀後半から前1世紀前半におけるアルシャク朝のバビロニア統治体制形成過程	900
306	特別研究員 奨励費	元森 絵里子	DC2	戦後日本の社会像の検討「子ども」と「社会」の関係性イメージを切り口にして	1,000
307	特別研究員 奨励費	山﨑 修道	DC2	認知行動アプローチによる妄想の発生メカニズムの解明と認知行動療法の開発	1,000

	研究種目	研究代表者	職	研究課題目	配分額(千円)
308	特別研究員 奨励費	來島 愛子	DC2	最適停止問題とゲーム理論に関する研究	1,000
309	特別研究員 奨励費	島田 英彦	DC2	弦/M理論とゲージ理論との対応関係の検証及び解明 - 自由度の対応を中心として	1,000
310	特別研究員 奨励費	大久保 將史	DC2	電気伝導性・磁性の光制御を目指した光応答性有機・無機複合錯体の開発	1,000
311	特別研究員 奨励費	須磨 航介	DC2	ラジカル錯体の分子間相互作用の分光学的研究	1,000
312	特別研究員 奨励費	土金 勇樹	DC2	単細胞接合藻ミカヅキモの性フェロモンとその受容体を指標とした種分化機構の解析	1,000
313	特別研究員 奨励費	平島 雅也	DC2	ヒトの多関節動作システムにおける中枢神経系の身体特性把握メカニズム	1,000
314	特別研究員 奨励費	堀 孝一	DC2	植物の発生、抵抗性反応におけるNMDの機能に関する解析	1,000
315	特別研究員 奨励費	水野 直子	DC2	微小管とダイニン複合体の相互作用についての構造的考察	1,000
316	特別研究員 奨励費	池田 真志	DC1	小売・サービス産業による生産・流通システムの再編成に関する地理学的研究	1,000
317	特別研究員 奨励費	五野井 郁夫	DC1	トランスナショナルな市民社会による規範形成の理論的考察:債務帳消し運動を事例に	1,000
318	特別研究員 奨励費	坂口 菊恵	DC1	女性の性行動に対する個人差に関する内分泌学的背景の検討	1,000
319	特別研究員 奨励費	薩 日娜	DC1	近代日本における西洋数学の受容、及びその中国への影響	600
320	特別研究員 奨励費	藤澤 啓子	DC1	幼児における社会関係の調整とその多元的理解:行動学的手法を用いて	1,000
321	特別研究員 奨励費	山形 伸二	DC1	衝動性の認知的・生物学的・発達的メカニズムの検討	1,000
322	特別研究員 奨励費	與那獨 潤	DC1	近代東アジア世界の「血縁」表象システムとアイデンティティ・ポリティクスの研究	1,000
323	特別研究員 奨励費	佐久間 寿人	DC1	テラヘルツ顕微鏡による量子ホール素子からのサイクロトロン発光イメージング	1,000
324	特別研究員 奨励費	関口 雄一郎	DC1	般相対論的数値流体シミュレーションによるブラックホールの形成	1,000
325	特別研究員 奨励費	安原 望	DC1	シリコンベース量子構造におけるキャリアダイナミクスとデバイス機能化に関する研究	1,000
326	特別研究員 奨励費	小島 健介	DC1	ネットワーク制御した心筋細胞拍動リズム形成メカニズムの1細胞計測	1,000
327	特別研究員 奨励費	原本 悦和	DC1	両生類初期胚におけるノーダル関連遺伝子の機能解析	1,000

	研究種目	研究代表者	職	研究課題目	配分額(千円)
328	特別研究員 奨励費	小林 寛基	DC1	マウスの腎形成におけるWntシグナルとSall遺伝子の関係	1,000
329	特別研究員 奨励費	丹治 愛	教授	アダムスミスの思想におけるレトリックと宗教	400
330	特別研究員 奨励費	佐々木 力	教授	日本の伝統・近代社会における民衆科学の歴史研究	400
331	特別研究員 奨励費	高塚 和夫	教授	ダイナミカルトンネリングの理論的な解明	1,200
332	特別研究員 奨励費	黒住 眞	教授	近代日本における神道形成 - その社会化および戦時化の様相	1,200
333	特別研究員 奨励費	ロバート キャンベル	助教授	近世後期の日韓小説対比研究-江戸戯作研究方法論の一環として-	500
334	特別研究員 奨励費	黒住 眞	教授	脱儒から脱亜へ-日本近世・近代の思想変化と東アジア思想構図の再構成	500
335	特別研究員 奨励費	大澤 吉博	教授	1960年代日本の前衛芸術運動	300

	拠点リーダー	職	プログラム名称	配分額(千円)
1	小林 康夫	教授	共生のための国際哲学交流センター	90,000
2	浅島 誠	教授	融合科学創成ステーション	207,000
3	長谷川 壽一	教授	心とことば-進化認知科学的展開	118, 200

受入番号	寄付者	金額	職	名前	研究テーマ
1	ドイツ学術交流会 東京事務所	14, 287, 393		ドイツ・ヨーロッパ研究寄附講座	
2	財団法人磁気健康科学研究振興財団	900,000	教授	久保田俊一郎	
3	日本化薬株式会社医薬事業本部	900,000	教授	赤沼宏史	1,5AGの代謝学的研究に関する研究
4	財団法人福武学術文化振興財団	1,500,000	教授	池上俊一	平成15年度国際交流に関する助成
5	京セラ株式会社	1,000,000	助教授	瀬川浩司	
6	株式会社ユニバーサルシステムズ	300,000	助教授	深津 晋	
7	株式会社島津製作所	3,000,000	助教授	安田賢二	
8	株式会社資生堂	1,000,000	助手	今村保忠	
9	株式会社ジースポート	600,000	助教授	深代千之	
10	財団法人稲盛財団	1,000,000	助手	神崎素樹	力調整安定性の生理学的メカニズムおよびその機能的意義の解明
11	財団法人稲盛財団	1,000,000	講師	岡本拓司	社会の持続可能性とエネルギー産業:日本の電気事業を例に
12	三共株式会社	1,000,000	教授	黒田玲子	DNAと薬物との相互作用の分子レベルでの研究
13	予防医療臨床研究会	1,500,000	教授	石井直方	
14	LVJグループ株式会社	4,000,000	助教授	三浦 篤	
15	森 稔	700,000		オルガン委員会	
16	株式会社サトウスポーツプラザ	6,000,000	教授	石井直方	
17	九州建設コンサルタント株式会社	130,080	助手	清野聡子	大分の干潟の研究
18	株式会社創建	60,000	助手	清野聡子	ヒートアイランド対策の研究
19	財団法人東京大学出版会	11,400		アメリカ太平洋地域研究センター	
20	株式会社SRA先端技術研究所	800,000	教授	玉井哲雄	
21	財団法人旭硝子財団	1,000,000	講師	岡本拓司	
22	財団法人アメリカ研究振興会	3, 598, 810		アメリカ太平洋地域研究センター	
23	財団法人立石科学技術振興財団	2,500,000	助手	政二 慶	
24	昭和電工㈱石油化学事業部門大分コンビナート	1,000,000	助教授	尾中 篤	
25	三共株式会社製薬技術研究所	500,000	助教授	尾中 篤	固体特異反応場を利用した研究
26	日本化薬株式会社医薬事業本部	800,000	教授	赤沼宏史	1,5AGの代謝学的研究に関する研究
27	Global Biodiversity Information Facility	1, 326, 480	助教授	伊藤元己	Name Service for Vascular Plants by Networking of Taxonomic Checklists Throughout East Asia
28	財団法人文教協会	1,500,000		教養教育開発室	国際水準の教養教育のあり方についての調査・研究
29	東芝セラミック株式会社	200,000	助教授	瀬川浩司	

受入番号	寄付者	金額	職	名前	研究テーマ
30	財団法人国際コミュニケーション基金	2,500,000	教授	広松 毅	国際コミュニケーション研究奨励金
31	ドイツ学術交流会 東京事務所	11, 425, 627		ドイツ・ヨーロッパ研究寄附講座	
32	株式会社ビデオリサーチ研究開発室	1,000,000	教授	繁桝算男	
33	協和発酵工業㈱医薬カンパニー	300,000	助教授	村越隆之	
34	ファイザー株式会社	2,500,000	教授	金子邦彦	
35	ペンタックス株式会社	2,000,000	教授	跡見順子	
36	京セラ株式会社	1,000,000	助教授	瀬川浩司	
37	日産化学工業株式会社	500,000	教授	菅原 正	
38	東大教養学部オルガン運営募金	400,000		オルガン委員会	東大教養学部オルガン演奏会の運営助成
39	株式会社木村微生物研究所	3,000,000	助教授	山田健茂	
40	三共株式会社	1,000,000	教授	黒川玲子	DNAと薬物との相互作用の分子レベルでの研究
41	株式会社東京建設コンサルタント株式会社九州支店	500,000	助手	清野聡子	番匠川河口環境に関する研究
42	財団法人漢方医薬研究振興財団	1,000,000	助教授	渡辺雄一郎	
43	財団法人水野スポーツ振興会	1,000,000	助手	工藤和俊	非線形力学系アプローチを用いた動作シナジー評価法の開発
44	東京工業大学(移換え)	17,626	助教授	増出 健	
45	財団法人住友財団	1, 200, 000	助教授	栗栖源嗣	海産無脊椎動物由来溶液血性レクチン(CEL - Ⅲ)の鼓膜形成状態におけるX線構造解析
46	株式会社東京大学TLO	165,000		総合文化研究科	
47	花王㈱スキンケア研究所	1, 200, 000	教授	跡見順子	
48	㈱竹中工務店	1,000,000	教授	小林寛道	
49	三共㈱製薬技術研究所	500,000	助教授	尾中 篤	固体特異反応場を利用した研究
50	財団法人カシオ科学振興財団	2,000,000	助手	政二 慶	
51	㈱電通	1,000,000	教授	繁桝算男	
52	東京大学美術博物館	15,721		美術博物館	『駒場の歴史展』会期中の募金
53	田上とよみ	200,000	助手	折茂克哉	
54	SRI研究開発株式会社	500,000	講師	小嶋武次	
合計		88, 038, 137			

2004(平成16)年度 奨学寄附金(数理科学研究科)

受入番号	寄付者	金額	職	名前	研究テーマ
1	ヨーロッパ共同体	8, 276, 507	教授	斉藤 毅	ヨーロッパ共同体およびミラノ大学とのプロジェクト「数論的台 数幾何」
2	北海道大学(移換え)	122, 760	教授	儀我美	
3	(株)エムティービーインベストメントテクノロジー研究所	500,000	教授	楠岡成雄	
合計		8, 899, 267			

16.12.31現在(受入決定分)

受入番号	委託団体	受託担当者		16. 12. 31現在(受入決定分) タイトル
1	独立行政法人科学技術振興機構	黒田玲子	7,800,000	カイロモルフォロジー研究の基礎検討
2	独立行政法人日本学術振興会	石田勇治	12, 430, 000	平和構築に向けた知の再編(「ジェノサイド研究」の展開)
3	広島大学(文部科学省)	浅島 誠	18,000,000	トロピカリスの遺伝子導入カエルの作成
4	高エネルギー加速器研究機構 (文部科学省)	村田昌之	6,500,000	細胞内輸送のダイナミズム可視化及び関連タンパク質の構造・機能相関解析
5	大阪大学(文部科学省)	栗栖源嗣	1,000,000	脳・神経で機能しているタンパク質の構造研究
6	独立行政法人科学技術振興機構	浅島 誠	10,000,000	器官再生の研究
7	独立行政法人農業·生物系特定産業技術研究 機構動物衛生研究所	福井彰雅	2,000,000	平成16年度「形成・生理機能の改変による新農林水産物の算出に関する総合研究」
8	独立行政法人科学技術振興機構	伊藤元己	7,500,000	植物多様性情報データベースの開発・構築
9	独立行政法人農業生物資源研究所	渡辺雄一郎	3,800,000	物質生産のための安定な植物ウィルスベクターの選別
10	国立精神・神経センター	石浦章一	4,000,000	筋強直性筋ジストロフィーの分子病態と治療
11	国立精神・神経センター	松田良一	4,000,000	Read-through 活性物質を検索するためのダブル・レポーター遺伝子を導入したトランスジェニックマウスの開発
12	国立遺伝学研究所 (文部科学省)	伊藤元己	24, 750, 000	植物多様性情報発信に関する国内外情報収集および情報の標準化
13	エスペック株式会社	小林寛道	500,000	高・低酸素環境におけるトレーニングおよびダイエット効果に与える環境に関する研究
14	独立行政法人科学技術振興機構	安田賢二	129, 862, 000	薬物・医療スクリーニングを目指したオンチップ・セロミクス計測技術の開発
15	独立行政法人科学技術振興機構	前田京剛	1,040,000	高温超伝導ジョセフソン接合回路のダイナミズムの研究
16	独立行政法人科学技術振興機構	川戸 佳	6,500,000	海馬での記憶学習撹乱の解析
17	独立行政法人科学技術振興機構	久我隆弘	2,600,000	原子ボーズ凝縮体と光双極子ポテンシャルを使った原子量子回路の開発
18	独立行政法人科学技術振興機構	小宮山進	6, 240, 000	赤外-サブミリ波領域の光子検出器開発と走査顕微鏡の開拓
19	新エネルギー・産業技術総合開発機構	瀬川浩司	40,000,000	太陽光発電技術研究開発革新的次世代太陽光発電システム技術開発光充電型色素増感太陽電池の研究開発
20	独立行政法人科学技術振興機構	深津 晋	2, 178, 000	シリコンをベースとする新光機能素子の創製
21	独立行政法人科学技術振興機構	清水 明	1, 300, 000	多体量子系としての量子計算機の分析
22	独立行政法人科学技術振興機構	北野晴久	1, 300, 000	固有ジョセフソン接合と超伝導共振器を用いた量子状態制御の研究
23	独立行政法人科学技術振興機構	酒井邦嘉	5, 200, 000	脳機能計測・双生児研究による言語獲得メカニズムの解明
24	文部科学省科学技術・学術政策局	川戸 佳	60, 964, 000	環境ホルモン記憶学習撹乱の新型多電極計測
25	文部科学省科学技術・学術政策局	豊島陽子	68, 082, 000	ダイニンを用いた自立分散型生体ナノマシンの創成1
26	独立行政法人科学技術振興機構	陶山 明	988,000	位置情報を利用した分子メモリと配列セットの設計・配列
27	独立行政法人科学技術振興機構	豊島陽子	1,300,000	ダイニン・微小管系の運動と振動性の解析
28	独立行政法人科学技術振興機構	藤垣裕子	650,000	公共技術のガバナンス:社会技術理論体系の構築に向けて

受入番号	委託団体	受託担当者	金額	タイトル	
29	独立行政法人科学技術振興機構	石浦章一	1, 300, 000	学習・記憶・認知・意欲機能の基盤と不登校	
30	独立行政法人日本学術振興会	山田広昭	6, 370, 000	文学・芸術の社会統合的機能の研究	
合計			438, 154, 000		

受入番号	委託団体	受託担当者	金額	タイトル
1	山之内製薬株式会社創薬研究本部分子医学 研究所	村田昌之	49, 501, 200	細胞内操作に基づく分子動態解析技術の研究開発
2	キリンビール株式会社	浅島 誠	1,000,000	脊椎動物の血管内皮細胞の分化
3	株式会社 コンポン研究所	真船文隆	3, 150, 000	光制御によるナノスケール物質の創製
4	独立行政法人科学技術振興機構/応川光研 工業株式会社	斉藤晴雄	2, 483, 000	高性能シンチレーター材料を用いた新規放射線検出装置の開発
5	アサヒビール株式会社未来科学研究所	石井直方	2,000,000	骨格筋肥大に関わる新規遺伝子の探索
6	日本電信電話株式会社コミュニケーション 科学基礎研究所	加藤恒昭	1,000,000	マルチモーダル質問応答技術に関する研究
7	丸善工業株式会社	小林寛道	1,000,000	リハビリ用トレーニングマシン
8	日本化薬株式会社	今村保忠	840,000	基底膜コラーゲンを用いた細胞培養法の研究
9	フィールファイン株式会社	石井直方	1,200,000	トライアングルアセスメントに基づいたフィットネスプログラムの開発
10	宇宙航空研究開発機構宇宙環境利用センター	浅島 誠	0	蛋白質の高品質結晶化技術および構造解析による結晶特性評価技術の検討
11	株式会社電通総合マーケティング局	繁桝算男	0	消費者金融調査データの階層
12	独立行政法人科学技術振興機構	安田賢二	1, 260, 000	培養細胞精製のためのオンチップ・セルソーターシステム
13	独立行政法人科学技術振興機構	黒田玲子	10,000,000	カイロモルフォロジー:物質界・生命界のおける分子から分子集合体の構築
14	株式会社デンソー基礎研究所	菅原 正	500,000	導電性が付与された有機磁性材料の二次電池への適用可能性検討
合計			73, 934, 200	
				. A decline of 25 Co. U. a. A. 19 Co. a. a.

^{*}金額欄は委託団体の負担分のみ

2004(平成16)年度 共同研究(数理科学研究科)

受入番号	委託団体	受託担当者	金額	タイトル
1	新日本製鉄株式会社技術開発本部	山本昌宏	3, 351, 000	固定エネルギー削減のための非定常電熱逆問題セイシング技術の研究開発
合計			3,351,000	

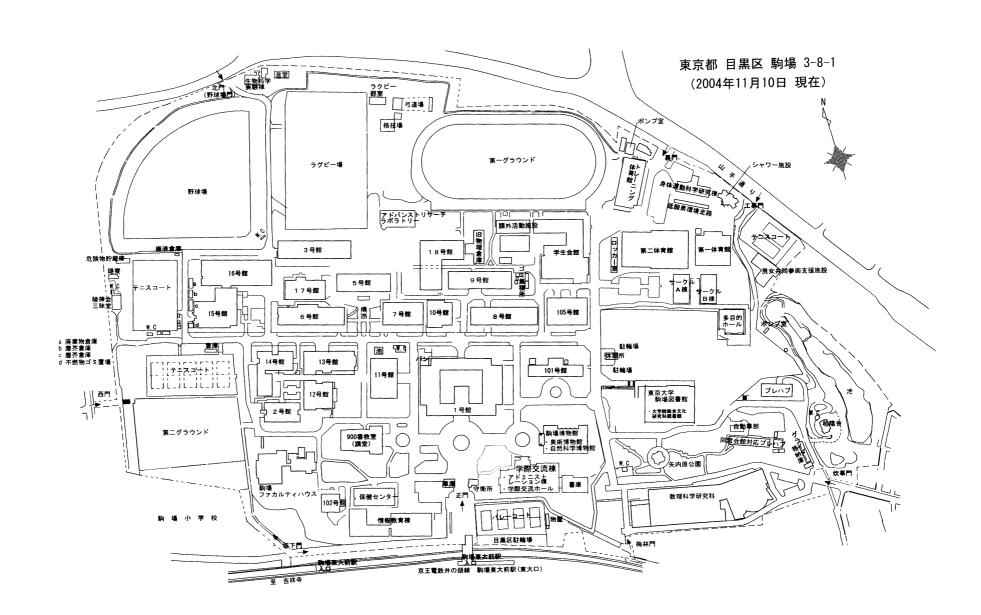
^{*}金額欄は委託団体の負担分のみ

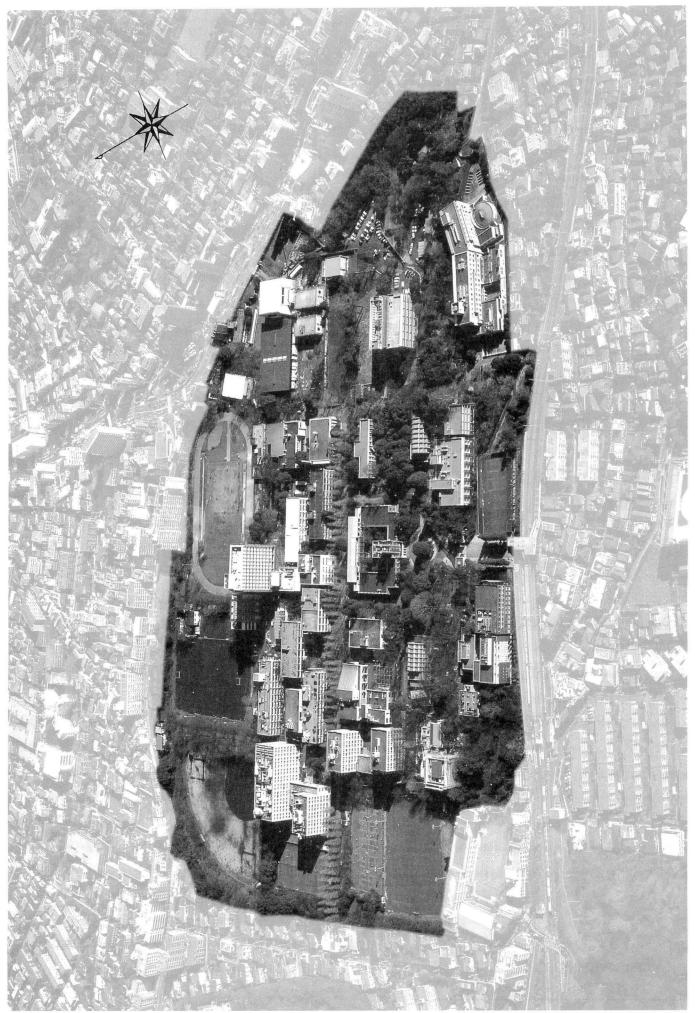
2004(平成16)年度の役職者

研究科長・学部長および専攻・系長・学科長

TT che TO E W che E	\45 pt - 5.6	THE TOTAL A	40
研究科長・学部長		予算委員会 廣松	毅
'\' ')	成17年2月15日まで	方界安貝会 ————————————————————————————————————	和夫
	木畑 洋一	学部報委員会 ————————————————————————————————————	隆三
	成17年2月16日から	入試委員会 ————— 谷内	
副研究科長・副学部長(評議員)		教育・研究評価委員会 ――― 坂原	茂
	山本 泰	図書委員会 鹿児,	
副学部長(事務部長) ——————		学生委員会 ————————————————————————————————————	
総長特任補佐 —————		平成16年9月30	0日まで
研究科長特任補佐 ————			
平月		平成16年10月	1日から
総長補佐		三鷹国際学生宿舎運営委員会 ———— 幸田	薫
研究科長・学部長補佐	一 加藤 光裕	平成16年9月30	0日まで
	山田 広昭	村田	昌之
平月	成16年9月30日まで	平成16年10月	1日から
	森井 裕一	後期運営委員会 ————— 松浦	寿輝
平月	成16年10月1日から	環境委員会下井	守
言語情報科学専攻長 —————	一 西中村 浩	知的財産室発明委員会 ——— 浅島	誠
超域文化科学専攻長 ———————	一 山下 晋司	平成17年2月15	5日まで
地域文化研究専攻長 ——————	一 中井 和夫	木畑	洋一
国際社会科学専攻長 —————	一 小寺 彰	平成17年2月10	5日から
広域科学専攻長	一 江里口良治	社会連携委員会 ———— 三谷	博
上 会理培利学玄县 ————————————————————————————————————	— 万世 市古	建設委員会 ———— 兵頭	俊夫
相関基礎科学系長 ————————————————————————————————————	一 永田 敬	研究棟管理運営委員会 ———— 三角	
広域システム科学系長	一 荒井 良雄	共用スペース運用委員会 ――― 浅島	誠
超域文化科学科長 ——————		平成17年2月19	5日まで
地域文化研究学科長 —————		木畑	洋一
総合社会科学科長		平成17年2月10	
基礎科学科長	一 小島 憲道	情報基盤委員会 ———— 川合	慧
広域科学科長 ——————	一 玉井 哲雄	防災委員会 ————————————————————————————————————	誠
生命・認知科学科長		平成17年2月19	5日まで
		木畑	洋一
		平成17年2月10	
総合文化研究科・教養学部内の各種委員長・諸	長・代表など	国際交流・留学生委員会 北川	東子
		奨学委員会 ———— 若林	正丈
総務委員会 ————	一 浅島 誠	放射線安全委員会 ———— 渡辺	
	戊17年2月15日まで	放射線施設運営委員会 ——— 渡辺	
	木畑 洋一	核燃料物質調査委員会 ———— 江里[
平,	戊17年2月16日から	進学情報センター運営委員会 ―――― 菅原	
総合文化研究科教育会議 ————	一 浅島 誠	組み替えDNA実験安全委員会 ——— 池内	
	戊17年2月15日まで	実験動物委員会 ————— 松田	
	木畑 洋一	研究用微生物委員会 ———— 跡見	順子
平月	戊17年2月16日から	石綿問題委員会 —————— 兵頭	
前期運営委員会 —————	一 浅島 誠	アメリカ太平洋地域研究センター運営委員会 - 油井	
	戊17年2月15日まで	学友会評議員 金子	
	木畑 洋一	化学物質安全管理委員会 ——— 下井	守
平月	戊17年2月16日から	学生相談所運営委員会 ——— 繁桝	
	一 浅島 誠	文化施設運営委員会 ——— 野村	剛史
	戊17年2月15日まで	ヒトを対象とした実験研究に関する倫理審査委員会	
	木畑 洋一		立志
平月	艾17年2月16日から	前期教務電算委員会 ———— 丹治	业心爱
教務委員会 ————		TA委員会 ———— 兵頭	
2 · · ·		72	

スペース・コラボレーション・システム	SCS運営委員会	古典語・地中海諸言語 ————	
	鈴木 英夫	法・政治	———— 岩澤 雄司
健康安全管理委員会 —————		経済・統計	
	平成17年2月15日まで	社会・社会思想史	———— 山脇 直司
	木畑 洋一	国際関係 ————————————————————————————————————	———— 後藤 則行
	平成17年2月16日から	歴史学	三谷 博
ハラスメントに関する相談員 ―――	浅島 誠	国文・漢文学	
	平成17年2月15日まで	文化人類学 —————	福島 真人
	木畑 洋一	哲学・科学史	
	平成17年2月16日から	心理・教育学	
国際研究教育交流委員会 ————	山本 泰	人文地理学 —————	
学生相談協議会 ————		物理 ————	
駒場インターナショナルオフィス運営委	·員会	化学 ——————	増田 茂
		生物 —————	一 石浦 章一
技術組織調整委員会 ————	兵頭 俊夫	情報・図形	
情報倫理審査会 —————	浅島 誠	宇宙地球 —————	磯崎 行雄
	平成17年2月15日まで	相関自然 ————	小島 憲道
	木畑 洋一	スポーツ・身体運動 ――――	
	平成17年2月16日から	人文科学委員会委員長 ————	 三谷 博
前期カリキュラム改革委員会 ———	浅島 誠	外国語委員会委員長 ————	 大貫 隆
	平成17年2月15日まで	社会科学委員会委員長 ————	
	木畑 洋一	前期課程数学委員会委員長 ———	———— 織田 孝 幸
	平成17年2月16日から		
駒場ファカルティ・ハウス運営委員会	——— 浅島 誠		
, and a second design of the s	平成17年2月15日まで	センターなど	
	木畑 洋一		
	平成17年2月16日から	アメリカ太平洋地域研究センター	
美術博物館委員会 ————		センター長	———— 油井大三郎
自然科学博物館委員会 ————		保健センター駒場支所	
オルガン委員会		保健センター駒場支所 支所長 —————	
教養教育開発室運営委員会 ————			
学際交流ホール運営委員会 ――――		共通技術室 室長	——— 兵頭 俊夫
男女共同参画支援施設運営委員会 ——		学生相談所	
利益相反委員会 ——————		所長 ————	
駒場事業場衛生委員会 ————			平成17年2月15日まで
	平成17年2月15日まで		木畑 洋一
	木畑 洋一		平成17年2月16日から
	平成17年2月16日から		
		事務部	
部会主任およびその他の前期教育担当グ	「ループ責任者	事務部長	温明 账切
44	. j j dase	新新校 ———————————————————————————————————	
英語		総務課長 ————————————————————————————————————	
ドイツ語		教務課長 —————	
フランス語		教務課長 ————————————————————————————————————	一一一 花田 準一
	±± rm ±# → ±#	字生語号 ————————————————————————————————————	
中国語・朝鮮語			2mt 11. 2de ete
中国語・朝鮮語 ——————— ロシア語 ———————— スペイン語 ————————————————————————————————————	——— 安岡 治子	図書課長 ————	———— 酒井 清彦





駒場Iキャンパスの現状。航空写真

[駒場]2004 SUPPLEMENT

平成17年3月31日 発行

発行:東京大学大学院総合文化研究科

研究科長 木畑 洋一

〒153-8902 東京都目黒区駒場3-8-1

TEL 03-5454-6004 (ダイヤルイン)

http://www.c.u-tokyo.ac.jp/

編集:広報委員会 活字媒体ワーキング・グループ

広報委員長:高塚 和夫 編集委員長:齋藤 希史

編集委員:石橋 純 久保田俊一郎

斎藤 兆史 佐藤 俊樹

開 一夫 増原 英彦

松下 信之 森井 裕一

山本 泰 吉田 朋広

C. ラマール

制作:メディアフロント

〒151-0053東京都渋谷区代々木2-41-2-506

TEL 03-3373-6521 FAX 03-3373-6527

